

爲すに至りしかば、爾來印度の政治は、自然英國政府に隸屬するの姿となりぬ。於此乎其後千七百八十六年に至りて所謂ヘ・ス・チ・ン・グの裁判なるもの起りぬ。此時ボルクは非常なる雄辯を以てヘ・ス・チ・ン・グを攻撃し、彼れは英國の爲めに大功勞あるものなり、然れども土人を虐し、賄賂を取り、盜に類したる處業を爲し、私かに其身を富したるは、恕すべきことにあらずと爲し、國會をして彼れを裁判すべき決議を爲さしめたり。斯くて此裁判たるや未決の間に八年を経過せり、而してヘ・ス・チ・ン・グは終に無罪の宣告を受けしも、彼れは此間に其蓄へたる財産を毀盡し去り、且つ再び印度に歸る能はず、其後印度商會の恩金に由りて、漸く其身を終るものと成り了せり。

次で記すべきは奴隸廢止の問題たるべし。爰にウ・リ・バ・フ・オ・スなるのあり、一豪富の子なり、ピットと同じくケンブリッヂ大學に在りて友とし善かりし、然るに彼れ亦た國會議員となりて、政界に入りしが、當時奴隸の慘狀を聞き、慨然として任ずるところあり、「予れは之れが救主たらざるべからず」と自ら誓ひぬ、

實に當時奴隸即ち黒奴の狀態たるや、悲惨聞くに堪へず、彼等は何んの害をも歐人に加へず、而かも歐人等は彼等の地に行き、猿類を捕へる如くに彼等をつへ來り、之を歐米の市場に賣り、已に賣りたる以上は、生殺與奪の權を其の主
に任せ、曾て法律の之を制するあるなく、之を虐使すること牛馬よりも甚しかりし、而して英船が之を南米のジャマイカ島に運びし數のみにて、當時已に六十一万人以上に達せりと云ふ。於此乎ウ・リ・バ・フ・オ・スは謂へらく、是れ實に英國の恥辱なり、又大罪なり、禁止せざるべからずと。因て之をピットに諮りて賛成を得、時は千七百八十九年、此の議題を挾んで國會に出で、約三時間の大演説を試みたり。國會は之れが爲めに動きたりき、ボルクは之を聴て驚嘆し、議論明確、義理堂々、誰人も此前に立つ能はざらんと首へり、ソ・オ・ックも亦た之を聴て襟を端し、忽ちウ・リ・バ・フ・オ・スの側に立ちたり、而して首相たるピットは固より此議に同じたりき。然れども若夫れ之を斷行せんか、英國の財源は忽ち之れが爲めに沮害せらるべきにより、容易に駭すべきものにあ

らすとの議論の爲めに議會を通過すること能はざりき、否、爾來ウリバーフォースは年々此議案を提げて、議院の壇上に呼號せしも、其理に服するのみにて、其實を擧げんとするもの尠く、ウリバーフォースは畢に其断行を三十四年の後まで見るに能はざりき。然れども此議論の開始せられしは、正に此時にあるを以て、吾人は爰に之を脱き置かざるを得ず。

次には監獄の改良なり。爰にジョン・ハワードなるものあり、所謂博愛義侠の士なり。當時西班牙國に疫病起り、日に幾百幾千人の斃るゝを聞き、自ら起て之を救はんと欲し、己れ自己も金を投じ、人よりも亦た之を集めて、西班牙國に渡りしが、歸途佛艦の爲に捕へられたり、蓋し當時は七年戦争の最中にて、英佛戦を交へ居たればなり、而して佛の牢獄に投せられたり。然るに牢獄に入りて周囲を見れば、残忍非道、言語に絶せり。重罪も、輕罪も、男をも、女をも、皆同じく一室に閉籠められ、恰も下等動物を一檻に入れたるが如く、醜行、汚言、喧囂、亂雜を極むるのみならず、之を待つに暴腕虐手を以てし、宛然地獄に投せられたる觀ありし。於此乎其後贖はれて英國に歸り來るや、人道を此の方面に唱へて、専ら此れが改善に従事し、罪は罪として論すべきも、人は人として取扱はざるべからずと主張し、監獄の目的は人をして改悔せしむるに在り、決して懲罰のみを以て其主眼となすべきにあらずとの一大議論を吐き、其れより英國は固より歐洲各國を巡遊して、當局者に其議論を訴へ、こゝに監獄良善の一大門戸を開くに至れり。斯くて英國に於ていよゝゝ其改善案の實行せられ始めしは、即ち此ビット時代よりなりし。吾人はこゝに此事を長く語る能はず、然れども當時英國に於て死罪を以て罰せらるべき法律が二百ヶ條以上もありて、五シリングの金若くは其價格の物品を盗みたるものは、直ちに絞罪に處せらるべきものたりきと云へば、其亂暴や知るべく、其監獄の狀態や察すべきにあらずや。

次には言論の自由なり、此自由は已にウィリアム三世時代より得つゝありしものなりし、然れども未だ十分なる能はざりし。例へば國會に於ける代議士の演

説の如きは、一々之を新紙に載するを得ず、特に其王室に攻撃の鋒を向けたる種類の如きものは、最も嚴禁なりし、然るに此時代より國會の言論は一々之を公衆に報ずるも差障なくなれり。斯くていよく國民が國會の議論に賛否を表し得る標準を得たるは、立憲政體に於ての大進歩なりし。

ピットは最も平和を愛したりき、而して専ら國家の生長を念じたりき。左れば此際勉めて親交を外國に保ち、米國に對しては最早や敵意を挾まず、相互の貿易を盛んならしめ、佛國に對しては、更に通商條約を結びて手を握り、從來佛國に渡るものは、一々渡航免狀を要せしも、這回之を廢したりき。於此乎敵黨なるフオックスは議場に於て、彼れを擄掠し、ピットは父チャタムがあれほど嫌ひなる佛國を好むものとなれりと云ひしに、ピットは直ちに答へて一旦喧嘩したるものとは、何時までも喧嘩せんと欲する如きは、己れの小を示すものにて、寧ろ兒心を脱せざるものなりとて、己れ年少にてありながら、老熟の大政治家に一大打撃を加へたりき。更に又た愛蘭に向ふては、古來より之れに加へ

居る制限を除き、之をして英國と平等なる地位に立たしめんと企畫し、可成公平なる政治を英國の内外に施かんと試みたり。特に風俗に到りては最も心を之に用ひ、身を以て民を率ひしかば、下より上に賂ひ、上より下を買収する如き悪習は、此時代を以て殆んど終焉を告げぬ。加之道路を改造し、運河を新鑿し、商業をして交通の便を得せしめしかば、當時機械の發明及び工業の發達と相待て(後段に記する通商貿易及び工藝の部を見よ)見るに英國をして宇内最第一の富國とならしめたり。吾人は今や政治史を記するものなり、故に爰に之を詳説せず、而かも此等の功績を擧げ來らば、ピットが僅か廿有四歳より國政を執り、其後十七年間、ポルク、フオックス等の大政治家を壓倒し去り、永く國民に信望を繋ぎて、其内閣を維持せし所以のもの、決して偶然にあらざるを知らん。斯くて此時代に於て最も特筆大書すべきものは、彼れ佛國の大革命ならん。

佛國の大革命は千七百八十九年に破裂したりとするを適當とすべし、(佛國史中に詳かなり)。此時に當りて佛國人民は最早や多年の壓制に服すべくもあらず、

將に大波瀾を捲かんとせり。因て其王ルカ十六世は、百數十年以前より開くことを止め居たる國會を召集し、民と共に計るの道に出で、以て人民の心を柔げんとせり。於此乎當時佛國に對する處置に就き、英國の國會に於て議論三派に分れたり。民黨の一首領たるフォックスは曰く、是れ實に賀すべきこと也、鬼に角に自由の勝利たればなり、故に吾人は王黨に同情を寄すよりも、寧ろ彼れ自由を叫ぶの國民に大同情を寄せざるべからずと。然るに同じ民黨の一首領なるも、ポルクは曰く、否々、吾人は自由の勝利を賀す、然れども今回の佛國の革命たる、國會を開き、代議政體を起すを以て満足すべき種類のものにあらず、必ず王を廢して共和政體と變じ、共和政體に變じたる以上は、之を他の國民に強ひ、他の國民をして亦た同じく佛國に倣はしめんと勉むるに相違なし、然則英國は固より歐洲の總ての王國に禍せんこと疑ひなし、此故に今の間に十字軍を起し以て此革命を壓へざるべからずと、而して吾に之を議論に於て呼號したるのみならず、其人民の己れに附加ざるを見るや“*The Reflection on the French revolution*”

なる一書を著し、之を世に公にし、否と筆を以て戦ひたりき。然則ピットの態度は如何ありしか、ピットは元來民黨なり、然れども今やジョージ三世と結んで、其擁護者となり居るとなれば、先づ王黨と目せられり可なるものとす、於此乎理正にポルクに和すべきものなりし、然れども壓制は彼れの好むところにあらず、殊に當時佛人の爲すところは、王をして立憲政體を起さしめ、以前の專制政治に引き代へて、國民的政治たらしめんと努むる如く見へしかば、寧ろフォックスに同情を表し、十字軍を差し向くる如きは、以ての外の事也と論辯せり、尤も事實眞にポルクの言の如くなるに於ては、固よりポルクに和するを躊躇せずと明言せり。於此乎徐ろに事の成行を見てありしに、其後佛國にては、事態益々激烈を極め、果してポルクの言の如く、以前の階級を盡く打壊し、貴族を撲滅するの舉に出で、終に王をも殺して、平民一揆の如きもの力を得、實に共和政體を打建つるのみならず、凡そ王政は眞理に協はず、只だ此の人權を土臺とする共和政體こそ眞理に協ふものなれと叫ぶに至りぬ。ピットは元來

平和の人なり、故に多年の仇讐を忘れて、佛國と好意的通商貿易を結びしなり、又た其心を内政に凝ぎ、更に社會の改善に力を盡し居り、英國をして何處までも戦争の渦中に投せざらしめんと希望したるものなりし。此故に此際最早や佛國の人民に同情を有せざるに至りしと雖ども、猶ほボルクの如く兵を以て佛民を壓せんまでは思はざりき。兎角する中、埃帝と普王相合して兵を出し、佛民の議論と動作とが、我が國民に傳染せば一大事なりとて、直ちに佛と戦を開くに至れり、而かもピットは猶ほ決せず、此際和蘭をして此戦争に關係せしめざらんとし、己れ埃普と佛との中間に入りて、猶ほも平和に肩を結ばしめんと謀りつゝありし。然るに其後西班牙も亦た佛に抗して立つに至り、其戦亂の結果として、和蘭も遂に其中立を保ち難く、之れが爲めに佛軍の襲ふところとなりたれば、ピットも今は之れまでなりとて、漸く佛に抗せんと決心するや、彼れ佛は之を知り、先んずれば即ち人を制するの途に出で、彼れより先づ英に向て宣戦を布告し、直ちに英國并に宇内に在る英領を襲ひ始めたり、時に千七百

九十三年。

吾人は爰に戦闘記を載するの時を有せず、是故に一括して之を云はゞ、此時即ち千七百九十三年ヨーク公は一萬の大兵を率ひて伯耳義に出で、以て同盟軍に投じたり、而かも同盟軍の氣一致せず、終に佛の爲めに崩され、其翌年は當時佛の一名將にして後日宇内の大立物となりたるナボレオン・ボナパルトの爲めに更にツローンより逐はれたり。尤も海戦に於ては英常に佛を制したりき。同年六月には有名なる提督ハッ、佛の海軍を快くオーサント島附近に破り、軍艦七隻と八千人とを滅したり、而して間もなく和蘭が佛に呑まれて佛領となるや、英は印度のセーロンと南阿の喜望峰とを和蘭の手より奪ひ去れり。次で千七百九十五年流石の英國民も戦争の爲めに其貿易を沮害せらるゝこと大なるを見て、平和を願ふ志あり、依てピットは此機を利用して、佛と條約を結ばんとせしも、今や佛は破竹の勢にて埃普を回ませ、西班牙を降し、伊太利を壓し、傲然宇内を睥睨するの盛境に達せしかば、非常なる申出を爲して肯かず、因て英も終に

之を容るゝ能はず、其翌年と翌々年にかけて大激戦を爲し、大陸に於ては所在佛の爲めに潰敗したるも、海上に於ては常に優勢を占め、聖ジインセントにて、カンベル、ダウンにても、能く敵を破り、敵が愛蘭より上陸せんと企てしも、盡く之を逐ひ拂ひたり。然るに其翌年即ち千七百九十八年に至りて、こゝに英國がいよゝゝ世界を驚かしたる勝利を得たりき。當時敵將ナポレオンは、已に伊太利を征服し去り、銳を轉じて亞非利加に渡り、直ちに埃及を占領せんと試みたり。然るに爰に英國に於て、一人の英傑現はれたり、其名をホレーショ、ネルソンと云ふ、細身瘦骨、一見婦人の如し、然れども眼光是爛として人を射、容貌何處となく凄愴を帯び、侮るべからざるの概あり、幼より恐怖を知らず、一夕風雨雷鳴の間に路を失して家に歸らず、家人心配して之を尋ね、携へ歸りて後彼れに問ふて曰く、兒は怖からざりしやと、然るに彼れは答て曰く、怖とは如何なる意ぞ、兒は未だ之を知らずと。然り渾身皆膽とは眞に彼れが謂ひなりき。然れども家貧ふして十分なる教育を受くる能はず、早くより一軍艦の給

使となり、空しく海上に其運命を漂はし居りしが、一日己のが不遇を嘆じて、將に水中に其身を投せんとし、而して忽ち醒へらく、否々男子死を期して起つ、夫れ何事か成らざらんやと、其れより已に死したりと覺悟しつゝ、萬難千苦を凌ぎ來りしが、果して上官の顧みるところとなり、遂に水師提督にまで昇進するに至りしものとす。左れば今回英佛の戦端の開かるゝや、向ふところに軍功を奏しつゝありしに、今やナポレオンが軍艦に兵士を舐して埃及に上陸したりと聞くや、直ちに其蹤を追ひ行けり、而してナイルの大海戦となりたるなり。此役や佛艦は英艦よりは優勢たりし也、然るにネルソンは最も大膽なる作戦計畫を爲し、先づ半隊をして敵の後に廻らしめ、而して半隊をして其前より進ましめ敵を中間に挟んで攻め立てしかば、敵は狼狽爲すところを知らず、終に全滅の運命に會はされたりき。次で英國が此の那翁に對して大打撃を加へたるは、小亞細亞に於けるエーケル港の役なりき、那翁は埃及を蹂躪するや、直ちに兵を亞細亞に進め、到るところ土耳其領を侵し、遂にエーケル港に來れり、然る

に此處に同じく英國の海軍司令官にてサ・ア・ジ・ド・ニー・ス・ミスなるものあり、土耳其兵と相合して堡壘を築き、敢然那翁の大軍に抗して戦を挑みたり、那翁は伊太利を征伐してより、今日に至るまで、連戦連勝せざるなく、「予には不可能の事なし」とて傲然たりし、而かも鼓爾たる此の一小港を八重九重に圍みて、攻めたるも抜く能はず、更に英人をして名を爲さしめぬ。

ア、吾人は此際猶ほ多くの戦役を記せざるべからず、而して前條のものよりも猶ほ或は大切なるものあらん、而かも最早や時を有せず、是故に一先づこゝに戦闘記を擱め、直ちにピット時代の終末に走らざるべからず。

偕も戦争は右の如くにて繼續せり、然則ピットは此間何事を爲しつゝありしや、曰く最早や何事をも爲す能はざりし、人民は戦争熱に浮かされ、ピットが内治改良の事などには、最早や耳を傾けずなりぬ。加之ピットが最初にホルクの言に聴き、早く佛を壓しつけ居たらんには、かゝる大戦に到らざりしものをご評して、ピットの人望は漸く地に落ち、其運命も近き將來に迫りたりと見へたり。

然るに此に一問題起りたり、彼れ愛蘭は當時英國に屬すとは云へ、未だ英と一體となりたるものにはあらず、國會を別にし、法律を別にし、慣習を別にし、唯だそれ英より派せらるゝ總督を其主に置くに過ぎざりし。於此乎謀反絶へず、今回も佛の大革命を聞くや否や、かねて佛と同宗教國即ち天主教國たるの故を以て、逸早く佛に同情を表し、此際愛蘭をして英より全く獨立せしめ、而して共和政體を打立てんとせり。佛はまた之を知りたり、因て千七百九十六年、一には英を襲はんが爲め、二には此愛蘭の謀反を助けんが爲めに、戦艦と兵士とを差し向けたり、然れども前條に見たる如く其志を得ざりしが、其翌々年に及んで、彼れ愛蘭の天主教黨はいよく反旗を翻へして起つに至れり、而して此謀反たるや間もなく壓服せられしとは云へ、ピットは之を見て、かねて其父が試みて失敗したる遺志を成就せしめんと欲し、此際英愛合併の議案を出し、一方には愛蘭の議員を買収して、彼等をして自ら愛蘭の國會を解かしめ、一方には多年の禍根を絶つべき旨を英國の議員に説き、遂に愛蘭をも蘇格蘭の

如く一國會の下に連がるものとなりしめたり。於此乎從來天主教者は議員若くは公吏たる能はざる制規なるも、此際英愛を通じて此禁を解くべしとなし、極めて公平なる處置に出でんとせしに、今日まで百事ピットに任じ來りしジョージ王も、かねて天主教者を以て治安を妨害するものと信じ居たるものから、此事のみは頑として聽かず、『凡そ斯る議案を出さんと欲するものは、唯り我英國の敵のみならず、又た予れ一個人に對する敵なり』と主張せしかば、ピットは終に其職を辭するに至れり、時に千八百一年。

アッデングトン内閣時代

アッデングトンは當時に於ける第二流の

人物のみ、然れども民黨分裂して之を統ぶるものなき折柄なれば、ジョージ王の意に任せて、此人の内閣となりしなれ。然るに此時に當りて佛との戦争未だ終らず、前年即ち千八百年には地中海に於ける佛の要港マルタ島を占領し、今年は將軍アバクロンビーを埃及に差し向け、那翁が殘し置たる兵をカイローに降し、更に北海に鋒を轉じ、當時已に佛の手足となりて働ける丁抹を征し、英

の益々爲すあるを示せしかば、當時已に第一執政となりて佛の大權を握れる那翁も、自國を整理する上に暫時の平和を望み、英も亦た大損害を受けたれば、兩者互に交綏の姿を呈して、こゝに平和條約を結ぶに至れり、之をアミヤンの平和條約と云ふ、時に千八百二年。

然れども那翁たるものは、元來歐洲全國を征服せんと企つるもの、是故に機を見て更に起つべきは、理の最も親易きところなりしが、右の平和條約後未だ一年も経ざるに、果して那翁は更に征英の準備にかゝれり、於此乎千八百三年、いよく互に宣戰の布告を出したり。然るに此時に於ては佛國も種々の變遷を経て、彼の以前に叫び出したる自由の聲も、いつしか那翁の如き專斷家に壓し去られて、今は天下を擾亂する怪物國と變じたれば、英の佛に對する國論は、實に大敵愾心を以て充さるゝに至れり。民黨も最早や其議論を異にせず、一齊に彼れ怪物を征せよと叫び出せり、時の學者にして民黨の一名士たるゼームスマックキントッシュも呼ばつて曰く、今や大陸は正に彼れの膝下に跪かんとす、

此故に若夫れ英國にして倒れんか、『專斷政治』は長く歐洲の全土を支配するに至るべし、吾人は自由と正義との爲に起たざるを得ずと、而して是れ一般英國人民の當時任じたるどころなりし。那翁も亦た英人の頑強なるを見て、而して解へり、『吾人をして六時間英國海峽の主人たらしめよ、吾人は即ち世界の主人たるものなり』と、蓋し英の海權を制せば、天下また懼るゝに足るものなしとの意なり。左れば此際大々的の企畫を爲し、已に十萬の陸兵をブローニウに出し戦艦并に運送船は、大小合して數百を備へ、一舉直ちに英國を衝かんと試みたり。因て英國に於ても亦た之れに應ずるの覺悟を爲し、斯くなる以上は先づアデングトンの如き第二流の人物を、内閣の上に置くを不適任となし、再びピットを起たしめよと叫ぶもの多かりしかば、ジョージは更にピットをして内閣を組織せしむるに至らしめぬ、時に千八百四年。

第二若ピット内閣

ピットは再び内閣を擔ふて立ちたり、而して今ぞ所謂る舉國一致の大勢力を示すべき時なりと爲し、嘗て己のが敵手たる民黨の

首領フォックスをも内閣に入れんと企てたり。然れども執拗強きジョージ王は断じて之を允るさゝりしかば、ピットも今は止むなく、從來アデングトン内閣に居たる第二流の政治家を以て満足し、引き立たぬ氣を引立てつゝ、いよいよ大責任を帯ぶるに至れり。然るに此時に當りて英國人民は最早や内閣の如何よりも、外患已に目睫に迫りて、今にもあれ、佛の大軍押し寄すべしと聞へしかば、當時エリサベス時代に現はしたる如き愛國心を發揮して、海岸に赴く義勇兵は流を爲し、幾萬と云ふ數を知らず、夜は數十里の間炬火を以て照らされたり。於此乎那翁も已に其襲ふべからざるを知るや、鋒を轉じて大陸に向ひしが、間もなくこゝに有名なるツラファアルガルの大海戦となりしなり。ツラファアルガルは西班牙南端の一岬なり、此時例の海軍司令長官たるネルソンは、那翁來らば、其艦隊を粉碎し呉れんと待ち構へ居り、那翁が鋒を轉じて大陸に向ひしと聞き、聊か失望の態なりしに、間もなく佛西の艦隊相合して總數四十隻ばかり、佛港を出でたりとの報に接し、直ちに之を追蹤し、即ちツラファアルガル

の戦となりしなり。此時英艦は卅三隻より多くを有せざりし、然れども未だ曾て敗れたるとなきネルソンを戴けるとなれば、意氣已に佛艦を呑み、ネルソンが「英國は各人に義務を要む」と云へる有名なる語を信號旗を以て其士卒に告げし時の如きは、之れに利して賛同を表する聲は、各艦に響き渡りて、百雷の一時に落つるが如く、之を聞きたる佛の司令長官グイルニューグをして其士氣の振へるに驚き、未だ戦はざるに「ア、我れ敗れたり」と謂はしめたるほどなりき。左れば此戦に於てネルソン戦歿しぬ、而かも勝利は全く英に歸し、佛艦の三分の二は撃沈若くは捕獲せられ、佛の長官グイルニューグは生擒せられ、佛の艦隊は全く此時を以て海上に終焉を告げしなり、時に千八百五年十月廿一日、ネルソン時に漸く四十七歳。然るに電信のなき當時の事なれば、那翁は己のが艦隊が斯くも全滅されしを知らず、其後埃をウルムに撃て之を破り(恰もツラツアルガル海戦前三日なり)更に逐ふて埃都ウヰンナに迫り、オースタルリッツの戦に於て埃露の聯合軍を壓滅し、いよいよ歐洲を吞吐するの勢となり、歐洲爲めに

震駭せり。左ればピットもツラツアルガルの戦勝を聞きしときには、一時大に悦びて、「英國は其の勇氣に由りて、唯り自己を救ひしのみならず、又た其模範に由りて歐洲を救ふべし」と絶叫せしが、今や那翁が大陸に於て博したる此大勝利を聞くや、前途を望んで憂憤の情禁すること能はず、かねて勞苦の爲めに其身を損じ居りしが、此時より俄かに弱りて復た起たず、病室の壁にかゝれる歐洲地圖を指して曰く、「かれを巻き去れよ、其物も此十年間は無用たるべし」と、蓋し當時彼れが畫しつゝありし大陸聯合策の破れたるを以てなり、而して間もなく死せしが、其の死せんとするとき、何言か口中にて云へるあり、由て侍人耳を附して之を聴きしに、「オ、我國よ如何に吾れ汝を見棄て、去り能ふぞ」と、獨語しつゝありしと、時に千八百六年一月、年齢はネルソンと同じく四十七歳なりき。

グランヴィル内閣時代

ピットの死せし後、各派の政黨相合して内閣を組織したり。貴族的民黨の首領グランヴィル總理となり、純然たる民黨の

首領フォックス大立物となり、王黨の首領シッドマス卿之に混じ、暫く内争を止めて外敵に當らんと相談を遂げたり。然るに此時に當りて那翁は益々勢力を得て、埃と露とに大打撃を與ふるや否や、直ちに普都伯林を差して繰り出したり。左れば普は使を馳せて救援を英國に求めたり、依て英は直ちに佛を襲ひ、以て那翁を牽制すべき舉動に出づべきものなりしを、兎角に機敏の處置に出づる能はず、グヅク評定のみに目を送る中、千八百〇六年の十月、那翁は遂に伯林を陥れ、最早や英國の外天下に敵なきを見るや、所謂大陸組織なるものを起し、爾來英國を封鎖すべきに由り、凡そ歐洲大陸は如何なる國たるを問はず、英國と貿易若くは交通するものあらば、其船は悉く奪ひ、其人は悉く捕虜と爲すべしと規定し、之を伯林より天下に公布せり。此公布たるや固より一片の紙たるに過ぎざりし、然れども當時那翁の威力たるや、殆んど全歐を壓するに至りしかば、英國は之れが爲めに孤立の地に立ち、前途暗澹として、人々不安の念に襲はれたり。加之此年フォックス死して、グランヴィル内閣の重力を

減せしかば、其運命も亦た長かるまじと噂せられしに、果して此内閣も何んの爲すところもなく、唯り此際ウリパーフォースの叫び來れる奴隸廢止の一部即ち爾來新殖民地に奴隸を禁ず、且つ英國二國の外へは奴隸を運ぶ能はずとの議案を通過せしめたる一美事を遺したるのみなりし、而して更に進んでかねてピットの唱道したる如く、此際天主教者をも海陸軍の公職に就かしめ得べしとの議案を呈出せんとせしが、復たジョージ王の拒むところとなりて辭職するに至りぬ、時に千八百七年。

ポートランド公内閣

次に來りしはポートランド内閣なりし、而かも其實は此際外務大臣となれるカンニングの内閣なりし也。カンニングは嘗て若ビットの部下に居て才名を擧げ、爾來下院に居て其黨の牛耳を執り居たる極めて壯快なる人物なりし。然るに此時に當りて那翁は伯林より更に進んで露に當り、大に露を破ると同時に、露が埃普の二國に比すれば、案外強剛なる抵抗を爲したるを見て、急に之れと和せんと欲し、其後露帝アレキサンドルと親交

を結び、「天下の英雄は唯だ君と我とのみ」と云へる如き諛言を呈しながら、依て以ていよく英國を苦るしめんと企てたり。然れどもビットの精神を引き繼げるカンニングは、倒るゝまでも那翁の如き怪物には、我が頭を下ぐべきにあらずとなし、大膽にも當時那翁と歴山王とが握手し居る附近に軍艦を派し、今や那翁の手足となりて働ける丁抹の全艦隊を襲撃し、盡く之を破砕若くは捕獲して還れり、時に千八百七年の七月なりき。然れども那翁に於ては之れが爲めに些少の打撃だも蒙らず、益々破竹の勢にて全歐洲を呑むに至りしが(佛國史中に詳かなり)、幸にもこゝに英國の爲めに一大機會を興ふるもの出で來れり、西班牙人の謀反即ち是れなり。當時那翁は西班牙王に約して葡萄牙の半を興ふべき旨を以てし、而して之を亡ぼさしめたり、然るに葡萄牙の亡ぶるや、曾に之を彼れに興へざるのみならず、西班牙王を呼び出して之を捕へ、無理に迫りて其位を己のが弟なるジョセフ・ボナパルトに譲らしめたり。於此乎西班牙國民は其不實を憤り、其奸策を惡み、一齊に振ひ起りて謀反せり。往時に英國は普を援

くること能はずして悔恨と恥辱とを貽したりき。左らば此機失ふべからずとなし、直ちにジョン・モールとアーサー・ウエレスレーとに兵を授けて之れを西班牙半島に差し向けしに、ウエレスレーは一萬五千の兵を以て、佛の驍將ジュノーをウイニョラの野に破り、直ちに葡萄牙の都リスボンに迫り、間もなく之れを占領したり。尤も西班牙の方面に向ひたるジョン・モールは、其の後那翁の親征に會ふて進む能はず、兎角する中、佛の一名將ソールの逐ふところとなり、終にコランナの港に於て大激戦を爲し、英國勇士の面目を辱かしめざりしも、ジョン・モールは此に討死して畢竟大敗を免かれざりしかば、英國の人民は之を聞て膽を冷やせしかども、カンニングは猶ほも巍然として動かす、直ちに一萬三千の新兵を送りて、葡萄牙に在るウエレスレーに附せしめ、今や那翁に蹂躪せられて、意氣の沮喪せる西班牙を援けしめたり。抑々此のウエレスレーとは何人ぞ、之れぞ是れ後日ウオータルローの戦に於て、遂に那翁を撃破し去り、之をして其運命に終焉を告げしめたる、ウエルリントン侯其人なり。ウエレス

レー即ちウエルリントン侯は其性鈍なり、故に幼少の時には、其母之を馬鹿と思へり、然れども其鈍なるや、豚の如く鈍なりしにはあらず、牛の如く鈍なりしなり、こゝを以て一び角を向けて進むときは、斃るゝとも退かず、若くは其目的を達せずんば止まざりし。左れば今回新兵を得るや、直ちに西班牙を差して繰り出せしに、例のソールトは霧日にシロン、モールを逐ひたる経験あるを以て、頗る英兵を輕んじ、途に要して之を脅かせしも、忽ち之を擊破し去り、次でクラウエラに於て大勝を博せしかば、敵はウエレスレーの尋常一様のものにあらざるを知り、ソールト并にチー及びモーチエーの三將相合して、ウエレスレーを挾撃せんと企てたり。依てウエレスレーは之を知り、一時其銳鋒を避け、元の葡萄牙に引き返せしに、西班牙人はウエレスレーが俄かに勇を落したるに失望せり、然れども佛の三將は虚を喰つて舌を卷き、之れ實に容易ならざる大敵なりと互に語り合へりと云ふ。其れ然れども之と同時に白耳義の方面に送りたる四萬の大軍は、ウアルケレンの役に大敗を受け、其半を失ふて歸

りしかば、英國の國論は之れが爲めに沸騰し、之を現内閣の罪に歸して罵々たりき。然るに此大軍たるや、時の陸軍大臣カッスレーの自ら任じて出したるものなりしかば、カンニングは其責を此のカッスレーに負はせて、同じく之を罵るの態度に出でしに、終に此二人間の決闘となり、此内閣は之れが爲めに破れたり、時に千八百九年の九月なりき。

パーシヴァル内閣時代

次で來りしパーシヴァル内閣は、ウエレスレー將軍の兄弟なるウエレスレー侯を以て外務大臣となしたる同じく王黨内閣なりし、而して此内閣も飽くまで那翁に反對せんとするものにてありき。然るに此時に當りて那翁の勢や、益々熾んにして、最早や全歐洲に於て、彼れに敵するものなきに至り、其の之れに抗し居るは、獨り英國のみとなりしかば、流石の英國人も稍々不安の念を起し始め、其守勢を取るは猶ほ可なるも、進んで大陸上に戦ふは、徒らに我兵を損じ、我國勢を落すに過ぎずとなし、倫敦市民の如きは、進署して速かに葡萄牙より其兵を引き揚ぐべしと、内閣に向ふて建

職するに至れり。加之當時佛の驍將マセナが八萬の精兵を引率して葡萄牙に向ひ、將に英軍を壓殺せんとすと聞へしかば、パーシヅアルも大に之を心配し、直ちにウエレスレー、否、此時は已に華族に擧げられて、ウエルリントン侯となり居たる、其のウエルリントン侯に意見を徵したり。然るにウエルリントンの答に曰く、「夫れ我國の名譽と利益とは吾人をして此に立たしむべきを要む、而して予は之を試みん」と。於此乎ウエルリントンは直ちに英兵二萬八千と葡萄牙の兵二萬五千とを引率して、マセナに當るの覺悟を爲し、いよゝゝ千八百十年の九月に至りて、こゝにブラコ山上の戦となり、次でトルレス、ウエドラスに於て衝突し、更にフエンター、デ、オルルの大戦となり、佛軍は終に其半を失して退却したりしがば、歐洲の天下は之を聞て、始めて大英雄の現出し來りしを知り、英國民は之を聞て、狂喜雀躍禁するところを知らず、英國萬歳、パーシヅアル内閣萬歳と誦ひけり。

然るに其翌年に至り、ジョージ王は最早や七十三歳の高齡に達し、其愛女を亡

ひたるを近因と爲し、其精神に異狀を呈したるより、皇太子の攝政となりしが、此皇太子は寧ろ民黨に同情を有せしより、パーシヅアル内閣も爾來敢黨に乗せらるゝの虞あるを免かれず、從て内閣の爲に外機を失し、此一ケ年間はウエルリントンをして殆んど何事をも爲すこと能はざらしめしかば、國論がパーシヅアル内閣を攻撃し始むるや、一日狂漢あり、下院の一室に於て、パーシヅアルを暗殺し去りたるを以て、此の内閣の瓦解となれり、時に千八百十二年の三月なりき。

リーヴァープール伯の内閣時代

此時に當りて民黨は皇太子を擁して民黨内閣を組織せんと企てぬ。然れども能はざりき。リーヴァープール伯は凡々たる人物なりし、然れども當時大戦久しきに亘りて、國民漸く之れに倦み、寧ろ平和の終局を見んことを望みしかば、非常なる氣慨家よりも寧ろ温和の執政者を望みたりき。

然るに此内閣となるや否や、爰に二大出來事起りたり、一は那翁が露國征討の

途に上りたることと、一は更に米國と戦端を開きしこと即ち是れなり。
 米國と戦端を開きたること及び其原因と戦役等に至りては、詳かに之を米國史
 中に述べたれば、こゝには云はず。然るに那翁は米國が英國に向ふて宣戰を布
 告したる僅か六日の後、即ち千八百十二年六月の廿四日、いよくニーメン川
 を横ぎりつゝ、モスコを差して繰り出したり、而して此のモスコ役の大失
 敗に就ては吾人之れを佛國史に譲りて、此處には之れを説かざるべきも、英國
 の方に於て之を云はゞ、那翁が征露の役に上らんとして、西班牙及び葡萄牙の
 方面に於ける大兵を漸次引き揚げつゝありと聞ぐや、今日まで守勢を取り居り
 しウエルリントンは俄かに攻勢を取るに決し、先づ出で、シエーダッド、ロドリ
ーゴ及びバダホースを陥れ、恰も那翁がニーメンを渡りたる當時には、已にサ
ラマンカに迄押し寄せ、爰に大激戦を試みたりき。此役やウエルリントンは四
 萬の英兵と二萬の葡萄牙兵とを率ひて戦ひ、佛將マルモンも亦た數萬の兵を率
 ひて戦ひしが、遂に勝利は英に歸し、佛は八千の兵を亡ひ、七千人を捕虜とせ

られたり。而して此戦勝の結果として、忽ち西班牙の都マドリッドもみるゝ
 中に英軍の領するところとなり、其王たりしジョセフ、ボナバルトも逃げ出すに
 至りたり。尤も其の後佛軍が大兵を各地より招集し、再舉以て會稽の辱を雪が
 んと企て、銳鋒頗る當り難きものあるに至りて、ウエルリントンは更に葡萄牙
 に引き返したりしとは云へ、實にウエルリントンの威望は、當に南歐を壓する
 に至れり。

斯くて那翁がモスコより大敗して歸りたるの報に接するや、千八百十三年の
 五月、再び兵を引て西班牙を襲ひ、此度は盡く佛軍を此の半島より逐ひ、ビレ
チース以内、また敵を見ざるに至らしめたり。

其れより十月に至るや、敵將ソールトが善く拒ぎたるにも闕はらず、更に佛軍
 をリダツアに破り、於此乎始めて佛國に足を入れ、終にオルターに大勝を得て、
 將にパリーに迫らんとせり。然るに此時に當りて那翁はいよく同盟軍の爲め
 に驅逐せられ、知らざる間にパリーの陥落となり、畢に降に入るゝに至りしか

ば、大戰は一先づこゝに局を結びぬ(佛國史に詳なり)時に千八百十四年の三月なり、而して同年十二月には米國との平和條約も亦た調印せられたりき(米國史中に詳なり)。

斯くて那翁は降を入れたり、於此乎佛國史中に見る如く、同盟國は相讎して、此怪物を終身地中海の一孤島なるエルバに封ずることとなし、さて此れより善後策を講せんとて、埃都ウヰンナに集り、埃の宰相にて時の癖物たるメタルニヒを會長となし、獨の名將ブルツヘルも我が英雄ウエルリントンも之れに會し、其他露も普も皆各々其國の代表者を出して、然らば今後の歐洲を如何にせん、那翁に裂れたる土地を如何に處すべき、露は波蘭の全部を貰はんと云ひ、普はサキソニーを得んと云ひ、埃と英とは之れに反對し、孰れも歐洲の地圖を眺めて、己のが分配を要求する最中に於て飛報あり、那翁がエルバより脱して再びパリに歸り來り、已に大軍を集めて、戰鬪の準備に着手したりと。於此乎衆皆愕然、俄かに從來の同盟を復し、更に那翁に向ひたり、而して英國の方に於

てはウエルリントン乃ち自國兵の外に白耳義并にハノヰエルの兵を合せ、凡そ七萬有餘を得、之を率ひて白耳義方面より進み、こゝに所謂るウオータルローの大戦となりし也。

此時那翁は十萬餘の兵を率ひて、自己は獨のブリウヘルに當り、其部下第一の將軍チーをしてウエルリントンに當らしめたり。然るに那翁は忽ちブリウヘルを敗り得しも、チーは兎角に志を得ず、因て那翁の來るを待て、共にウエルリントンを掩撃せんと企てつゝある間に、ウエルリントンは十分の用意を爲し、所謂る決死の覺悟にて、ウオータルローの高原に陣を布きたり。ウエルリントンは未だ曾て一回だも敗れたることなきの名將なり、而して今日まで親しく那翁と兵を交へしことなきを憾みとせり。左れば今回逼く兵士に令して曰く、是れ實に我が生死の界、天下分目の戦なり、各自奮闘以て後世に恥辱を貽す勿れど。於此乎猪突的の那翁に對するには、最初守勢を取るを得策となし、蘇國古代の英雄ウーレースの案出したる方形の陣を各處に布き、さあ來い來いと待ち

構へたり。然るに那翁はブリッウヘルを一蹴して後、チーの處に來り、いよく
 ウェルリントンを一様みに揉み潰さんと欲して、之を眺むれば、其陣形整々ど
 して落着き居たるには感服せしも、我れは十萬に餘る大軍なり(那翁の兵を八萬
 と算する者あり、十三萬と算する者あり、之は實戦に當りし者と全軍を數へし
 ものどに由りて異なるなり)、而して彼れは七萬を出でず、左れば侍者を顧みて
 「我れ已に彼等を得たり」と謂ひながら、忽ちチーに若干兵を授けて、其一角を襲
 はしめたり。チーは疾風の如くに之を捲きたり、因て那翁は遠眼鏡を把て之を
 見ながら、「ア、たはひなし、見よ、見よ、あの陣形も揉み潰されたり、この陣形
 も崩れたり、我勝利定まれり」とて、早くも其状況をバリーに通信せしめたりき。
 然るに交戦終り、砲烟散し、風塵收りて後に之を見れば、兵數は減じたるが如
 きも、其陣形は依然として奮の處に存立したりき、因て更に聲を放てて曰く、
 「英奴は敗を知らず」と。然り當時ウェルリントンは敗を知らざる覺悟なりしなり、
 即ちたとへ兵士をして盡く戦死せしむるも、亦た一步も退かじと決心したり

しなり、那翁は不思議に考へ且つ驚けり、左れば總軍を以て掩蔽せよとて、い
 よよ全力を擧げて懸り來れり。於此乎白耳義兵先づ潰へ、次でハノヅエル兵
 亡げ始め、英兵も將に崩れんとせしかば、ウェルリントンは此處ぞ大事と、
 忽ち馬を陣頭に馳せ、大音を揚げて叫んで曰く、「嗚呼我兵士よ、今なるを今に
 して退かば、我事終るべし、然則英國なる同胞は果して何んと云ふべきぞ」と、
 而して總ての將官をして亦た之を叫ばしめしかば、兵士は即ち之れに答へて「君
 よ心配する勿れ、吾人は吾人の義務を知る」と答へつゝ、更に盛り返して奮闘し
 たりと云ふ。

那翁は終始丘上に在りて、此等の戦闘を眺め居たりき。然るに此時に當りて、
 遙かに前面を指して叫ぶものあり、曰く、「獨軍來る」と、然り獨のブリッウヘルは
 那翁に一撃を受けたりしも、今やウオータルロットの戦酣なるを聞き、之を救は
 んとて出で來りし也、那翁は之を聞て須破一大事と思ひたり、依て今や最後の
 爲めにとて遣し置きたる、己のが近衛騎兵を放ちたりき、蓋し此騎兵は那翁が

秘藏のものにして、容易に用ゐざるところのものなりき。然るにウエルリントンも左る物にて、かねて斯くあらんと覺悟したれば、是れ亦た己のが軍隊の華たるべき親兵數千人を、今猶ほ戦はしめず、地中に溝を穿て隠し置きしが、此時親ら號令して、「親兵出でよ」と叫びながら、之を引て之れに當りたり。左らば是れ實に最後の決戦たりしなり、而して勝敗未だ何れに屬すべきやは測り難かりしに、此時に當りて、獨軍は已に近き來り、大小砲を放ちながら、那翁の右方より迫りしかば、英軍の勇氣は、いよゝゝ此に百倍すると同時に、佛軍は終に支ふる能はず、總崩となりて崩れたり。左ればウエルリントンは時機を失はずして號令し、皆起て佛軍は逃げるぞ」と叫びながら、忽ち攻勢を取て進撃し、那翁の丘上を見掛けて突貫せしに、那翁は「嗟呼我事暫時了る」と獨語しながら、パリを差して亡げ去りたり。蓋し爰に暫時と云へる一言より察するも、猶ほ其豪氣の挫けざりしを見るに足る、時に千八百十五年六月の十八日、(此より那翁が英國の手によりてセント、ヘレナに流さるゝ迄の事は佛國史に説くべきを以

て、こゝには云はず)。

吾人は比較的長く此戦況を説きたり、蓋し此戦勝によりて、英國が爾來の歐洲を支配するの大勢力となりたればなり。即ち露は那翁をモスコフに困せしめ、其衰落を招かしめたる原因となりしを以て、一時歐洲の立物となりし如く、今や英はウエルリントンに由りて宇内無双の勇國たることを世に示し、全歐洲の人をして盡く舌を捲かしむるに至りたればなり。

然りと雖ども此間英國の損害もまた莫大なりし、例せば國債の如きは九億磅即ち我が九十億圓に上りたりし也、其國民の負擔の重かりしや知るべきなり。於此乎シドニー、スミスは此負擔を形容して曰く、當時は萬民及び百物に税を課せられたるなり、幼少の時は其獨樂に税を課せられ、老ひて死する時には、課税せられたる藥を課税せられたる匙にて呑み、課税せられたる寐床に臥して、課税せられたる醫業家の手によりて終るなり」と。加之此間引き續きたる凶作は、穀物の價をして暴騰せしめ、下民の困難名状すべからず、左れば外國の穀物を

輸入せよとて、漸く之を企て、成功せんとすれば、所謂地主にして國會議員たる者等は、是れ我等にとりての大打撃なりと爲し、農は國家の大本なれば、此際外國の穀物を輸入するは、根本的に我が農業を破壊し去るものなりとの理由を以て、右ウオータルローの戦ありし同年より、此輸入を禁ずるの議決を通過せしめ、英國をして殆んど饑饉の状態に陥らしめたり。又た一時世界を相手として活動したる商業も工業も、此の大戦の爲め、特に彼れ大陸組織等の妨害の爲に、全く通路を遮断せられたれば、貨物は空しく倉庫に朽ち、水車の聲は死して言はざるに至りたり。斯くて更に國家に危険を感せしめしは、所謂勞働者問題即ち是れなり。此時に當りて機械の發明なるもの續々として出で來り、(此方面の事は後段に説くべし)、於此乎此等の機械の爲めに數多の勞働者は其職を奪はれ、忽ち衣食に窮するの途端、今や大战終りて海陸の諸方より解隊の兵士此社會に加るに至りしかば、左なきだも需要のなき勞働者は、いよ／＼其職を得る能はず、往々暴舉に出でんとせり、而して遂に政界に一大動亂を起すに至れり。

當時政界は王黨と民黨とに分れたるなり、尤も前條より見たる如く、此間錯雜限りなく、民黨と見へしものも王黨となり、王黨と見へしものも民黨となり、或は兩黨聯立となり、始終は「民黨的王黨」が勢力を占めしものと見て支障なかりしに、爰に右の如き下民の状態より、新に「急進黨」なるもの出で來れり。彼等は普通選挙を唱へ、國會組織の大改革を促し、今日の代議院は、畢竟富者若くは地主の專領物なれば、速かに之を國民的のものたらしむべしと主張し、文筆に於てはウイリアム・コベットの如きもの最も勢力を振ひ、上下の兩院を通じて之れに同情を寄するもの多からざりしも、所謂中等以下の社會に在ては、日に益々慘狀に陥るのみなれば、乃ち止むなく腕力に訴へ、千八百十六年には皇太子を要請して事成らざりしも、いよ／＼千八百十九年に至りて、こゝに大運動を企て、パーミンガム及びマンチエスター其他各處に公開演説若くは野外集會を爲し、いざと云はゞ、昔時クロンツェル時代の如く、干戈を執て起ちかね

まじき形勢を示し、一人の警官を打殺したるより、忽ち軍隊との衝突となり、六人殺らされ、多数傷き、一時は其場を立去りしが、其翌年に至るやアーサー・シストル、ウードと云へるものを首魁として、現内閣員を盡く暗殺せんと企つるに至りたり。

然れども吾人は此年即ち千八百二十年に至ては、已にジョージ王三世死し、更に他の王代に移りたるを以て、一先づ此に筆を擱し、聊か評論を加へて以て此一章を結ぶことゝなすべし。

論評

顧みればワルポールが平和政策を取りし時に當ては、政界の墮落甚しく、其弊施て百般の事に及び、風俗頹廢し、國勢揚らず、復たクロンウエル時代の英國

にてはあらざりし。然るに此に大ピット現はれ、ウエスレー出で、一は國政の上、一は社會の上に、一大改革を加へしことは、既に前條に見たる如し。然則其後即ちジョージ三世の時代に於ける英國の形勢はそれ如何。

先づ第一着目すべき事は政黨の上なり。ワルポール時代には王あるも無きが如くなりし、是れ其王が日耳曼なるハノッセル家より來りし賓客の如き姿なりしを以てなり。然るに此ジョージ三世となるや、其英國に生れし權利を以て、俄かに政治界の一分子たらんと志し、流石の大ピットも之れと衝突して野に下るに至り、爾來政界は一種混雜のものとなり、時の大立物たるフォックスとボルクとは民黨を代表し、若ビットは民黨より出でたる王黨の如きものとなりしが、これとても變轉極りなく、實に政黨に取りては不愉快なる時代なりき。然れども此間を通じて見るべきものは、同じく大ピット時代より引き継ぎ來れる餘響なりとす。當時の政黨はたごひ王黨の如きものたりとは云へ、決して保守黨には陥らず、絶へず社會の改善を主張し、ツリパーフォースの奴隸廢止、ジョン、

ハワードの監獄改良、天主教徒特に愛蘭に於ける斯教民の自由を欲ひ、議院に於て其多數を得ること能はざりしも、爲政者としての態度は常に民黨的なりし於此乎若ビットをして久しく政權を執らしめたりき。然るにパーシヴァル并にリーグアプールの内閣となるや、遂に純然たる王黨の如きものと化し、従つて保守黨に傾き、乃ち止むなく民黨の上に急進黨を生ずるに至りしなり。個は是れ前條なる記事を読み來らば、自ら分明なるものなりと雖も、漠然と讀過するものに向ふて、特に注意し置かんと欲す。

第二に若目すべきは英國々民元氣の消長なり。大ビットの出づるまでは、英國の國威は宇内の間に衰落し、常に西と佛とに壓倒せられ居たりき。然るに爾來英國の國民が、一び覺醒して起ち上るや、米國に於ては佛の手より加奈木を奪ひ、東印度即ち天竺に於ては、此時を以て始めて併呑の端緒を開き、再びクロンウェル時代の國勢に復せしめたるなり。斯くて那翁との戰となるや、歐洲の天地は露、普、奧、伊、西等一時は皆悉く那翁の膝下に跪きしも、獨り英國の

みは一刻だも之れに屈せず、其相和するや、寧ろ那翁より求めたるものなりき。而して間もなくツラファルガルの大海戰となり、終にウォーダルローの大陸戰となるや、英國は忽ち歐洲の覇者となりたるなり。之れ何を以て然るか、一に英國々民元氣の旺盛たりしに歸せずんばあらず。然則英國人は何に由りて斯る元氣の修養を得たるか、曰く一には往古よりの歴史的關係大に興りて方あるなり、彼等の先祖は嘗て宇内の大關たる西班牙の艦隊を碎破して其勇猛を顯はしたるものなり、クロンウェル時代には、英國一び足を擧ぐれば天下驚愕すと語はれたるものなり、然則一念先祖と其國體とを辱かしめざらんと思へば、懦夫も亦た起ち、怯夫も亦た奮はざるを得ざりしなり、猶ほ我國民が先祖と我國體とを辱かしめざらんと欲して、今や強露に對して大勇猛を振ひつゝあるが如し。(此文を草する今日は恰も旅順第四回攻撃の報に接し、我が水雷艇の三隻が敵の水雷艇六隻を逐ひ、舷舷相摩するまで奮闘し、彼れをして悲鳴をあげて敗走せしめたりと云ふを聞けるの日、即ち明治三十七年三月十四日なりしなり。二に

は多年の教育に「義務を盡すべし」と云へる觀念を養ひ置きたることなり、チルソンの叫びたるも「此義務を求む」と云へる上にてありし、ウエルリントンの兵士の答も、「君よ我等は我等の義務を知る」と云へる言なりし、實に此英國人には父は子に對し、教師は生徒に對し、各々其義務と責任とを盡すべしと云へることを幼少の時より吹き入れつゝあるなり、故に「汝は義務を盡さず」と云へる言は、恰も我國に於て「汝は泥棒なり」と云はると同意味に聞ゆるなり、其死地に入るも泰然として動かざるの精神は、皆此の平生の教育より來るなり、日本も古來より武士道なるもの傳はりあるなり、其今日ある決して偶然にあらざるなり。三には當時の戦争たるや、古來の戦とは其趣を異にし、國民皆各々國家の存亡即ち自己及び同胞の死活の爲めに戦ふなりと云へる觀念を抱きしに依る、古者は君王の嗜好心を喜ばすが爲めに戦ひたるの戦や多し、然るに今や然らず、一び敵の爲めに我殖民地を奪はれんか、我同胞は忽ち死地に陥るなり、況んや我自國にして一び敵國に征服せられんか、吾人は忽ち奴隷の境域に陥るなり、加之此

戦にして首尾よく勝たんか、宇内は我が濶歩横行の地となるなり、我が膨脹の區域内に入り來るなり、而して所謂我が文明の餘澤を坤輿の民に與へ得るものとなるなり、而して是れ英人が時代々々の先進者より、日々夜々に鼓吹せられつゝありし教訓たりし也、於此乎彼等は自任の精神と自國民の死活問題とを念頭に浮べて、自ら其元氣を振ひ興したるものに外ならず、猶ほ我國今日の民が鼓吹せられつゝあるに宛も似たり、其理決して觀難きにはあらず、誰か個中に在る精神的教育を蔑みするものぞ。

第三に着目すべは此際に於ける百般の動機が、實利實益の上に在り、吾人が近世史に説きたる如く、彼れ千古の軍人マルポーが、ル非十四世と争ふに當りて、向ふところ敵なかりしに拘はらず、畢に英人の氣嫌を損するに至りしものは、當時英人が國權よりも、寧ろ貿易の利害に其眼を凝ぎつゝありしを知るべき也。次でワルポールの平和主義なるものも、畢竟國民福を念じて、此際實益を占めんと圖りたるに外ならず、然而して國民が其後ピットを起たしめしも、

是れ亦た實益上より刺激を受けたるに由る。然るに此實利實益たる觀念や、若夫れ士氣と相伴はずんば、支那若くはフレンチヤの運命に陥るべきも、ピットの如きものの出で、自ら率勵したるにより、此實利主義に加ふるに士氣と元氣とを以てせしかば、即ち英國に實利と士氣との兩翼を生せしむるに至りし也。第四に若目すべきは米國に在る殖民地を失ひたる事なり。第五には東印度の大領土を我手に入るゝの端を開きし事なり。第六は那翁と大戦を試みたる事なり。而して第七は更に北米合衆國と開戦したる事なりとす、而かも此等は已に本文に於て委しく事の理由を辨じ置きたれば此に復せず。

附言す、此時代に於ける實業界、學界、宗教界等の消息は、後書の部に載すべし、之を讀んで當時に於ける百事百物の發展如何を想見し來らば、更に一層の興味を感ずることあらん。

第四章

佛國史

ルネ十五世 (自千七百七十五年
至千七百七十四年)

- ルネ十五世の人物
- 内債の強求
- 財政上の大失敗
- ホルゴン公の宰相時代
- フルーリーの整理
- 佛國の相續問題

- オルレアン公の攝政
- 妖術ウニゴウ出づ
- オルレアン公攝政を解く
- 賢者フルーリー出づ
- 歐洲の戦亂
- 宰相フルーリーの末路

- ル#十五世一女に逃ふ
- 更に外戦
- 「メソイト」宗の滅亡
- コルシカを食す
- ル#十五世の末路
- 内亂漸く光す
- 七年戦争間の出来事
- ル#の放埒
- 更に内亂の兆

此一段に於ては拙著「歐洲近世史」の後を承け、ル#十五世時代より、大革命を経て、那翁の没落に至るまでを説く、而して是れ實に佛國のみならず、歐洲の諸國を動亂せしめたる時代と知らざるべからず。

ル#十五世は其會祖なるル#十四世より、「ア、汝位に登らば、神に對する責任を忘るゝ勿れ、勉めて隣邦と平和を保てよ、驕奢を戒しめよ、而して人民の福利を念ひて、之れに全力を傾けよ」との遺言を承けて即位したるものとす。然れども時に齡僅かに五歳、何んぞ其意を解することを得んや、加ふるに多年其會祖が施したる悪政は、容易に改め得べくもあらず、剩へ驕奢淫佚の徒、終始其周圍に侍せしかば、益々國勢の墮落を來らしむるのみなりき。

オルレアン公の攝政

オルレアン公はル#十四世の一女を娶るものにて、ル#十五世の長するまで攝政となれり、而して一時平和主義を把り、兵を減じ、國事犯者を免し、頗る善政を施く如く見へしも、内行修まらず、情弱虛榮の痴物にて、益々國政を誤まれり、而して此間に於ける出来事は左の如し。

内債の強求 ル#十四世の驕奢と戦亂の爲めに、財政全く紊亂せしを以て、此際悪貨を濫發し、兼て内債を募り、無理に國民をして之れに應せしめ、應せざるものには、種々の罪名を附して之を入獄若くは死刑に會はしめたり(暴政漸く來る、革命の時期近づきつゝあり)。

妖僧ジユポー出づ

ジユポーはオルレアン公の師傅なり、奸禍にして濫行の癖物なり、然るをオルレアンは之れを用て内務大臣となし、更に外務に當らしめしに、彼れは英王ジョージ一世の内閣より賄賂を受け、ル#十四世時代より取り來れる政策を一變し、爾來英と同盟し、此れ迄扶助し來れる前英王黨即ち「ジャコバイト」黨を國外に放逐し、更に西班牙と兵を構へたり(西班牙史參

照。然れども勝利の結果は、佛を益せしと極めて尠く、徒らに海上に於ける英の勢力を増さしむるのみとなりぬ。佛國が衰運に向ふの時に當り、オルレアン公及び此妖僧の如きを出せしは、返すくも不幸と謂ふべし。

財政上の大失敗

兎角する中、財政は益々困難を告ぐる折柄、こゝに蘇格蘭のものにてジョン・ローなるものあり、賭博によりて大富豪家となり、當時佛國に滞在せしが、オルレアン公に建言して、國立銀行を起さしめ、内に多少の替換金銀を蓄へば、以て無限の紙幣を發行し得べしとなし、最初自ら私立にて之を試みしに、大成功を得たりしかば、遂に之を國立のものとなさしめたり。又た之れと同時に有名なる「ミシシッピ」計畫なるものを起せり、此計畫は此銀行が特權を得て、米國ミシシッピ河畔即ちルイジニア并に加奈太に事業若くは貿易を始め、此地より大財源を得んとするにてありき。左れば佛人にて米國を以て金銀鑛の所在地となし、且つ富豊極まれる沃土と爲すものは、皆之れに欺かれて、續々此銀行券に信用を置き、次で從來より存在せし東印度商協

も之れに合するに至りしかば、國庫は忽ち融通を得て、一時は財政上に大活潑力を加へたりき。然れども是れ元來虚偽にして、ミシシッピ計畫とても、滯手で粟を握む如きもにはあらず、實際のところは、政府の弊言に欺かれたること明かなるに至りしかば、政府の信用の地に落つると同時に、此等の紙幣は暴落し、爲めに無数の民を破産せしめ、益々財政をして救ふべからざるに至らしめ、之れに任じたる彼れローは、身の危険を怖れて夜逃を爲すに至りたり、而して是れ皆オルレアン公等の招きたるところなりき。

オルレアン公攝政を解く

オルレアン公の攝政中猶ほ多く説くべきことあるも大勢に關係なきを以て之を畧く、然るに攝政八年を経て、千七百二十三年に至るや、ルネ十五世も十三歳になりたるを以て、表面上攝政を解き、オルレアン公は間もなく死したり、ジュボーも亦た尋で逝けり。

ポルボン公の宰相時代

オルレアン公に代りて政柄を執りしはポルボン公なりし、然れども此公も亦た常に其夫人に支配せられたる如き馬鹿物な

りき、而して此時代に起りたる出来事は、先づルネ十五世の結婚問題とす。之れより先きルネ十五世は西班牙王フネ五世の女を娶るべく約し、未だ小兒なれども之を佛廷に呼び寄せ置きたりき。然るに此ボルボン公并に其夫人はかねてフネ五世に爵を求めて得ざりしより、其後領むところあり、今回權力を握りたるを幸ひにルネに勧め、西班牙王女との結婚は餘り待ち遠しとの理由を以て之を違し、當時廢位せられてアルサスに在る波蘭王の一女を請ひ受け、之をルネの後妃に立つるとに定めたり。左ればフネ五世は大に憤り、今回は煥帝と結び、更に佛を襲はんとしたるを以て、佛は復た英と普とに結びて之れに對したるに、露は波蘭を誘ふて更に西と埃とを援け、こゝに歐洲の大戦を見んとするに至れり。加之ボルボン公は此際財政を整理するを知らず、却て不動産に重税を課し、無理に之を絞らんと爲せしかば、國民は固より貴族よりも其失政を攻撃せられ、終に職を辭するに至れり。

賢者フルーリーの出づ

フルーリーはルネ十五世の師僧なり、高德兼

に秀で、材幹亦た卓抜なりき。左ればルネ十五世と其他の貴族とに推されて、ボルボン公の後を繼ぎしが、果して狂瀾を既倒に回さんとするの力量を顯はしぬ、時に千七百二十六年、彼れは已に七十歳を超へ居たりき。

フルーリーの整理

彼れは宰相の職に當るや、第一に財政整理を始めたなりき、而して十分に調査を遂げて出納を明かにし、悪税を除き、商工業を奨励し、殆んど先聲なるサレイ、コルベールに劣らざる手腕を揮ひしかば、國民も一先づ安堵し、政府の信用も従つて増し、一個人の力も亦た此くの如く大なるものかと驚かしめたるほどなりき。左れば其後、外は、西班牙の我れに向ふていよく宣戦を布告するあり、内は「ゼンセニスト」宗の騒動ありしも、間もなく、善く之を處理し、暫時太平の天下を見せしめぬ。

歐洲の戦亂

斯くて千七百三十三年までは、何事もなく経過せしが、こゝに歐洲の戦亂を惹き起すもの出で來れり。當時波蘭の王たりしサクソニー侯崩じて嗣なし、由て前述にかゝる廢位の王(其名スタニスラス)乃ち時機を得た

りと爲し、アルサスよりワルソウに歸り、國會の多数を得て王位に即きたり。然るに露と埃と丁抹とは之れに反對し、露は五萬の大軍を引て波蘭に入り、一撃の下に此スタニスラスを逐ひ巻くれり。左ればスタニスラスは其女を我がル非十五世に嫁せしめたるの緣故を以て、我れに援兵を請ひしかば、フルーリーは我が平和を亂さるゝを厭ひしかども、閣臣の背くところとならず、止むなく之に興みし、遂に千二百人を出して之れに當らしめしに、敗れて歸りたれば、今回は西班牙と結び、鋒を轉じて埃に向ひ、伊太利に於て大戦を交へたり、而かも此役や別に勝敗を分つことなく、其後英の仲裁するところとなりて局を結びしに、更に又た英と西との衝突となり、前役に於ける同盟國たるの故を以て、西を援けて英に當るべく餘儀なくせられ、之れが爲めに苦心する中、こゝに有名なる埃國の相續問題たるもの起りしなれ、時に千七百四十年。

埃國の相續問題

此問題に關しては吾人已に之を近世史及び本書なる英國史にも猶ほ埃國史參照述べ置けり、而かも一言にて之を云はゞ、當時埃帝

死し、其女マリア、テリサ其後を嗣がんとせしに、西班牙王、普魯西王、サルデニア王及びサキソニーとバヴアリアの二撰擧侯之を拒み、各々其候補者となり、又は其領土を割かんとて争ひしなり。フルーリーは佛國を此戦渦中に投ずることを好まざりし、然れどもかねてル非十四世が、埃家の嗣子には、バヴアリア侯を推すべく約束せし廉あるを以て、閣臣等はフルーリーの平和論を喜ばず、止むなく戦端を開かしむるに至りぬ。然るに此役や先づ第一佛はバヴアリアを助けて直ちに埃領に侵入し、殆んど埃都ウフンナ附近にまで迫りしも、マリア、テリサが匈牙利の兵を率て來りしを以て退却し、バヴアリア侯はフランクフォートに於て帝と稱し、佛軍はフラーグに於て更に埃に抗せしも、當時埃は英の援助を得て益々強盛に赴き、佛軍は終に大敗し、繰り出したる五萬の大兵の中、其能く國に還り得たるものは僅かに一萬二千人なりし、時に千七百四十三年。第二は其餘波施て英佛間の戦となり、英王ジョージ二世自ら兵に將として攻め來り、デッテンゲンに於て大戦し、是れ亦た我敗に歸しぬ。第三は於此乎佛は

いよく公然と英に向ふて宣戦を布告し、千七百四十四年ル#十五世自ら兵に將としてサララランドに出で、普、丁及びバヅアリア侯と力を合せて埃軍を破れり、而して間もなくバヅアリア侯死し、其後たるマキシミアン、ジョセフ侯と和したるを以て、佛も埃と和せんと欲せしも、マリヤ、テリサは英國の言を聞て和せず、更にフォンタイの戦となれり。此役や埃は英將カンパラン、公の指揮の下に動き、佛は有名なる驍將サックスの下に戦ひしが、遂に佛の大勝利に歸し、英埃軍は一萬人を失ひ、我れは七千人を失ひたり。第四は千七百四十六年、更にロンバデーに於て英と大衝突を惹起したり、此役や我れは西班牙と合したりしも、大敗してゼノアに亡げ、終に我國境まで退却するに至れり。然るにチザランドの方面に於ては、例のサックス將軍益々勇を現はし、遂に白耳義全體を領し、向ふところ敵なかりき。第五は東印度に於ける英佛の衝突なりき、本國に於て已に戦端を開きたりと聞かば、其影響の殖民地に及ぶや勿論なり。當時東印度に於ては佛の勢力は英を壓下し、ラ、ブール、ド、ン、チ、ー、と、デ、ユ、ブ、レ、ー、の

二傑此處に居て、殆んどベンガルの地一體を領せんと爲しつゝあり、而して其英軍を攻撃するや、忽ち之れを降し得たりしなり。然れども其後此の二傑が互に嫉みて相争ひ、其ラ、ブール、ド、ン、チ、ー、の負けて本國に召還せらるゝや、英は此間に力を得てマドラスを復し、更に艦隊を送りてデユブレをボンデセリーに圍むに至れり。第六はいよく此戦争の終局にして、千七百四十八年サックスがマスト、リヒトを陥れて敵軍に大敗を與へしかば、遂にエイクス、ラ、シャペルの平和條約となれり。而して佛は此際敵の地を割くべきか、將た他に多くの利益を獲取すべきかの地位に在りしに、ル#十五世が「予れは利の爲に戦ひたるにあらず、義の爲に戦ひしなり、予れは商人の如くならず、寧ろ王公の如くならんを冀ふ」と宣べて其儘局を結ぶに至りしかば、佛は商業を沮害せられ、幾萬の人命を失ひ、十二億「リッヅル」の國債を増したるのみの馬鹿を見て終りの。

宰相フルーリーの末路

フルーリーは飽くまでも戦争に反対したりき、然れどもル#十五世と閣臣の容るゝところとならざりしかば、右の戦争の

起るや間もなく、憂慮と疲勞の爲め、終に九十歳の高齡を以て死するに至り、其後は例の波蘭廢王の女なる后妃マダムデジャートルロー専らル井を支配し、ル井をして益々虚榮の君たらしめぬ。

ル井十五世一女に迷ふ

かれ后妃は間もなく死せり、因て心あるものは喜び居りしに、ル井は更に他の一女に迷ひ始めたり、此一女はマダムデボンパドールとて、下賤より身を起して宮中に在りし者なりしが、ル井の幸するところとなりて勢力を得、此後二十年間悉にル井を支配したりき。而して當時ル井の下に忠臣若くは英傑なかりしかば、ル井は益々放逸に陥り、宮廷殆んど閉間を以て満たされ、左なきだも今や衰運に向ひつゝある佛國をして、いよいよ滅亡の域に進めたりき。

内亂漸く兆す

此時に當りて宮室いよいよ驕奢を極め、ル井十五世の名の下に莫大の經費を要求せられたるも、例のボンパドールの奴隸となりたる大蔵大臣マシオールは之を拒む能はず、依て二割の所得税を臣下に課し、僧侶

と貴族をも其中に入れたり。左れば大不平は忽ち全國の間に起らんとするとき、更に僧侶とパリイ議會との衝突事件を生じぬ。當時パリイの大監督が再び「センセニスト」派に迫害を加へ始めたれば、之れに黨するパリイ議會の多數は、之を遮りて、其大監督を捕縛し、政府は其間に入て干渉し、三者混闘を極めたる結果、例の所得税をも廢し、迫害をも止め、爾來は議會が僧侶權に干渉することをも禁じ、三者互に交綏の姿となりしが(此三者が毎に混闘するに注意せよ)、更に茲に一大事件起りたり。千七百五十七年ル井十五世がヴェルサイユに於て將に馬車に乗らんとせし時、ダミーエンなる凶漢あり、突然現はれ出で、ル井を刺せり、幸に輕傷に止りしも、其公言せしところが、近時に於ける王の暴政を罰すと云ふにありしより、當時ゾオルテール等に依りて鼓吹せられつゝありし自由の聲が、始めて權化せしものと見て、人民は動搖し、王黨は怖れ且つ怒り、此凶漢を酷刑に處し、其手足を裂き、其屍を焼き、其灰を風に散しぬ。

更に外戰 内已に大亂の兆を示し來りたるに拘はらず、此際更に英國と

の戦端を開きたり、こは米國に在るオハヨー諸地の境界を争ふより起りしものにて、其戦役と結果とは、已に之れを米國史中に詳記したれば、此には云はず。而して更に又た此際塊のマリアナ、ナリサと握手して以て普に當るの途に出でしかば、之れより佛は所謂る七年戦争の一役を勤むる事となりし也。噫フルーリーは已に在らず、於此乎、王の愚と、女子の痴と、臣下の蒙と相待て、益々國運を傾け來りしや是非もなし。

七年戦争間の出来事

此戦に於て普のフレデリック大王が大立物たりしとは、之を近世史に陳べ置けり、因て此際單に佛國に關するのみを畧記すれば、先づ第一、英のピットが普を援けて戦ひしを以て、最初ライン河畔に於て英將カンパーランド公と、我將リセリユー公との間に交戦ありしが、英敗れてハノヴェルは我手に落ちたり。又た海上に於ては、英將ビング大敗を受け、英國民の憤怒を買ふて死罪に處せられたりき。普に對しては塊佛の同盟軍大に破られ、徒らにフレデリックの名を爲さしめたるに過ぎざりき。又た其後普の將

フランススウィックのフェルデナンドが來りてハノヴェルを復するあり、我が將スーピース公が更に之を撃退するあり、いづれも激烈なる戦を戦ひ、斯くて米國の領土に於ては更に英佛間の戦争となり、加奈太に於て大衝突を來せしとは、是れ亦た米國史中に見たるどころ、而して其終に英將ウルフの爲にクエベックを陥られて、米國に於ける佛の根據地を失ひしとは大なる打撃にてありし也。次には我が艦隊が英國を襲はんとして能はず、英の海軍司令長官ホークの爲めに大敗し、愛蘭の北方に上陸せしも、全軍終に降服の運命に會はされぬ。大陸に於ては一時コンテラージュ將軍并にデブローネの兵を以て普をハノヴェル附近に窘迫せしも、其後更に敗れて我國境に引き揚ぐるに至れり。

於此乎我外務大臣デシユオーツル公は從來の競争者たる西班牙と結び、所謂る「家族同盟」なるを組織し、専ら英に當らんとせしも、却て英に先んせられ、佛領なる西印度の諸島は奪はれ、西領なる南米のキューバと南洋なるフカリピン島とは一時英の領するところとなりたり。斯くて其後露と瑞典とが普と和するに

至りしかば、英佛も亦た和し、いよくパリーの平和條約となりし也、時に千七百六十三年。斯くて佛は此條約によりて、再び東印度なるベンガルの貿易場を復し、檳榔を築かざる條件の下に、ニューフンランド附近に漁業の權を得たりしも、左る代りに北米加奈太全體を失ひ、西印度の諸島と亞非利加のセネゴールとを英に譲り與へたれば、其宇内に勢力を失墜したるや論なきこととす。

ゼスイト宗の滅亡

『ゼスイト』は近世史に見たる如く最初非常なる徳行を爲したるものとす、然れども其後悪黨に變じ、王室を虜とらにして害毒を流しつゝありしに、此際シユオーツルは之を滅絶せんと企て、折から社會改革派の多數を占めたるパリー議會が、此『ゼスイト』を社會の毒物なりとなし、之を解體せしむると同時に、其財産を沒收する決議を爲したれば、喜んで之を採用し、いよく之を國外に放逐したりき、時に千七百六十四年。

ル井の放埒

當時千七百六十四年例のマダム、デ、ボンバドール死せり、ル井は痛く之を悲しめり、然れども其後一年も経ざるに、更に下賤より其身を起

して宮中に居たる一女を其夫より離れしめて、之を己れが内后となしたり。シユオーツルは極て之に反對し、涙を揮ふて之を諫め、其王室の遂に威權を失して、滅亡するより外なきことを警告したりき。然れども容るゝところとならず、却て其後は此女即ちマダム、デ、ヌ、パリーの爲めに呪まれ、當時比較的に善良なりし此宰相も其末路に近づきぬと見へし。

コルシカを合す

此際地中海なるコルシカ島を合す、而かも是れ後段に説くべき那翁傳のところに記すべきを以てこゝには云はず、時に千七百六十八年。

更に内亂の兆

當時ブリタニー州の行政官にてダーギー公なるものあり、其地方に壓制を極めて、地方議會と衝突し、其訴パリー議會に來りしかば、パリー議會は直ちに其特權を以て、此公の貴族たる資格を停止サスペンすべしと決議せり。然れども此公は右のマダム、デ、ヌ、パリーを通じてル井を助かし、此決議を允るさゝるのみならず、近時パリー議會が其勢力を振ふは、畢竟シユオ

ルツルが之れと結ぶに在りとなし、終にル井をしてシユオーツルを斥けて其領地シアンテ、ループに退去せしめしかば、シユオーツルは靜に其命に従ひしも、人民は之を惜しみ、且つ憤り、事態は此儘治まるべくも見へざりき。

ル井十五世の末路

シユオーツルを斥けて之れに代りたるものはダーギーロン公(宰相)にして、之を補佐したる者はモービオン(司法大臣)とテリー(大蔵大臣)等なりしが、其政策は當時ゾオルタール、モンテスキュー、デデロー等に依て鼓吹せられつゝありし「新説」がいよゝゝ全國に傳播するを見て、之れを和らぐるの道を取らず、専ら之を壓迫せんと圖るにてありき。於此乎直ちにパリー議會を閉ぢ、其議員を放逐し、當時王權に屬したる放逐若くは投獄の密書を以て、片端より其反對者を斃さんと企て、已に之が準備として、地方の處々に此目的を有する裁判所を設置するに至れり。左ればパリー裁判長ラモーニオンは。事の容易ならざるを見て、直接ル井に向ふて其暴政を遂行するの大危険なるを説き、今日の場合、此大危険を避けんには、よろしく一世紀半も斷絶したる「全

國大會」を開き、民の輿望を容るゝに如かずと忠告せり、然れどもル井は之を聽くべくもあらず。兎角する中、重税又重税の結果として、物價騰貴し、貧民は衣食に窮し、國債主は其利を下げられ、不平を唱ふるものは續々牢獄に送られ、前途はいよゝゝ測るべからざるものとなれり。加ふるに此際露と普と埃と相合して波瀾を割きしも、佛は之れに與るを得ず、外益を國威を落すのみなりければ、必ずこゝに大洪水を見すんば止まざるの光景を呈し來りしに、ル井は終に痘瘡に襲はれて死せり、時に千七百七十四年、齡六十四、在位五十八年。



ル井十六世

(自千七百七十四年
至千七百九十三年)

- ル井十六世の人物
- 北米合衆國と同盟す
- 國會開設の布告
- 大革命時代
- ル井十三世ツォルテール
- いよく大會開かる
- 國王と第三級會との衝突
- 戦端に入る
- 王國會に真を請ふ
- 國會始めて立法權を振ふ
- 暴民宮中に押し寄す
- 當時の政黨
- 王逃亡を企つ
- 内閣シロンダストの手に落つ
- 財政整理難
- 更に財政の困難
- 當時の論評
- 自由思想の由來
- 當時社會の狀態
- 衆議院と貴族院との争ひ
- 王いよく叛亂す
- 革命の初機砲
- 暴民貴族を襲ふ
- 宮殿の襲撃
- 主權議會に移る
- ミラホーの末路
- 立憲政體的議會となる
- 外國軍襲來
- 溫和黨最後の奮發
- 急激黨の政治
- 外敵との戦争

- 國會の大騒動
- いよく大革命
- 急激黨の大亂暴
- ル井いよく刻らる

- 溫和黨最後の奮發
- 急激黨の政治
- 外敵との戦争

ル井十六世はル井十五世の孫なり、位に即くとき二十歳、而かも已に塊家なるマリア、テリサの女を娶りて夫たるの身たりき。資性善良にして、品行亦た方正なりき。然れども國王としては、天下の形勢に暗く、臣下に亮輔を得ず、加ふるにル井十四世の専横と、ル井十五世の放埒なる因果を受けて、國家の秩序殆んど紊亂し去りて、復た拾收すべくもあらざりければ、所謂大革命の襲來を禦ぐ能はず、終に其犠牲となりて、斷頭臺上の露と消へしこそ哀れなれ、請ふ順次に之を見ん。

財政整理難

財政難は已にル井十四世の末路より引き續き來るものなり、

然るにル井十五世と其閣臣の虚傲を保たんとする政策は、こゝに英と開戦し、更に七年戦争に關係し、國債は我が二十億圓に上り、其利と歳費とは我が二億

六千萬圓に達せしも、歳入は重税に重税を課し、徴税に徴税を加へたるにも拘はらず、猶ほ一億八千萬圓より以上を得ると能はずなりぬ。於此乎ルル十六世は先づ國民に不人望なるゲーギーンを退け、更にモールポートを宰相に擧げしかば、モールポートは歴史上に有名なるタルゴートを大藏大臣に任じ、財政を整理せしめたり、タルゴートは當時ルソー等の民権論に心酔し居たるものなれば、直ちに自由の政策を施き、從來に於ける保護若くは特許の制を廢し、各階級とも皆齊しく國家の義務を負担すべきものとなし、貴族と僧侶に至るまで税金を拂はしめ、穀物の自由貿易を許したり、而して之れが爲めに國庫に收入を増し、前途甚だ多望なるが如く見へしに、此政策は宮臣及び貴族黨等の反對するところとなり、薄志弱行のルル十六世は遂にタルゴートを斥くるに至れり。因てモールポートは更に有名なるチックケルを擧げたり、チックケルはゼノアの人にて財政に手腕ありと稱せられたる富豪家なり、左ればチックケルは先づ自ら率先して、己のが俸給を國庫に寄附すとなして受取らず、斯くて更に冗員を淘汰し、官吏の

俸給を削減し、内以て犠牲の精神を發揮し、外愛國心に訴へて内債を募集せしに、國民は彼れを信じて、其時ひに従ひ、前途また恢復の望を現はしぬ。然るに又々此に故障起れり、何ぞや、當時北米合衆國が自由の爲に獨立の旗を翻へせりと聞くや、佛國の人民は狂氣の如くに之を歓迎し、かねてルソー、ゾールテール等の説に動かされ居るものは特更に騒ぎ立て、前條なる米國史中に見たる如く、ラファエットは彼れに行き、フランクリンは我れに來りたれば、ルルもチックケルも今は如何ともする能はず、之れを制すれば則ち我れの革命を促す恐れありたれば、止むなく合衆國と同盟を結び、更に英國と開戦するに至りしなり、時に千七百七十八年。

北米合衆國と同盟す 此合衆國と英國との間に入りて戦ひし記事に就ては、已に之を英米史中に陳べ置きたれば、此には之を畧記すべし、即ち此戦たるや主として海戦のみなりしが、最初海上に於て衝突し、次で米國若くは西印度に於て衝突し、其れより西班牙と同盟して英國に當り、一時大舉して英國

を襲はんとせしも果さず、兎角する中、露、普、瑞、蘭及び葡萄牙の五ヶ國が所謂「武裝的中立」なるものを組織して、英に當りしかば、更に蘭と合して英に當り、此間大舉して合衆國に赴き、例のヨークタウンの大勝を博し、合衆國をして、いよく獨立の希望を強固ならしめ、轉じて更に西印度に英艦を破り、其れより歸り來りて、デブラルタル附近に於て大衝突し、此處にては英に敗られ、前途茫として其勝敗の決を見ること能はざる中、いよく財政の困難と大革命の氣運とを高むる如く見へしかば、佛は終に和を講ずるに至り、英も亦た疲れて之れに同じぬ、時に千七百八十三年の一月なり。

更に財政の困難

佛は已に破産に瀕しながら、米國を扶けて英國に當りし也、左れば其義氣は稱すべきが如きも、更に之が爲に十四億「フラン」を費やしたりき。因てチャッケルは此戦争の終結前二年に於て、詳細なる國財表を製し、之を全國に頒布して國民に告げたり。國民は其舉動の公明なるを喜び、もしも斯くの如く國民的の方針に向はんには、たとひ無理なるも、猶ほ此上の國債に

も應せんと云へり。然れども宮臣若くは王黨等は、是れ王權の衰頹を意味するものなりとて喜ばず、又たチャッケルは此際地方議會を開かしめ、國家の負擔に任せしめんと圖りしも、此時更に頭を上げ來れる「パリ」議會は、地方に權力を殖すことを喜ばずして、大に之れに反對したれば、チャッケルは終に周圍に敵を受けて辭職するの止むを得ざるに至り、之と同時に「モールボー」も死し去れり、時に千七百八十一年。

いよく國會開設の布告

チャッケル退き、モールボー死して後、ドゥメソン首宰となり、次でデカロン之れに代り、こゝに全國の貴族會を開て財政を議し、彼等をして各々分擔せしむるところあらんとせしに、此際に於ても猶ほ己のが犠牲を喜ばざる貴族等は之を拒みたるを以て、其職を辭し、更に其後を繼ぎたるものは大僧正「ブリーエン」なりし、然るに此のブリーエンは元來后妃の寵を得て登りしものにて、私利を念じ、淫蕩に耽り、驕奢を勤めて喜ぶの外、何物をも爲し得ざりき。左らば人民はいよく前途を氣遣ひ始め、パリ

議會は益々政府に反對するの態度を高め、政府は最早や國債にも依る能はず、徵税をも爲す能はず、左ればとて日々の經費を得るの途なきまでに至りしかば、さすがのブリーエンも最早や遊惰に耽りつゝある能はず、止むなく特權貴族の上にも課税し、之と同時に印紙税をも強行せんとせしに、パリ議會は今や殆んど武裝的となり、「凡そ古來よりの憲法に従へば、かゝる税則は皆所謂『全國大會』に定めらるべきものなれば、速に今日此全國大會を開くべし」と呼號し、此呼號は忽ち全國に響き渡り、「然り全國大會なり全國大會なり、速に此大會を開かざるべからず」との輿論は、囂然として四方に起り、また之を制すべくもあらず。於此乎ブリーエンは一時ル井に迫り、武力を用て、之を壓せんと欲し、當時パリ并に地方に起りたる暴動者の巨魁を縛して、之を獄に投ずるや、いよこゝに革命の徵候を示し來りしかば、ブリーエンは怖れて、「左れば來る千七百八十九年五月の一日を期して國會を開設すべし」との布告を全國に下し、其の之を下すや否や、王と政府とを後に見棄てつゝ伊太利差して出奔せり、時に

千七百八十八年の八月なり。

ア、吾人は此時代に於ける佛國史を讀む毎に未だ曾て長大息せずんばあらず。「歐洲近世史」中にも繰り返し又た繰り返して論じたる如く、かれ佛國民の氣象たるや、其主權者が國利民福を増進しつゝある間は、己の自由を犠牲にするも厭はざるものなり、左る代りに一ひ其功を失ふときには、直ちに國民の自由を呼號し來りて、之を碾碎すること恰も土瓶を碎くが如くす、是れ往古より佛國歴史に徴して明かなるところとす。然るをル井十五世の放埒なる、而して十六世の虛弱なる、到底此民を率ゆるに足らず、加ふるに閣臣に其人なく、空しく婦女と宮官とに誤られしこそ遺憾なれ。其れ然り然れども彼等にして猶ほ能くタルゴ、フルーリー若くはテッケルの徒を用ひ居たらんには、かれヘンリー四世がサレーを用ひたる如く、ル井十三世がリセリユーを用ひたる如く、ル井十四世がコルベールを用ひたる如く、或は此狂瀾を既倒に回し得たらんやも、亦た未だ知るべからず。然るを畢に他の噴々者流に制せられて其意志を貫く能

はず、更にチッケルを用ゐしときには、已に防岸の崩れ去りたる後なれば、また奈何ともする能はざりし。專制君主の弊は其暗愚者を戴きたるときこそ、始めて其大暴露を來すものと知るべきなれ。

大革命時代

自由思想の由來

抑々國民の權利若くは自由の思想なるものは、古來より歐洲に之れありしなり。於此乎市會あり、縣會あり、代議政あり、國會あり、而して王と人民との衝突するときに當ては、英のチャールズ一世時代と、佛のヘンリー三世時代とに於けるが如き、其混雜を見たりしなり。其れより當代の出來事としては、北米合衆國の獨立するありて、民權自由の精神は、いよ／＼に發揮しつゝありしなり。斯くて更に佛國のみに就て之を云ふも、此

際特に此思想を以て舉國の人民を鼓舞振作したる者ありき、之をルーンソー、ゾオルタールの言論とす。

ルーンソーとゾオルタール

此二人の外に當時の思想界を支配し以て、此革命を促したるものなきにあらず、モンテスキユ、デロー、タレンベール、ヘルツィンアス等即ち是れなり、而かも其中最も有名なるものを右の二人とす。ルーンソーは千七百十二年に生れ、ゾオルタールは千六百九十四年に生れたるなり、而かも其孰れも千七百七十八年即ちルソフ十六世が即位後四年に至り、已に其革命の先驅を果したりと云はぬばかりに死し去りしこそ奇妙なれ。然則ルーンソーは何を唱へしか、曰くルーンソーは深き思想を以て社會の根底を穿ち、今日の社會は百事人工的虚構の社會なり、人は云ふ「文明」と、然れども此文明に依りて、一般の人民は禍害と苦勞とを増しつゝあるなり。吾人は根底より此社會を改造せざるべからず、之を人間の初代に見よ、事物皆自然にして公平なりし、而して快樂も亦た一般の間に流通したりき。然るに今や人間界に種々の階級を

造り、貴族あり、富豪あり、帝王あり、而して一般の幸福を壟断し、下民貧者をして永劫其苦を脱する能はざらしむ。彼れ君たり臣たるもの、畢竟何物ぞ、君を戴くの義務も、臣に臨むの權利も、要するところ、相依て以て社會の秩序を保ち、國利民福を増進せしむる爲めに外ならず、こゝを以て王にして此秩序を紊し、所謂國利民福の害を爲すものあらば、之を除くべきは當然のみと。於此乎「民約論」なるものを著して以て、君臣も亦た約束づくで出来たるものなりと斷じたるなり。ゾオルテールは又た懷疑と嘲笑とを以て有名なるもの、彼れは時の宗教界を攻撃し、盡く皆虚偽を信するのみと論断し、所謂神權なるもの、根底を覆し、ルーンと共に目下佛民が王家と貴族とに壓慮せられて満足すべきものにあらざる由を説き、其筆力の鋭きことは、如何なるものも、其前には破碎せられずと云ふことなかりき。然而して彼れの言論は實に佛國のみに止まらず、實に歐洲の天地を攪亂せしめたりしなり。於此乎ルン十五世の時、彼れは其外務大臣たるシヨージランに書を寄せて曰く、「公等外交を事とし外戦

を企つ、而かも見よ、是れ皆内國に於ける革命の種を蒔くものゝみ、火は已に薪に移れり、其暴發は予れ之を見ずして去るべきも、今の青年たるものは、必ず之を見るを得んと、而して果して然りしなり。

當時社會の狀態

當時僧侶と貴族とは、特權なるものありし。而して國家を維持したるものは、重もに平民の膏血なりし。こゝを以て民權より云ふも、財政の整理より云ふも、是非とも此貴族と僧侶とに大分擔を命せざるべからざりしなり、而かも前條に見る如く、此事や時の大藏大臣が屢々試みて其功を奏せざりしもの、而して貴族の横暴は益々甚しかりしなり。例へば貴族は平民の田地を荒して遊獵するも勝手たりし、而かも平民は何れの處に於ても遊獵を禁せられたるのみならず、もしも誤て遊獵的の鳥類を殺すことあらば、入牢若くは其首を刎ねられたりしなり、以て其一般を知るべきなり。左ればゾオルテール、ルーン等の議論が、漸々と其國內に傳播するや、事態は此儘にて治まらじと見へたりしに、更に年々引き續きての不作にして、全國飢饉の狀況

を呈し來りたれば、人民も死地に瀕しては、こゝに何等かの活路を求めざるを得ざりし。然るに苛政の鬼たる收税吏は此に至るも猶ほ其腕を緩めず、依て所在人民と税吏との衝突を見、次で各地方に於ける一揆となり、内亂は已に目睫に迫りたりと見へたりし。

いよいよ大會開かる 左ればいよいよ大會開設の布告となるや、恰も

活路の開けたるが如く、國民の期待は非常なりき、而して大會の議員は三級に分たれ、一を僧侶となし、二を貴族となし、三を平民となし、此の平民は所謂普通選挙にて撰出せらるゝものなれば、其騒ぎ一方ならず。所在候補者を争ふて、演説するあり、冊子を播くあり、市府は固より地方に至るも。珈琲店若くは公會堂の如きは、日々の群集を見ざるゝことなかりき、乃ち其勢や已にツォルテールの所謂る火焔を吐くものとなり居たりき。斯くて其注文に種々ありしも詮するところは、時の呼號として「同等、自由、兄弟」の三大要求にあらざるはなく、甚しきに至りては「暴王を下に」と叫び廻るものさへありしが、いよいよ千

七百八十九年の五月の五日 ツェルサイユに於て、此の有名なる大會が開かれたるなり。

衆議院と貴族院との争ひ 此時集りたるものは、僧侶より二百九十

一人、貴族より二百七十人、平民より五百八十四人なりし(歴史家に依りて多少差違あり)、而して皆各々別院に於て議すると定り居たりき。然れども斯くては折角衆議院(即ち第三級會)にて定めたる事項も、他院にて否決せらるゝ恐れありとて、多數を擁する衆議院は、一院と爲して百事を議せんことを他二院へ交渉せり。然れども拒絶せられたるにより、然れば我が議院を改めて「國會」と稱せしめ、僧侶と貴族に關はらず、ドシツ立法權を振ふて百事を定むべしと議決したりき。

國王と第三級會との衝突 僧侶と貴族とは之を聞て驚き且つ憤れり、

然れども此時再び擧げられて國政を執り居たるチツケルは、王に勸めて、鬼も角も第三級會に出席し、言を和けて之れに説き、若も應ぜずんば其時また取る

べき法ありとなし、先づ三日間の停會を第三級會に命じたり。然れども三級會は之を肯かず、依然其集會を續けんとしたりしかば、巡查をして議員の議場に入ることを制せしめしに、左らば移轉せよとて、彼等は別に集會處を他に設け、猶ほも其命には従はざりき。王は最早や忍ぶべからずと云へり、然れどもチッケルは更に王に勸めて、兎も角も此第三級會に出席せしめ、彼等に向ふて説くところあらしめたり。此時王は先づ温顔を以て自今以後大に弊政を改め、可成民望を容るべきを述べ、次で左る代りに制規の如く、既定の場所に復せんことを勸告せり、而して議員は謹んで之を聞き居たりき。然るに王が其終に臨みて、「而かも卿等もし頑強にも予が命を肯かずんば、予れ之を解散すべし」と言ふや否や、議員は忽ち動搖めき渡り、俄然反抗の色を示しぬ。斯くて王もチッケルも皆去れり、然るに式部長官にてブリッズ侯なるものあり、須臾にして歸り來り、兀然として壇上に現はれ、其何を云はんと欲するつもりなりしや、「さて諸君諸君は已に王の命を耳けり」云々と發言するや、忽ち議場の中央に突立たる一人あり、

軀幹巨大にして其聲雷の如く、忽ち此のブリッズ侯を喝して曰く、「汝は何んの權威を以て其處に現はれたるや、誰か發言の權を汝に許したるや、歸て汝の王に告げよ、吾等は人民の權利に依てこゝに在り、たとひ彈丸を以て迫るども、我等をして此處を去らしむること能はざるべし」と、而して此れぞ是れ有名なるミラボーなりし。

王いよく狼狽す

式部長官は戦慄しつゝ歸れり、於此乎ル井も亦に懼れて僧侶と貴族とに請ひ、遂に一議院に合併せしめたり、而して后妃等の勸めに任せて密かに外兵を募りて近衛兵に加へ、事態いよく、迫れば則ち武力に訴へんと定め、次で民黨に欺を通ずるものなりとの讒言を容れて、彼のチッケルを放逐せり、而して是れ皆失政の上の失政なりし。

戦端に入る

此時パリーの街頭に現はれ出でたる一青年あり、其名をカミーユ・デムレンと云ふ、彼れ四方を馳せ廻りて叫で曰く、「武器を取れよ、武器を取れよ、事態は最早や言論にて収まるべくも非ず、グツ／＼する間には、必

す酷き目に會はん」と。於此乎此聲に應じて起るもの潮の如く、忽ち四萬の軍勢となり、其中銃器なきが爲めに、木槍を携ふるもの十の八九を占めたり、而して事已に此に至れば、之を率ゆるものあらざるべからず、於此乎先年米國の獨立を助けたるラファエットを戴くべしと一決し、議院は轉じて一大民間の政府となりぬ。

革命の初鐵砲

左れば王黨の方に於ても、直ちに之に對して準備を爲し、双方相陣するに到りしが、日耳曼の僱兵を以て固め居る王黨の將ランベスク公は烏合の衆何かあらんとて、先づ之を威嚇する心得にて、數發の砲撃を試みしに、民軍は之が爲めに斃されたるもの四五人を戸板に乗せ、之を擔ひながら市中を叫び廻り、「其れ此くの如く王は已に外兵を以て我を撃ち始めたり、出でよ所在の人民皆出でよ」と呼び出すや、パリ市民は概ね皆戦士と變じ、忽ち府廳を襲ふて其知事と護衛兵とを屠り、轉じてバスチルの牢獄に到り、當に國事犯者のみならず、悉く囚徒を放免し、鯨波を作りて引き揚げたり。左れば王

は之を見て戰慄し、是れ大謀反なりと云ひしに、侍人之れに答へて、「否、是れ革命なり」と云へり、時に千七百八十九年七月十四日也。

王國會に衷を請ふ

ルキは最早や民黨に抗すべからざるを知れり、因て單身孤行にて國會に赴き、人民と和せんことを申出で、更に王軍を解散し、再びチッケルを召還し、民の請ひを聞くべしと明言し、翌日また之れに赴き、ラファエットが護國軍に長たることと、當時民黨より擧げられたるパリーの知事ベイリーに、認可を與へて歸りたり。

暴民書族を襲ふ

吾人は暴民と云ふ、然り暴民なり、此時に當りて一び荒れ出したる猛虎は、血を見ずんば止まざりし。依て國會若くは護國軍の指揮を待たず、チッケルの後を繼ぎたる大藏大臣ソーロンと其子とを捕へ來りて之を殺し、剩へ之を街頭に曝したり。左れば地方に於ても、從來より蜂起し居たるもの等は益々こゝに勢を得て、土地の貴族豪族を斃したると數を知らず。ラファエットは之を制したりき、議員にても心あるものは憂へたりき、而かも

洪水は其良田を崩すことをも辭せざりき。

國會始めて立法權を振ふ 兎角する中、國會はいよ／＼かねての言論を實行し、從來より因襲し來れる貴族の特權を削ぎ、税則を各階級に及ぼすこととなし、僧侶に納め居たる十分一税を廢し、公役に居るものは皆普通選挙に由るものとなし、凡そ佛國民は何人にも同權利を有するものとなし、米國獨立の布告に模し、所謂「人の權」なるものを確定せり。

宮殿の襲撃 宮中に於ては、事のいよ／＼危険に迫りたるを以て、此際ル井を擁してメッツに退き、メッツの鎮臺長パーレ侯の保護の下に依るべしと議したれども、ル井の背んせざるより、更に此鎮臺より兵を呼びて我近衛兵に加へたり。然るに此鎮臺兵の來るや、意氣軒昂、「平民一揆の如きもの何事か能くせん、我が訓練兵には抗すべくもあらず」と威張りければ、宮臣宮女等は之を頼母敷思ひ、此將校を正實となし、近衛兵の將校を客實とし、王、后、宮臣等之れが主人となり、大饗宴を宮中に張り、舞へよ躍れよとの大愉快を極めたり。

暴民宮中に押し寄す

然れば之を開きたるパリイ市民は大に憤り、我等は飢へつゝあるなり、然るにツエルサイユの宮殿には肥へて躍るものあり、いざ左あらば我等も其御馳走に預かれよと叫びつゝ、見る間に幾千幾萬の人数となり、婦人隊も之に加り、宮殿差して押し寄せたり。王は之を見て懼れ、臣下并に其兵をして亂暴なる處置に出でしめず、却て之を好遇したり。然れども事態は血を見ずんば止まざるのみならず、已に双方混雜の間に死者を生じ、宮殿は蹂躪せられ、后妃は殆んど殺らざれんとせり。因て當時護國軍の長たるラファエットは之を開て、俄かに駆けつけ、双方の間に入り、一方には王を擁護せんと欲し、一方には暴民を宥めんと欲し、兎も角も王と后妃と當時六歳になる皇太子とを預るべしと陳べて、之をバリーに伴ひ來れり。傳へ言ふ、此時暴民は此王と后妃と皇太子を指して「彼處にパン焼と其女房と小さな菓子とが行く、我等の食は彼れに在り」と叫びたりとなん、其紛亂察すべきにあらずや、時に千七百八十九年十月の六日なり。

主權議會に移る

王已に捕虜の姿となれり。於此乎國會はいよいよ百事を指揮するものとなれり。仍て先づ第一財政を整理すべしと爲し、再びチッケルをして之に當らしめたり、チッケルは直ちに徵稅の法を議して之を實行せんとせり、然れども當時全國は鼎の沸くが如く、農夫は勑を採らず、商估は算を彈せず、恰も戰場の有様なれば、一先づ政府の信用を試みんと欲し、こゝに紙幣を發行したり。人民は我が自由と權利を保證する政府なればとて、一時は信じて之を使用せり、然れども議會場裡にも黨派を分ち、全國の動亂も亦た容易に止むべくも見へざりしかば、此紙幣たるや、畢には無價物と成り了せり。於此乎流石のチッケルも逃げ出しぬ。

當時の政黨

前條の如くにして、自由と權利の主張には一致したりしも、其手段に就ては議員中多少意見を異にしたるものありき。先づ第一は溫和黨、之れは立憲政體を望むものにて、ラファエット、ミラボー及びベイリー等之れに屬したり。次は「ジョンダスト」黨、之れは共和主義を抱くものなるも、稍々溫和

和黨に傾き、ゴードー、プリソー、ローランド、グエルニュー等之れに屬し、第三は急激黨、即ち議院の高き處に座を占めたるを以て、一名山嶽黨と稱せらるゝもの、而して其中又た二派に分れ、一を「チャコピン」派と稱してロベスピエール之を率ひ、他を「ホルデリエ」派と稱して、ダントン及びマラー等之れを率ひたりき。

ミラボーの末路

ミラボーは民黨の先鋒として王に楯衝きたるものなり。然れども議會を始め人民が餘りに亂暴に出でたるを以て、斯くては無政府に陥るべしと爲し、常に溫和黨に屬して、事を取り居りしが、いよいよ大果斷を企てたり。即ち此際大「打撃」を行ひ、急激黨を捕縛し去り、眞の立憲政體を打建てんと爲したるなり、蓋しミラボーは元と貴族より出でたるものにて、又た久しく英國に居て英國の政體を慕ひしものから、急激なる破壊黨には同情を表せざりしや知るべし。然れども此際王黨より收賄したりとの嫌疑を受け、勢力の次第に減少する中、終に千七百九十一年四月俄然として死し去れり、蓋し彼

れは大精神家なりしも、酒色に耽くる病ありしと稱せらる。

王逃亡を企つ

之れより先き諸貴族等は已に多く國外に亡げ去り居たりき、而して形勢いよく危殆に瀕したるを以て、ル井の侍従はル井に勸めて逃亡を企て、預め之をメッツの將軍パーレに通じ、途中に出で會ふべしと約束し、千七百九十一年の六月、ル井と后妃と皇太子とに平民の服を着せしめ、旅人馬車を僱ふて之れに乗せ、パリーの假宮を逃げ出でたり。然るに途中に於て不斗面を出せしより、密かに探知して其蹤を逐ひ來りしもの、爲めに發見せられ、再びパリーに逐ひ還へされたり。斯くてパーレは之を聞くや、直に馳せて之れに赴きしが、最早や後の祭りなりし。

立憲政體的議會となる

ル井の再び還り來るや、國會に於て更に大議論を起したり。急激黨は此際王を廢して直に共和政體を打建つべしと叫びたり、然れども時は未だ其の處にまで來らず、兎も角も溫和黨の勝利に歸し、此に立憲政體を制定して、王を牽制することに定り、今日までありし國會は、畢

竟組織制定會の如きものなれば、此際之を解散し、更に立法的議會と爲すべきに決し、千七百九十一年十月新憲法に従ふて撰出せられたる議員七百四十五人より成る新議會を開きたり。

内閣ジロンヂストの手に落つ

新議會に於て議したることは、第

一當時佛國の貴族にて外國に逃亡したるものが、外國の兵を借りて佛國を襲はんとする風聞ありしより、ル井をして此等を招致せしむることなりし、而してル井は一時之を承諾せざりしも、其後表面斗りも之に従ひたりき。第二此の立憲的議會を認識せざる僧侶を罰することにてありき、而してル井は之を承諾するに躊躇したりき。兎角する中當時日耳曼帝たる塊のレオポルトは佛の皇后の兄弟たるを以て、普のフレデリック、ウイリアム二世と力を合せ、已に兵を擧げて佛國に攻め寄せんとするの形勢を呈し、佛國の王黨等は密かに之を迎へんとし、今や溫和黨によりて支配せられ居たる議會及び内閣も、此際王室を掩護するの態度に出でしかば、人氣はいよく「ジロンヂスト」に移り、パリー市會の如

きは遂に急激黨の傾するところとなりたり。然らばル井も今は如何ともする能はず、此國民の人氣を迎ふる爲めに、止むなく溫和黨即ち立憲黨の内閣を交迭し、「シロンデスト」をして之に代はらしむるに至りたり、時に千七百九十二年。

外國軍の襲來

「シロンデスト」が政權を執りたりと聞くや、かねて用意したる埃普は勿論、西班牙、ペドモンドの兵も、今はいよく各方面より佛境を壓して入り來れり。因て先づラフアエット、ロシアンポー、ラクチルの三將軍を派して、此等の外敵に當らしめしに、チザランドの方面に向ひたる先鋒のヒーロン將軍は、埃普の將たるブランヌウィックの爲に敗られ、第二の將たるザロンも亦た敗られ、敗報悉りにパリに到着せしかば、國會は更に之れが爲めに大騒動を來したり。

國會の大騒動

急激黨は叫んで曰く、「夫れ我軍の敗るゝは、内に王黨を扶けんとする者あればなり、因て此際大に王黨を制すべき必要あり」とて、先づ王の近衛兵を解除し、王權の擁護者たる僧侶を放逐し、民黨より二萬の兵を

募りて之をパリーの附近に屯せしめ、以て王黨の裏切に備ふべしと決議せり。然るに第一はル井之を承諾せしも、第二と第三とは之を承諾せざりき。於此乎内閣の議長ローランドは其の之れに服すべきを迫りしも、ル井肯かず、却て内閣を溫和黨に譲り、今回は断然國民に反抗するの態度に出しかば、今日まで急激黨即ち「デヤコペン」と「シロンデスト」とは、自ら其政策を異にせしも、今や合して一となり、左らば躊躇すべからずと爲し、忽ち一揆を起し來り、先づ國會に亂入し、次で王宮に押し寄せたり。王宮を護せる近衛兵は之を砲撃せんとせり、然れどもル井は之を止め、却て暴民等の意表に出で、自ら馳せ來りて之を迎へ、汝等解まるべし、予は必ず憲法に従ふて汝等の願意を聴くべしと云ひ、一揆中の一人が此際槍の先きに革命の標號シムボを附したる一網帽カネを貰て之をル井の頭上に冠らせしに、ル井は喜んで之を着せしかば、人氣は爲めに挫けて、一揆は直ちに解散し去れり、時に千七百九十二年七月の二十日也。

溫和黨最後の奮發

右なるル井の舉動によりて、共和黨の人氣の稍々

鎮定せんとするを見るや、溫和黨即ち立憲黨は、此際更に其勢力を恢復せんと欲し、ラファエットは其出陣處より歸り來り、國會に出現して、這回の暴舉を尤め、轉じて『デヤコビン』黨を攻撃し、若しも人氣を得るあらば、兵力を以て之を壓倒せんと圖りたり、而かも最早や彼に應ずるものなかりしかば、『彼れは嗟吁我事止む』と嘆息しつつ、再び其陣地に引き返へしたり。斯くてラファエットの後を承けて護國軍の指揮官となれるマンダットは、是れ亦たラファエットの同黨のものなれば、此際護國軍を擁して急激黨に一打撃を加へんと待ち構へたりしに、一日『デヤコビン』黨の爲めに誘ひ出されて、終に暗殺せられしかば、王黨は之れが爲めに殆んど最後の希望を擲たざるべからざるに至れり。

いよく大暴動

人氣はいよく荒くなれり、急激黨はいよく勢力を振ひ來れり、而してフランスウィックの大軍はいよくパリを望んで進入し來れりと聞へしかば、義勇兵は各地方よりパリを差して集り來れり。然るに此際外敵は佛民に向ひて『今や汝等は速に王命に従ふべし、若夫れ猶ほも王命

に従はず、妄りに暴民を働くに於ては、我等がパリに攻め入る時、必ず大打撃を受くべきを覺悟せざるべからずと宣言せしかば、『デヤコビン』黨を始む、パリに入り込み居たる民黨は、却て大に之れに激し、然らば今の間王を廢して以て外敵の首草に報ゆべしとなし、ダントン并にペーテオン等を首領として先づ國會に到りて廢王の說を主張し、國會が躊躇して決せざるを見るや、忽ち王宮を差して押し寄せたり、而して此際南方のマルサイユより來れる民黨軍は、之れが先鋒を爲したりき。ル井は之を聞て再び驚けり、而かも前日とは其勢を異にし、最早や之れに接することの危険なるを悟りしかば、其皇后并に皇子等を伴ひて、國會議場に逃れしに、其後は近衛兵と暴民との戦争となり、其局はいよくダントンの率ゆる『デヤコビン』黨の勝利に歸せしかば、今は國會の議長たるグエルニオーも議員の多數を代表して、『爾來ル井は政權を離れてルクゼンブルグの假宮に居るべし、而して國會は權りに政柄を執り、民主主義と、自由、平等、兄弟たる三綱領の政治を布くべし』と宣言するに至りぬ、而して是れ實に

有名なる八月十日の出来なりし。

急激黨の政治

八月十日の後は百般の政治盡く「チャコビン」黨の手に移れり。於此乎ダントンは司法大臣となり、マラーは警視總監となり、ロヘスビは議會の指揮官となり、皆各々出でて内閣を左右し、此際断然たる處置に出つべしと爲し、己のが反對者に附するに「國會の謀反人」たる名稱を以てし、俄かに特別裁判所を諸方に設け、ドシ己れに逆ふものを刑し始め、ルの如きも之を假宮に入れず、直ちにランブルの堡臺に押込め、殆んど牢獄の身となしたり。左ればラファエットは出陣中に於て之を聞き、此新政府の權利を認めぬのみか、今や此新政府より命を傳へ來れる使者を捕へ、猶ほ己のが兵士に向ふて、王と立憲政治とに忠なるべきを誓はしめ、進んで新政府攻撃の態度に出でんとせしに、同僚なる將軍デムムリーエーが此新政府に加擔し、人氣益々之れに傾くに至りしかば、ラファエットは最早や事の非なると、己のが境遇の危険を慮りて、終に敵軍に投ずるに至れり。

急激黨の大亂暴

兎角する中、外敵はいよく進撃し來り、今にもパリに押し寄する風聞ありしかば、「ジロンドスト」の一人にて當時内閣に在りしセルヴァンが、事此に到れば詮方なし、一時パリを退て、外敵の銳鋒を避くべしと述べしに、ダントンは大に憤り、「何條パリを去るべき必要やある、吾人の恐るべきは外敵にあらずして内敵にあり、此際よろしく断然たる處置に出で、以て外敵に通せんとする王黨を除去すべし」と叫び出すや、人氣は忽ち之れに和し、かねて用意したる暴舉を實行し、同年九月の二日に於て、例の警鐘が鳴らさるゝを相圖と爲し、之れより王黨と目指さるゝもの、慘殺せらるゝもの數を知らず、パリのみにも二千人以上に達し、施て地方の各處に及びたりき。而して是れ皆パリ議會を中心とせる「チャコビン」黨の所業にして、國會は只だ茫然として、之を傍觀するのみなりき。

外敵との戦争

奥普の聯合軍はブランズウィック公を總大將として入り來れり、佛軍の指揮官となれるデムムリーエーは、最初アルゴーンの森に於て

之を邁り、次てクロイクス、ゾークボイの戦となり、更にヴァルミーの激戦となり、兎角フランスウィックをして志を得ざらしめしかば、フランスウィックも今は聊か倦疲の氣を生ずるのみか、軍中に夥多の病者を出すに至り、一時總和を申込みしに、之を開きたる佛國の共和政府は、いよく得意となりて斷然之を拒絶し、フランスウィックをして止むなく三萬人の損失を招て退却せしむるに至らしめぬ。於此乎デュムリエーは大英雄として歓迎せられ、佛國共和政府は益々威力を揚げ、天下をして之を開て震懾せしむるに至りたり。因てデュムリエーは此機を逸すべからずとなし、直ちに守勢より攻勢に轉じ、普埃軍を追蹤しつゝ、白耳義に入り、更にゼーマップの野に於て埃軍を破り、遂にブラッセルを陥れしに、ブラッセルの革命黨は、之を機として「我軍は爾來日耳曼帝の下に屬せず、共和國たるべし」と宣言し、之と同時に佛國共和政府も、「向後佛國の征服するところは、皆共和政體を打建つべし、而して、從來の政治組織を破壞し、貴族と僧侶との財産を剝奪し、民主主義に由りて新に役人を選舉すべし」

との趣意を天下に向ふて公布したり、時に千七百九十二年の十月也。

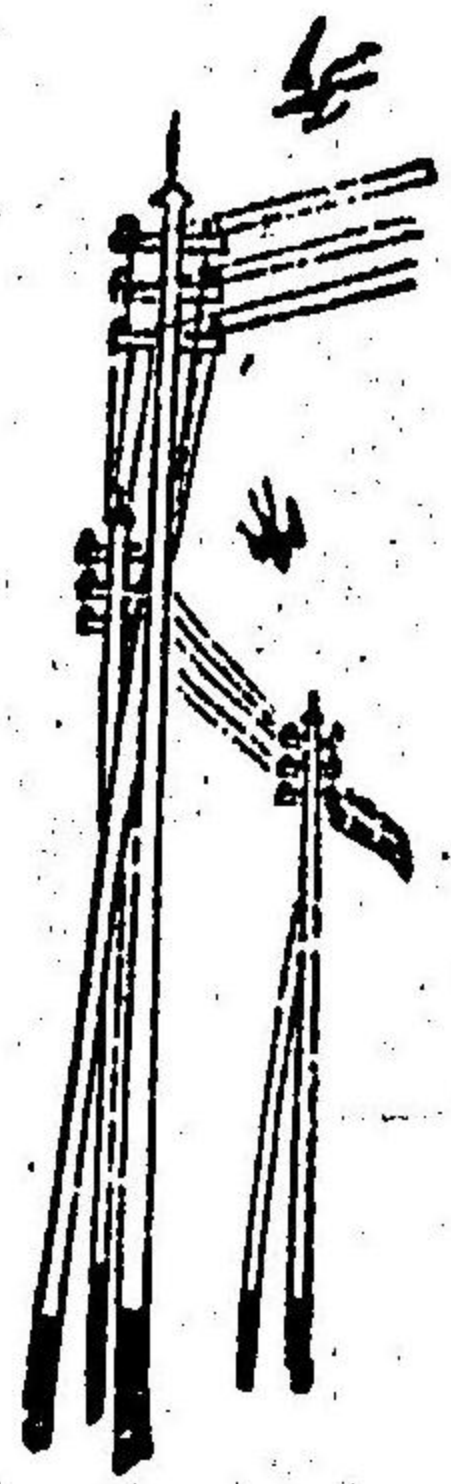
ル井いよく刻らる

ル井の處置に就ては、人々如何になるらんと氣遣ひ居たりき。「シロンデスト」は急激黨即ち山嶽黨と同じく、共和政治を主張するものなり、是故に今も猶ほ相俱に政府を組織するものなりき。然れども元來温和黨に屬したるを以て、目下急激黨の亂暴に出づるを喜ばずありしが、此際ル井の處置につきて、此の兩黨の間に意見を異にするに至りたり。急激黨はル井を裁判し以て其罪を糾さんと主張せり、而して「シロンデスト」も之に同意せり。然れども急激黨は之を殺ろさんと志ざし、「シロンデスト」は其生命を奪ふまでに至るを好まざりき。於此乎千七百九十二年の十二月十一日、ル井はいよく國會に引き出されて裁判せられ、第一ル井が外敵若くは曾て逃亡したる佛國の貴族と交通したる書類の宮殿より發見せられたりと云へるものに對し。第二曾て逃亡を企てたることに對し。第三曾て議會の決議に允諾を與へざりしことに對し。第四八月の十日なる流血はル井が其近衛兵に發砲を命じ置きたりと

云へる嫌疑に對し、各々申譯を爲さしめられたり。ル井は一々其冤罪なること并に其理由を説明したり、次で廿六日更に訊問を繼續せられ、更に長時間の答辯を爲し、加ふるにデセーゾの如きはル井の爲めに有名なる力ある辯護を爲しぬ、然れども皆無益なりき。『シロンドラスト』は王を有罪なりと認むるに一致せり、然れども之を殺すまでには及ばず、遠島若くは入牢にて可なりと宣べ、其用ひられざるを見るや、猶ほも國民一般に踏るを可とすと述べ、一日にてもル井の首をつぎ置かんと企てたり。然れども古來より斯る時には、激烈黨常に勝を制し、溫和黨は因循なりとて斥けらるゝに定まれるが如く、遂に千七百九十三年の一月十四日に於て、急激黨の教唆するところとなりたりけん、俄かにパリ市民の一部が蜂起して、國會を取り囲み、『王に死を興へよ、否らすんば我等に死を興へよ』と叫ぶや、『シロンドラスト』は急に懼れて回み、急激黨はいよく勢力を得、今より廿四時間の中にル井を死刑に處すべしとの決議を通過せしむるに至りたり。

ル井は自若として此決議の命を受けたり、而して三事の請求を呈出したりき。曰く尙二日の猶豫を興へられんこと。曰く己のが名指す懺悔僧を招かんこと。曰く家族に面會を許るされんこと是れなりき。第一は之を許るさうりしも、第二と第三は之を許したりき。而して此等の會合たるや、實に人生の悲惨を極めたりき、而かもル井は其運命に安んじて駭かず、其家族と別るや、暫時眠に就き、千七百九十三年一月の二十一日午前十時、囚車に運ばれつゝ、断頭場に至り、靜かに断頭臺に上り行き、顧みて公衆に向ひ予は今無實の罪に死す、而かも予を死刑に定めたるものを赦すべし、而して予の血が佛國の幸福を粘結せしむるものとならんことを祈る云々と云はんとせしとき、死刑の指揮官が太鼓を鳴らして其聲を沒せしむるや、ル井の體軀は直ちに断頭臺下に運ばれ、みるみる其頭は其體より離れたり。斯くて心あるものは涙に袖を絞る中、司刑者はさも得意らしく、今や血に滴るル井の首をば公衆の前に捧げしに、公衆の間より『共和政治萬歳』『國民萬歳』『自由萬歳』の聲は洪水の如くに叫び出されぬ。時に

ル井齡三十九、在位十九年なりし。



共和政治時代

(自千七百九十三年
至千八百四十年)

- 潮流の激變
- 佛國急激黨の覺悟
- 内戰
- 恐怖の世
- 急激黨の内争
- 外戰の状況
- 新政府の組織
- 那翁の伊太利役
- 那翁の外戰
- 那翁いよく主權者となる
- 那翁の政治
- 日耳曼の方面
- 那翁の文事
- 那翁帝となる
- 各國佛に迫る
- 急激黨の果斷
- 急激黨の暴政
- 急激黨の破産政變
- 急激黨の滅亡
- 新憲法の制定
- 更に外戰
- 王黨と共和黨との軋闘
- 那翁の埃及遠征
- 更に新憲法の制定
- 再び伊太利を征す
- 英國の方面
- 那翁暗殺に會はんとす

潮流の激するところ、また奈何ともする能はず。ミラボーは自由を叫んで來りたるものなり、然れども其の餘りに激烈なるを見るに及ぶや、之を知がんとし、て仆れたり。ラファエットは人民の味方として出で來れり、然れども其人民が餘りに暴戾に赴くを見るや、之を制せんとして敗れたり。「シロンヂェスト」は共和政治を主張して廢王を望めり、然れども其王の殺るることを好まず、之を救はんごせしが最早や奈何ともする能はざりき。大巖已に轉落し始む、何人か途中に於て能く之を支へ得んや、左れば當時の形勢は、實に凄愴たらざるを得ざりき。

ル井十六世が勿ねられたりと聞くや、英も露も蘭も西班牙も皆齊しく起つて、埃普と共に佛國に大反對し、今回に於ける佛人の處業は、宇内の王家を侮辱し、天下の平和を擾亂するものなりと斷じ、孰れも兵を繰り出すことに決したりき。然れども激烈の極端に驅り上げられたる佛人は、マラーの口を藉りて叫んで曰く、「吾人は最早や退く能はず、此儘突進するか將た滅了するかの二途あるのみ」

と。於此乎盡く天下を引受けて戦はんごの覺悟を定めたりき。外敵に向ひ居たるデユムリエーはル井を殺すことには反對なりしを以て、陣營より馳せ歸りて盡力するところありしが、最早や奈何ともする能はざるを見て復た陣營に引き返し、其後チールウンデンに於て埃軍と戦ひしに、今回は大敗を受け、其終に急激黨より疑はれんことを恐るゝや、是れ亦た敵軍に投ずるに至れり。

於此乎曩時にフランススイックを擊退して共和政府に勢力を興へたる此のデユムリエーも今は敵のものご成り了せしなり、而して天下は盡く共和政府に逆ふて起りしなり。然れども急激黨に依りて率ひられたる共和政府は、最早や一歩も退かじと決心したりければ、此際先づ内部を強固に爲すべしとなし、「保安委員」なるものを設け、革命裁判所なるものを置き、ダントン、バリーール等をして之れに主たらしめ、ドン／＼異見者を征伐し、終に國會に兵士を馳せ、かねてル井の生命を救はんご議したる「シロンヂェスト」三十二名を捕縛し去りたれば、國會はいよ／＼急激黨の爲めに蹂躪せられ、急激黨に反對なる各代議士は、各

々地方に落ち延びつゝ、遂にコンに相合して更に一種の政府を組織し、ポルド、マルサーユ、ツローン、及びリオン等に其支部を置き、急激黨の共和政府に對峙し、將に一大内戦を惹き起さんとせり、然るに爰に其先鋒として現れ出でたる一婦人あり、一日マラーを浴場に覗ふて之を刺し、彼れ急激黨に一大驚愕を喫せしめぬ。

内戦

斯くて内戦の序幕となりぬ。即ち右の形勢を看て取るや、かねて王黨に與みしたるラウエンデーの人民は、俄かに旗を擧げて、急激黨の共和政府に逆て起ち、シャリーリット及びストッフオレー等を大将として屢々政府軍を惱ましたり。又たリオンの民も之に導て起ち、更に急激黨の軍四萬を引受けて戦ひ、ツローンの民も新立政府黨と王黨とを合して急激黨に當り、英國より海軍を招き來りて、應援を依頼し、更に大に戦ふところありたりき。然れども三者とも畢に急激黨の大軍には抗し得ず、いづれも敗滅の運命に會はされぬ。特にツローンに於ては急激黨より送られたる例のナポレオン、ボナパルトの爲めに

破られしなり。

急激黨の暴政

急激黨の暴政はいよゝゝ其の絶頂に達したり。急激黨中の急激黨なるものはダントンなりし、然れどもダントンよりも猶ほ急激なるものありし、ロベスピール即ち是れ也、ロベスピールは千七百九十三年の七月例の「保安委員」の一人に撰ばれしが、其後頓に勢力を振ひ來り、こゝに始めて「恐怖の世」なるものを現出せり、即ち此「恐怖の世」に最も權威を振ひたるものは、第一總指揮官とも稱すべき此のロベスピール、次ぎは軍事に當りたるカルノー、次ぎは警察を支配したるクートンなりき。恁くて其爲したるところを云へば、第一、目下宇内を敵として戦ひつゝある最中なれば、凡そ佛國民にして武器を把り得るものは皆盡く徴兵に應すべきこと。第二、凡そ一ヶ年の歳入額に當る國債を國民に強求すること。第三、凡そ全國に産出する穀物類の三分の二を軍糧の爲に貢獻せしむること。第四、麩麵、肉、葡萄酒、鹽等の類は政府の定めたる價格以上には賣る能はざること。第五、凡そ國民の自由も財産も今日の場

合ゆえ、一時政府の支配の下に置かるべきことは是れなりき。斯くて此第五のものは總ての壓制と亂暴とを含むものなるが故に、之れに抗して牢獄に繋がるもの、無慮二十萬人の多きに及べり。

次に此「恐怖の世」の支配者は、更に其手を斬殺の方面に向け、所在斷頭臺の數を増し、敗北したる將校を刎ね、曩日に捕へ置きたる「シロンド」の中二十一人を刎ね、終に皇后をも引き出して、其替てル井を或はしたりと云へる罪状の下に之を刎ねたり、而して「シロンド」の首領と仰がれたるローランドをも刎ねんとしたりしが、其夫人が之を逃したるを以て其夫人を刎ねて、世に有名な「オー自由」自由如何なる罪惡が汝の名の下に行はるゝ」と云へる言を遣さしめ、次でローランドの自殺となり、更にラファエットと共に有名なりし前の「パリー知事ベイリー」をも刎ね、斯くて殆んど文官と武官とを問はず、苟も急激黨の爲めに快らす思はれしものは、皆盡く刎ねられたり。加之彼れ地方なる謀反民の處置に對しては、猶ほ一層の殘酷を極めたり、即ち其殺すべき人の多數

にして斷頭臺の間に合はざるを見るや、一時に五人十人若くは數十人を慘殺するの機械を工夫し、單にナントのみにて、此機械にて殺ろされたるものは、一萬五千人に及びしと云ふ。時に千七百九十三年の秋冬間なりとす。

然るに此にロベスピールよりも更に激烈なるもの出で来れり、其名をエペールと云ひ、之れに屬するものをエペール派と稱せり、此者は總ての階級を打破すると同時に、社會の秩序を維持する宗教をも廢棄せんと欲し、基督教の如きは、害あるも益なしと論じ、竟にパリーの聖僧と其屬僧とを其黨中に巻き込み、彼等をして議會に向ひ、「吾人をして自今基督教の禮拜を廢し、之れに代ゆるに自由と平等と道理とに捧ぐる禮拜を以てせしむべし」との建議案を呈出せしめたり。當時の人民は何事も破壊し去るを喜びぬ、於此乎此の建議も難なく多數の容るところとなり、自今基督教の禮拜は、全國到るところに禁せられ、基督教の神に代ゆるに、道理の神を以てし、禮拜は此道理の神に向ふて爲され、靈魂の不滅は否定せられ、此禮拜堂の門上には「死は永遠の睡眠」と云へる額を掲げられ

たり。加之從來の紀元は基督より起れるを以て之を廢し、更に佛國革命の年代即ち千七百九十二年を以て紀元たらしむべしと爲し、日曜日の休暇も基督教に關係するを以て之を廢し、自今十日を以て休日と爲すべしと定めたり。其れ然り然れども急激黨の動力も最早や其終焉に近きぬ。こゝを以てロベスピールが事の餘りに極端に馳するを制して、聊か異論を其間に挟むに至るや、人心は漸く其本に歸り來り、千七百九十四年の三月サンジャストが此エペール派の横暴を責め、其罪狀を舉げて之を國會に攻撃するや、多數は忽ち之を容れ、數日を経ざる間に、此等のエペール派は例の革命裁判所に渡され、直ちに斷頭臺に上りゆけり、而して其者は其首領エペールを始め、總數十九名なりき。急激黨中なるエペール派は右の如くにして其運命を終りたり、而して是れ皆ロベスピール派の企畫したるところと知られたり。蓋しロベスピールは此際實に反對黨のみならず、己のが黨中に於ても、己れと相並んで一派を率ゆる首領株を除去せんと志し居たる也。於此乎ダントン派のものはダントンに警戒を加へ

て、此際大に注意すべきを以てせり。然れどもダントンは己が勢力を信じて之を聽かず、彼等予に向ふて何事をか爲し得んやと放言し居りしに、エペール派が處刑せられてより一週も経ざる間に、ダントンは夜中不意に捕へられて獄中に送られたり、而して其後種々の罪名を附せられて裁判所に引き出さるゝや、明白に其無罪なることを辯じたるにも關はらず、當時ロベスピールに屬したる裁判官の爲めと、ロベスピール派の勢力によりて動かされたる議會の決議とに由り、ダントン及び其派の重立は、ダントンと共に間もなく斷頭臺の露と消へ失せたり。

ダントン派已に消へ失せたり、於此乎いよくロベスピール一人の天下となりぬ。然れどもロベスピールも亦た同じ運命に遭遇することを避くる能はざりき。ロベスピールはダントンを倒して後、國民の人氣を得んと欲し、先づ第一義時にエペールに由りて決せられたる宗教廢止の議を覆へし、『凡そ神の存在の信仰は共和政治の道德の爲めに欠くべからざるものなり』との言を議會に放ち、議會

をして「佛國民は神の存在と靈魂の不滅を信ず」との決議を爲さしめたり。加之其後改めて神を祭るべしとの議に従ひ、ロベスピールは議會の長として、間もなく大禮拜式を行ひしが、此時彼れは恰も祭司の長の如く振舞ひしかば、此時よりして彼れは畢に其心事を疑はれ始めぬ。

然れどもロベスピールの終焉は未だ來らざりし。彼れは猶ほも天下を己れ一人、政治のものたらしめんと欲したるより、其子分なるクリントンに發議せしめて、更に革命裁判所の権力を擴張し、凡そ現在の共和政府を維持せんには、猶ほも異分子を排除せざるべからずとなし、尙も共和政府に反對する如き罪を犯すものは、如何なる瑣細の事にも死を以て罰すべしとなし、此際パリーのみにても二千七百人の被刑者を見るに至りたりと云ふ。

於此乎己のが黨派の中より、ソロク敵を生じ始めたり、即ち當時カルノー、パリーの如きは、從來彼れの命を奉せし者なりしも、彼れの餘りに殘逆を極めて、我儘の次第に増長するを見るや、密かに徒黨を結びて、今や飛ぶ鳥をも

落す勢ある此ロベスピールを斃さんと企てぬ。而かも此事たるや、若しもロベスピールに覺られなば、却て彼れに先んせらるゝに至るべきを以て、極めて秘密に同志者と氣脈を通じ置き、一日ロベスピールが國會に來りて、「恐怖政略は最早や大抵にして停止すべきも、猶ほ數人の議員の罰すべきものあり」と告ぐるや、總ての議員は其の難なるやと、互に面を見合せて懼るゝ中、例の密約者は此機を逸せず、此際敢然としてロベスピールに反對し、近時ロベスピールの振舞ひの餘りに横暴なるを嚴しく詰るや、國會は俄かに動搖めき始め、ロベスピールを辯護するものあり、更に彼れを攻撃するものありて、此日は何事をも議する能はずして散せしが、其翌日に至るや、更に大激論となり、タリエンの如きは遂に劍を抜て起ち、「速にロベスピールを捕縛すべし、否らすんば、予れは今直ちに彼れを刺すべし」と怒鳴り、滿堂之れが爲めに一驚を喫するや、「暴者を倒せよ」との聲は、終に四面より叫び出され、ロベスピールと當時其兩手となりて働き居たるクリントンとサンジャストの三名は即座捕ふべく議決せられ、當

時ロベスピールを辯護したるロベスピールの兄弟とレーバとは、好んで共に縛に附かんことを願ひ、五人の者は忽ち牢獄に送られたり。

國會に於ては形勢已に此くの如くなりし、然れどもロベスピールの據城たりしパリ議會は之を聞くや、直ちに武力に訴へ、右の五人の獄を襲ふて之を救ひ出し、更に己のが事務所に伴ひ來りしに、ロベスピール等に反對せし國會は、之を聞くや、又大に憤り、左らば最早や躊躇すべからずとなし、是れ亦たパリに兵を授け、夜中不意に敵の事務所を襲ひ、ロベスピールを擒にし、直ちに之を斬頭臺に運びしに、人民は群を爲して其處に集り、ロベスピールの首の落つると共に、百雷の如き聲を發して之を喜びぬ、時に千七百九十四年七月なり。

急激黨の滅亡

左れば潮流は還り來れり、ロベスピールの劊くわいねらるゝや、從來「ジャコピン」黨に虐待せられたる敵黨は、俄かに國會に勢力を復し、直ちに「保安委員」の権方に制限を置き、之れが爲めに今猶ほ獄に繋つながれ居りしもの、

一萬有餘人を放免せしが、之を機會として從來急激黨の爲に悲惨の運命に會ひ居たるもの、子弟より成れる一青年團體出で來り、忽ち「ジャコピン」黨の據城を襲ひ、其事務所を破壊し去りしに、國會は之を諒とし、此時より「ジャコピン」黨の集會を禁じたり。而して彼れ往時にロベスピールの勢力を厭ひて、ロベスピールを國會に彈劾したる連中も、其原を質せば、亦た是れ同じく急激黨なりしかば、此際に至れば最早や其勢力を維持するに由なく、或者は劊くわいねられ、或者は放逐せられて其影を留めずなり、例の「シロンデスト」の或者は、再び國會に呼び戻されぬ。斯くて翌年即ち千七百九十五年の五月急激黨の殘黨あり、不意に起つて最後の活動を試み、武装して國會に亂入せしも其意を得ず、直ちに棄退せられて其呼吸を止め、最後に當時残れる急激黨即ち山嶽黨の首領株六人の劊ねられ終るや、佛國の天下は更に溫和派の手に落ちぬ。

外戦の狀況 吾人は暫く佛國內部の狀況のみを説き來れり、左らば此れより少く外部の狀況如何に及ばん。

此時に當りて佛は三十萬の大兵を召集し居たるなり、而して其將軍の重なるものは、ジュードン、ビーシユグラー、オーシユ等なりし。ジュードンは來因河畔に填軍を禦ぎ、遂に大に之を破りて退却せしめたり。ビーシユグラーは白耳義より進んで英蘭の同盟軍に當り、盡く之を逐ひ捲り、和蘭の都城にまで躡ち入りしに、和蘭の軌權は英將と共に亡げて英國に去り、和蘭は爾來佛國に屬する共和國と成り了せり。オーシユは當時佛の王黨の英國に逃れ居たるもの數十人と、之れを援護しつゝ來れる軍勢とをブリクタニーに擊て大敗を蒙らしめ、次でラッエンデーの民が更にシャリーワート及びストップフォレーを戴て反したるを鎮壓し、之をして再び頭を擡ぐる能はざらしめたり。然れば佛國は内に於て大紛擾を起しつゝありしにも拘はらず、外に於ては、此くの如きの強勢を呈し、普魯西と西班牙とは、終に外戦より手を引きて、佛國と平和條約を結ぶに至りぬ。

新憲法の制定

山嶽黨は倒れたり、而して國會は更に「シロンデスト」の

天下となれり。於此乎新に憲法を制定せり。今其畧に曰く、自今二議院を置き、一を五百人院と爲す、是れ下院の如きもの、他を長老院と爲す、是れ上院の如きもの。斯くて行政權は支配官なるものを置き、兩院より撰舉せらるゝ五人の委員を以て之に任せしむ、是れ内閣たるもの也。然るに山嶽黨倒れし以來、彼れ王黨なるものも其勢力を復し來り、此際巧みに反動の人氣を利用してパリ市民を誘ひ、こゝに一政社を起し、此の新憲法に逆ひ、剩へ兵を擁して、現在の國會を顛覆せんと企てたり。依て國會は之を聞かば、是れ亦た直ちに武裝を爲し、露時に山嶽黨を襲撃して大功を奏したるバラに命じて、更に王黨を壓せんとせり。於此乎バラは此際ナポレオン、ボナパルトを呼び來りて、之を己のが副長と爲し、専ら此任に當らしめたり。ナポレオンは前に英軍をツローンに破りし以來、伊太利なるコルシカの遠征に出掛なごして、時の至るを待ち居りしが、今やバラが己れを招くに會ひしかば、直ちに之れに應じて出で來り、乃ち大兵を率ひて國會の周圍を擁護し、何時にても王黨來れと待ち構へたり。

王黨は驚けり、然れども今更止むべきにあらざれば、二萬有餘の兵を起して攻め來りしが、勿論ナポレオンをして名を爲さしめぬ。國會はナポレオンに感謝せり、而して直ちにナポレオンを擧げて内國軍の副長たらしめ、パリの退引するや、之れに代りて長官たらしめたり。時に千七百九十五年の十月なり。

新政府の組織

於此乎新憲法に従ふて今日までの國會は解散せられ、更に五百人の評議員を撰舉し、此評議員より五十人の長老員を撰び、此の長老員より五人の内閣員を撰び、政府をルキゼンブルグに設け、用心の爲めに民兵の護衛を置き、いよく新政治に着手したり。然れども當時政府の國庫には、一文の貯蓄もあることなく、何事にも先だつものは金なりしかば、先づ紙幣を發行せしも信用を繋ぐ能はざりしを以て、更に國有に屬する土地を抵當と爲す一種の兌換紙幣を發行せしも、是れ亦た畢に信用を失して、價格次第に下落し去り、今は如何ともする能はざるに至れり。

更に外戰

内政は右の如くにして大困難に陥れり、然れども外戰に於て

は此際大功を擧げたりき、之を那翁が伊太利の役なりとす。那翁は當時僅かに二十七歳の青年なりき、然れども前きに王黨を壓したるの功により、前述の如く直ちに内國陸軍の長官となりしが、今や自ら願ふて外戰に従事し、かねて希望し居たる伊太利の征伐に向ひたり。吾人は此に戰記を詳にするの時を有せず、故に畧して之を云は、此際那翁は先づニースに至りて、從來より派遣しある佛國の伊太利軍を督し、總數三萬五千を率ひて、先づゼノアに出で、六萬の兵を以て來れる埃とサルデニアとの聯合軍に當り、先づサルデニアの將コロリーをツォリンに破り、終にサルデニアの王をして殆んど降參的の條約を結ばしめ、次で埃軍の將ポトリューをミランに擊て之れに大敗を蒙らせ、其よりロンバデーに進入し、瞬く間に其都府を占領したり。佛國政府は那翁の戰勝を喜べり、然れども那翁が遂も佛國政府に議らず、擅に一己の意見を以て、サルデニア王國と平和條約を結びたるを責め、兼ねて那翁に就ては薄氣味わるく感じ居りしかば、此際、ロンバデーに在る那翁の兵數を二分し、將軍ケレルマンに其一

軍を率ひしむべしと命令せり。然れども那翁は之を聽くべくもあらず、「斯くの如くんば、寧ろ速に我官を免すべし」と答へしも、佛國政府は當時人氣の那翁に傾き居れるを見て、敢て断然たる處置に出づる能はざりし。左れば那翁は猶ほも進んで遠征を繼續し、一隊をマンチユアに派せて其市を圍ましめ、自らポロシナに至りて、こゝに羅馬法王バイアス六世に降参的平和條約を結ばしめ、轉じてタスカニー太公を降し、其れより今や七萬の新軍を率ひ來れる埃國の名將ウルムゼルをツリントに破り、向ふところ敵なきの概を示しぬ。然るに當時東の方埃軍に當れる佛將は那翁の如き功績を擧ぐると能はざりき、埃國第一の驍將と稱へられたる太公チャールズが十萬の精兵を率ひて來るに會ひ、我將ジュードもモローも之に向ては、其力を振ふこと能はず、孰れも棄退せられて佛境にまで引き揚げたり、左れば埃國政府は之を聞て大に喜び且つ勇み、左らば此機に乗じて那翁の軍をも一蹴し去るべしと爲し、將軍アルグインチエに六萬の兵を授けて那翁に當らしめ、グエロナに於て大衝突を來せり。然るに此際

佛軍は衆寡敵せざるが爲めに大敗せしも、其後那翁が自ら出で、兵を督し、アルコールの橋上に指令旗を翻へしながら、衆に先んじて進み、終に大にアルグインチエを破り、埃軍をして八千の死者を戦場に横へしめたり、時に千七百九十六年の十一月。斯くて其翌年の一月に至るや、いよ／＼ウルムボルをマンチユアに圍みて、其兵二萬人と共に之を降し、更に進んで埃國の都ウチンナを陥れんと欲し、已にレオーベンにまで押し寄せしに、埃國政府は最早や之に抗するの勇氣なく、使を馳せて和を求め、那翁が已に畧したるの地を讓り、那翁をして伊太利の主たらしむべき旨を諾せしかば、那翁は其れよりグエニスに到り、グエニスを降して之を屬國たらしめ、みる／＼中に伊太利全體を征服し去れり。之を當時に於ける外戦の畧記とす。

王黨と共和黨との軋轢

那翁が大打撃を與へし後、王黨は暫時其頭を擡ぐるに能はざりしに、千七百九十七年の撰舉に於て、多數の王黨議員を得たりければ、彼等は更に跋扈し始め、「五百人院」も「長老院」も、其議長は王黨よ

り出すことなり。五人の内閣員中にも王黨のバルタルミーを見るに至りし折柄、バラと隙を生じ居たる内閣員の一人カルノーも亦た王黨に傾き始めたれば、共和黨なる他の三人の内閣員は、バラを主動者として更に大打撃を企畫するに至れり。即ち先づ密かに共和黨の將軍なるオーシユを外戦地より呼び戻し、更に那翁に其旨を通せしに、那翁は直に其部下の將オーシユをしてパリに歸らしめしに、オーシユは歸り来るや忽ち一萬二千の兵を以て五百人院を圍み。折しも當時王黨として「五百人院」の議長たりしビーシユグ將軍を始め、其他王黨の重立五十三人を捕縛し、次でカルノーを執り逃したるもバルタルミーを捕へ、再び共和黨をして萬歳を唱へしめぬ。

那翁の凱旋 那翁は此際伊太利に留りて、其地の諸方に新共和政府を建てしめ、之を佛國の權下に置き、猶ほ多數の領土を埃國より割讓せしめ、終りて後、意氣呑天の勢を以てパリ市を望んで歸り來れり、時に千七百九十七年の十二月なり。左らばパリ市民は狂するが如くに彼れを迎へ、特に現在

の共和政府は全く那翁の力によりて再度まで其生命を維ざしことなれば、那翁の前には感謝するより外あらざりき。

那翁の埃及遠征

此時に當りて英國の宰相ピットは、何處までも佛に逆ふて戦はんと擬し、舉作如何にも憎さげなりければ、佛國共和政府は、此際英國をして一泡吹かさしめんと欲し、盛んに英國襲撃の用意を爲しぬ。然るに英國は之を聞くや、三十萬の義勇兵を集めて、其海岸を防禦したりしかば、終に止むなく之を廢し、左る代りに地中海の咽喉を制して以て英國を苦しむべしとなし、俄かに那翁をして埃及遠征を企てしめたり。即ち千七百九十八年の五月、那翁は兵凡そ三萬六千人(一書には四萬人とあり)に將とし、海軍司令官ブルイエーの艦隊に搭乘し、埃及に上陸し、直ちにアレキサンドリを占領し、次でカイロに於てマメルクの騎兵六千と歩兵二萬に對して激烈なる戦鬪を試み、遂に之を破りてシリアにまで逐ひやり、直に埃及の主となりたり。然れども之と同時に海上に於ては、英國史中に見たる如く、ナイルの海戦に於てはチルソ

ンの爲めに其艦隊を撃破せられぬ。斯くて此際露と土耳其と同盟して、我れに戦を宜するに會ひしかば、シリアに赴て、己れに倍する土軍を破り、進んでエーケルに迫りしに、こゝには英國史中に見たるシドニー・スミス（Sidney Smith）の在るありて志を得ず、由てカイロに引き返し、更に艦隊と共に襲ひ來れる一萬八千の土軍をアブーキルに破り、次で其將ムラーに命じ、騎兵を以て之を進撃せしめ、殆んど之を殲滅せしめたり。然れども那翁は最早や埃及に留ること能はずなりぬ。本國より報あり曰く、前日に那翁が征服したる伊太利も、今は埃と露とサルデニアと相合して之を復し、那翁の遺し置きたる部下の將卒等は、皆各地より逐ひ捲られつゝありと。於此乎那翁は之を聞くや埃及の方は、之を其將クレール（Clermont）に托し置き、自ら若干の從者をのみ引率し、パリを差して還り來れり。

那翁いよゝ主權者となる 此の時に當りて佛國の共和政府は、パリ、シーヤ、ゴイエ、デューコ及びモーリンの五内閣員に由りて支配せられ居たりき。然るに此の中のシーヤなるものは、實に一代の癖物にして、此

際更に大打撃を行て以て、現在の憲法を破壊し去り、己れ至大の權力を握らんと欲し、窃かに人を那翁に馳せ、那翁と共に新に佛國を經營せんと欲する旨を以てせり。那翁も亦た是れ大野心あるもの、於此乎速に之を諾し、ムラーをして兵を率ひて五百人院に到らしめ、駭き騒ぐ評議員を逐ひ出して一時之を閉ぢしめ、暫く支配官をも廢止し、假りにシーヤとデューコと那翁とが政治を行ふべき旨を國內に公布し、瞬く間に從來の政治組織を顛覆し去りたり。人々は之を聞て愕かざるものなかりき、然れども當時已に宇内を戰慄せしめ居たる那翁の名によりて爲されたることなれば、誰れ一人あつて之れに抗議し得るものはあらざりき、時に千七百九十九年の十一月なりき。

更に新憲法の制定 千七百九十九年の十二月に於て、更らに新憲法なるもの公布せられたり。今其畧に曰く、十年を期限とする三人の執政官を置き、之をして百般の政治を統轄せしむ。曰く執政官に依りて指定せられたる國家評議員なるものを參議たらしむ。曰く一百人の議員を置き、前上二者の呈出する

議案を討議せしむ。曰く三百人より成れる立法部を置き、議案を受くるや否やを決せしむ。曰く終身官たる八十人の元老院を置き、撰舉人より候補者として舉げ来る人員の中より議員と立法部員との撰舉を爲さしむ等は是れなり。實に複雑なる憲法と謂はざるべからず、而して猶ほ共和政體たるが如きも、其真意はかゝる面倒なる手續を要せしめて、直接の權力を人民より奪ひ、以て執政官の意志を行はんと爲せしなり。斯くて其の結果は那翁が第一の執政官となり、那翁の指名によりて、コンパセリーとレブランが第二即ち屬執政官となり、シヤーは領地を興へられたると元老院に舉げられたるとを以て満足し、百事那翁の意の儘となりぬ。然れども那翁も左るものゆえ、此際斯る改革を適當と爲すや否やを國民に議るべき義務ありと爲し、全國を通じて、賛否の投票を行はしめしに、國民は最早や從來の紛擾に懲り、此際一人の有力者を戴くを可とし、大多數を以て此舉を賛せり、那翁時に歳三十一。

那翁の政治

那翁は軍事に於てのみならず、又た政治に於ても巧妙な

りき、其の第一執政官に撰ばれて政柄を執るや、極めて王者の如き態度に出でたり。先づ宗教を尊ぶべしと爲し、日曜日の禮拜を復し、久しく牢獄に繋がれ居たる伴侶を放免し、次で外國に逃れ居たるものに歸國を赦し、從來より種々の政黨軋轢の爲めに獄に投せられ居たる囚人を釋き、何れも人心の歡呼を受けしが、其最も巧妙なりしは、當時有名なる手腕家ゴードンを用て、多年紊亂したる財政を整理し、頗る國民の信用を博し、那翁萬歳と謳歌せしめたることなりき。然而して内已に平和的の政治を施きたれば、更に外國に向ふて宣言し、「凡そ戦争はご愚にして且つ禍なるものはあらず、故に宜しく鄰邦相和して相互の幸福を念せざるべからず」と主張せり、尤も英國を始め埃國に至るまで、其真意を疑ひ、是れ那翁が一時の言を弄して、敵國に油斷を爲さしめん策なりと爲し、敢て之れに應せざりしも、此等の平和的政策と宣言とは、非常に國民の歡心と呼び起しぬ。

再び伊太利を征す

此時に當りて伊太利の佛軍を指揮したるものは、

將軍マールセナなりしが、埃軍の驍將ミールに驅り立てられ、終にゼノアに逐ひ込められたり、因て那翁は埃及より歸りたる目的を完ふせんと欲し、直ちに三萬五千人に將として、アルプス山嶺を越へ、不意に埃軍の後部に出でつゝ、大驚慌を敵に與へ、終にメレンゴの大戦となりたり。此役や双方死するもの七千人、以て其激烈を見るべきなり、而かもミールは到底那翁の敵にあらず、於此乎此の戦敗の後に和を請ひ、北方伊太利の地は再び佛の物と成り了せり、時に千八百年五月なりき。

日耳曼の方面

此時日耳曼の方面に向ひ居たる佛の將軍にて、モロイなるものあり、非凡なる英傑なりき、バヅアリアなるポーヘンリンデンに於て、埃の太公ジョンを撃破し、其死傷七千と捕虜八千と大砲百門とを我れに委して敗走せしめられたれば、埃廷爲めに戦慄し、畢に和を請ふに至れり。

英國の方面

英國は未だ曾て一回だも佛に向ふて和を請せず、海上に於て益々其勢力を振ひ居りしが、此際那翁が遣し置きたる佛軍を埃及に撃ちた

り。然るに之、より先き佛將クレベルは土耳其人の爲めに暗殺せられ、之れに代りたるメノーは其人にあらず、愚かにも俄かに回教を信じ、土耳其の婦人を娶るなどして、威信を軍隊に失ひ居りしかば、今や英將アパークロンビーに襲はるゝや大敗し、直ちに降参するの止むなきに至らしめられたり。左れば那翁も一時英國と和するを利ありと爲し、英も亦た畢に之を望み、こゝにアミアンの平和條約となり、英國はツリミタッド諸島とセイロンを除く外、其奪取したるものを還すべく約すに至れり、時に千八百二年三月なり。

那翁の文事

那翁は英國と平和條約を結ぶや否や、直に文事上に大功績を顯はせり、先づ第一時の學者を集めて、所謂「那翁法律」なるものを編制せり、此法律は爾來歐洲各國の模範となりたるものにて、天晴立派なるものなりし、其他宗教の制度を定め、教育の方針を明かにし、軍事の組織を改め、殆んど間然するところなからしめたり。或人は曰ふ、此等は時の大學者コンパセリズの頭腦より出でたるもの、など、然れども確かなる傳記に依れば、此際那翁

は評議會に出席して、其意見を吐きしが、毎度學者をして舌を卷かしのめしと云ふ、其れより彼れは道路を改造し、公園を開設し、博物館若くは書籍館を増置し、學者に賞祿を興へ、國家に功勞あるものに爵を授け、社會の秩序を匡すことに努力したりき。

那翁暗殺の會はんとす

那翁の軍功と其政治とは國民の歡呼を受けたりき。然れども其勢力が餘りに擴張せられて、所謂人民の自由權利なるものが蹂躪せらるゝを見るや、千八百一年那翁が「オペラ」の劇場に行かんとする途中を要し、那翁の馬車に向ふて、爆裂彈を投げたるものあり、幸ひ那翁には當らざりしも、後より續き來れる從者五十餘人を斃したりき。次で起りたるは、二大將軍の謀反より來る暗殺策なりし、前に和蘭を陥落せしめて有名なる將軍ビーシユグルーは、かのバラード那翁とが企てたる大打撃のときに捕へられしも、其後逃れて英國に在りしが、此際彼の塊軍をホーヘンソンドンに破りたるモローが、當時那翁に懾焉たるを開き、これに欺を通じて共に那翁を斃さんと

欲し、苟かに英國より歸り來りて、モローと百事の打合せを爲しつゝ、ありしに、端なくも其事發覺して、連累者四十餘人と共に捕へられ、忽ち入牢の身となり、其後モローは米國に逐放せられ、ビーシユグルーは半死し、王黨の巨魁カドーパルは勿ねられ、其他は斬罪若くは流刑に處せられぬ。然るに此際王黨の主傾と目差されたるホルボン家のドンガン公も亦た同類者として殺るされしが、個は全く此謀反に與からざりしものなるも、那翁が後日を慮りて、此際之を除きたるものと噂せられき。

那翁帝となる

那翁の勢力は益々隆々として揚り來れり。於此乎千八百二年に於て、國家評議員は那翁の意を受けて、全國の地方議會に向ひ、元來執政官の期限は十年間なるも、更に撰舉の際に騷擾を來すの恐れあるを以て、寧ろ此際那翁を終身の執政官に戴き、猶ほ那翁をして其後の繼續者を撰ばしむべしと云へる議案を呈せしめしに、全國の地方議會は、直ちに大多數の決議を齎して之れを賛せり。然れども那翁の希望は嘗に終身の執政官となるに止まら

す、此際帝王となりて以て、萬機を掌握し、己のが理想の政治を天下に施くにありしかば、其後千八百四年に至るや、那翁は更らに元老院に命を含めて、今回は那翁を帝位に即かしめ、又た其子孫に其位を譲るべき權利を授くべき議案を呈出せしめしに、前條に陳ぶるが如き大謀反人を起したる直後なれば、國民は寧ろ那翁に同情を表し、斯る大英雄にして、王者の政を施きつゝあるものを帝王に歎くは、愧づべきことにあらずとなし、是れ亦た大多數を以て確定するに至れり。

帝國時代 (自千八百四年至千八百十四年)

- 那翁の幼時
- オースタリツンの大戦
- 魯國との開戦
- 那翁の大陸組織
- 露佛の同盟
- 葡萄牙と西班牙の方面
- 那翁更に填軍を破る
- 那翁の離婚
- オースコー道征の大敗
- パリイの陥落
- ル十八世の即位
- ワオタルローの戦
- 那翁と外戦
- 那翁諸屬地を治む
- 伯林陥る
- 露佛の激戦
- 那翁の内政
- 那翁露帝と會す
- 那翁と法王との衝突
- 大陸組織の破綻
- 那翁と連合軍との會戦
- 那翁エルバに流さる
- 那翁の掉尾と終焉
- 那翁セントヘンナに流さる

こゝに那翁の生長時代に就て少しく語るどころあらしめよ。

那翁は千七百六十九年八月の十五日、當時佛國の屬地たりし伊太利のコルシカ島に生る、然るに其父は此コルシカを獨立せしめんと企て、事成らず、其後四方に流寓しながら、那翁をパリーの兵學校に入れて、其成長を楽しみ居りしに、那翁が十六歳のときに死し去り、那翁の家族をして益々困難に陥らしめたり、乃ち那翁は逆境に處して成長したるものとす、然れども其逆境は彼をして大奮發心を起さしむるに至れり。彼れは其父の死後間もなく兵學校を卒業して、砲兵少尉となりしが、常にブルタークの英雄傳を喜び、アレキサンドル、シーザル等の蹤を慕ひ、他日時を得ば、則ち彼等の列に加らんとの大志を抱き居たりき。然るに端なくも佛國革命の亂となりしかば、直ちに風雲を睨して起ち、先づ其父の志を繼がんと欲してコルシカに到り、更に獨立の計畫を爲せしも失敗せしかば、復たパリーに歸りて軍隊に入り、前條に述ぶる如く、英軍をツローの港に撃て、初陣の功を擧げ、爾來パラーに用ゐられて、遂に本舞臺に上る

に至りしものとす、而して其後の經歷に就ては、即ち前條に陳ぶるが如し。

那翁と外戰

那翁は帝位に登るや否や、更に英國を襲ふの用意を爲したり。蓋し之れより先き、英國がアミアンの條約に従ひ、マルタ嶋より引き拂ふべきを引き拂はず、却て更に佛船を奪ふの處置に出でたるを以てなり。然るに英國史中に見たるが如く、此の時那翁が英國を襲ふの用意を爲すと同時に、も英亦た大に之れに備へしかば、聊か之れに向て躊躇する中、奥國が俄かに八萬の軍勢を佛に向て繰り出したりと聞き、然らば先づ之を撃つべしとなし、電雷の速力を以て、之をウルムに撃ち、之を破ると同時に三萬人を虜にせり、蓋し三萬人を虜にすると云ふ如きは、實に非常なる戦術と勇氣とを現はすものにて、那翁が如何なる戦闘を爲せしかば、之を以ても其一斑を知るべきなり。加之那翁は此勢に乗じて、直ちに奥都ウヰンナを衝きしに、敵は大驚慌に打たれつゝ、都城を棄て、潰走せり。何んたる迅速ぞや。尤も之れと同時に、海戦に於ては此際佛の艦隊は、例のツラファルガルに於て、テルソンの爲めに全滅せら

れぬ、吾人は之を英國史に見たり、故に今之を復せず。
 左れば當時那翁は埃都を領して、新氣滿天の威を振ひ、埃が必ず降服すべしと期待せしに、左はなくして埃の太公チャールズとジョンとが、匈牙利の方面より大軍を率ひ來りて、こゝに埃都の恢復を圖らんとすと聞くのみかは、一旦此埃都を落ち延びたる埃帝が、早くも露帝と結び、兩帝自ら兵を督して、我れに向ひつゝありと聞くや、那翁は却て大に之を喜び、然らば埃露の兩帝を擒にするは、此一舉にありと爲し、直ちにオウスタルリツツに出で、之を撃ちたり。吾人はこゝに此の戦況を陳ぶる時を有せず、然れども其結果を云ふときは、此際埃露の兩帝は、其將をして戦はしめ、己れは邸上に在て眺め居りしが、那翁の猛烈なる攻撃に、我軍の潰敗するを見るや、愕然として其邸上より出奔せしかば、那翁は其一萬人を殺し、二萬人を虜にし、大砲百二十門を獲取せり、而して露帝は其儘逃げてモスコフに歸りしも、埃帝は行くところを失し、止むなく那翁に和を求めて、いよくブレスボルグの條約となり、總て伊太利の領地

を佛に譲り、多瑙河畔の小國とバヅアリア、ウーランボルグ、バーデン等の諸地を己れの管内より離れしめて、佛の聯合に委せしめ、自今日耳曼帝と稱するを止めて、單に埃國王と稱するに至りぬ。然而して此等外戦の年月を云ふときは、いづれも千八百五年の冬の出來事にして、ウルクの戦が十月の二十日、ツラフアルガルが同月の二十一日、即ち殆んど同日、那翁の埃都占領が十一月の十三日、オウスタルリツツの戦が十二月の二日なりしなり。

那翁諸國地を治む

那翁は埃の凹むや、此際早くも帝國主義の確立に従事し、かねて伊太利の諸國を従へ、ヅエニス并にザルデニア等を壓し、盡く之を佛の屬地たらしむるに至りしが、此際猶ほも降らずして抵抗しつゝありしチープルを征し、之を其兄のジョセフ、ポナバルトに譲りて王たらしめ、更に其弟のル井、ポナバートをして和蘭の王位に即かしめ、先きに埃王即ち日耳曼帝の手より離れしめし諸方を合し、之れを「來因の同盟國」^{コンネクトド}と爲して己れに隸屬せしめ、いづれも己のが帝國主義を天下に施くの準備たらしめたり。

普國との関戦

三百六

の國也。然るに其後は兎角に傍觀の地位に立ち居しが、當時普王フレデリック三世懦弱にして事に任へず、其后妃ルルサは美人にして且つ精神家なるを以て、廷臣等は之を擁して那翁に當らしめんと欲し、ルルサも亦た大に任ずるところありしに、偶々那翁が之を聞てセ、ラ笑ひ、女子何事をか能くせんやと嘲りしより、之を聞きたる普王并に普民は、俄かに態度を一變し、忽ち十五萬の大兵を召集し、往時に佛國革命の際、普奥の同盟軍に大將たりしブランヌウイックを呼び起し、いよ／＼佛境を差して攻め寄せ來れり。然るに那翁は之をエナに迎へ撃て、其一萬人を殺し、其二萬人を虜にし、大砲三百門を奪ひたれば、普軍は見るも哀れなる状態にて潰走し、普王は其都伯林にすら歸る能はず、逃げてコニグスベルグに退き、急ぎ救援を露帝に乞ふに至りしかば、那翁は其儘伯林を差して乗り込み來り、苦もなく之を占領し、遂に普をして奥と同様の運命に會はさしめぬ、時に千八百六年の十月なり。

那翁の大陸組織

三百七

此時に當りて、那翁の敵たるものは奥、普、露、英の四ヶ國なりし、即ち當時の列強なりき。然に奥普は已に凹み、露はオーストラリアの敗北に縮み、ひとり海上に雄を稱して、其態度如何にも傲慢に見へしは英國なりしも、かのツラファアルガルの海戦以來は、那翁も之を奈何ともする能はず、因て此際此の英國を苦めんと欲して、所謂大陸組織なるものを起し、『爾來歐洲大陸中は如何なる國たるを問はず、凡そ英國と貿易若くは交通するものあらば、其船は悉く奪ひ其人は悉く虜とし、其國は那翁の劍の罰を受くべきもの』となし、之を伯林より天下に公布せり、時に千八百六年の十二月也。

露佛の激戦並に其同盟

那翁は伯林に在て暫く人馬に呼吸をかせ居りしが、當時波蘭人は那翁が普國を凹ませしと聞き、大に喜んで之を祝し、且つ此際獨立せんことを那翁に願ひしかば、那翁は當時己のが配下に屬したるサキソニー侯をして假りに之れに王たらしめ、百般の政治は之を其地人民の自由に任せ、次で伯林より波蘭の都ワルソーに移りたり。然るに此時に當りて、

露帝アレキサンドル一世は、かのオーストラリツに於て蒙れる敗辱を雪がんと欲し、有名なる將軍ベニンセンに大軍を授けて進撃し來り、終に那翁とエィローに於て大激戦を爲さしめたり。此役や露は二萬を失ひ、佛は三萬を失ひ、而して果ては双方交綏したるにてありし。然れども佛の損失が露より多かりしを以て、先づ那翁の敗と見做して可なるものとす、時に千八百七年の一月とす。左れば那翁は更に露を撃つの際を運らし、其後即ち同年六月フリートランドに於て衝突せしが、今回は大に露軍を破り、アレキサンドルをしていよく勝つ能はずと諦めしかば、アレキサンドルは一時休戦を申込み、間もなくニーメン河上に筏を浮べて、こゝに兩帝の會見となり、爾來兩國同盟して英に當るべきを約するに至れり。然るに此際那翁のアレキサンドルに接するや、極めて鄭重なる態度に出で、殆んど義兄弟たらんと欲するの意志あるを示しぬ。蓋し當時露兵の案外に強かりしを見て、之を敵とするよりも寧ろ之を味方とせんと望みたるに由るべし。世に稱す、那翁は嘗て人に告げ、後日天下を征服するものは

必ずコサックの兵ならんと云ひしとぞ、蓋し此の消息を洩したるものなるべし。斯くて之と同時に普もいよく折れて那翁と和せしが、此時チルジットの條約に於て、普は其祖先フレデリック大王が折角骨折りて擴張したる領土の半を失ふに至り、那翁をして其處よりウエストフエリア王國を起さしめ、己のが弟のゼロメをして之れが王とならしめぬ。

那翁の内政

煥折れ、普挫け、露和したるを以て、此際那翁は再び内政の方面に其力を傾けぬ、而して先づ其一を教育とす、革命以來佛國の教育制度は、全く破壊せられ居たりき、於此乎那翁は之れが統一の制を施き、大學校より、高等學校より、其他中小の諸學校に至るまで、相互の間に聯絡を通せしめ、殆んど干渉的に其の普及と發達とを圖りたり。其二を兵制とす、今や天下を相手として戦はざるべからざるに至りたるを以て、國民皆兵の趣意に従ひ、兵員を増し、徵兵令を履行し、何處までも武力を落さざらんことを企てたり。其三を言論の自由に干渉したることとす、此時に當りて「ボルボン」黨并に共和黨の殘

烟は猶ほ熄まざりき、故に暫く之を壓するの必要ありとなし「モニートル」なる半官報の如きものを發して、専ら己のが施設を辯護せしめ、他の諸新聞雜誌の如きには、ドシ／＼之れに干涉し、之をして言論を肆にすること能はざらしめたり。斯くて其四を議院廢止の事件とす、那翁の帝位に即くときには猶ほ議院なるものありき、然れども彼れが漸々と帝權を振ふに至るや、此者や有名無實の空物となりて存せしに、此際思ひ切つて之を廢するに至りぬ、然而して此等を斷じたるは蓋し左の動機に由るなるべし、曰く「予れは卑賤より身を起したるが故に、教育をして我帝政の味方たらしめ、武を以て之を威し、百事秩序の定るまで、暫く反對黨の氣焰を制するを安全なる道なりとす」と、而かも此れは是れ終に反動の種を蒔くに過ぎざりしことは、後にて思ひ知られたり。

葡萄牙と西班牙の方面

此時に當りて英國を除くの外、歐洲の大陸は、盡く那翁の劍下に伏したりき、而して大陸組織を守るべく約束せり。然れども葡萄牙に於ては、此事容易に行はれ難かりき。蓋し當時字内の貿易品は一旦英

國に集り、英國より葡萄牙に渡り、葡萄牙より歐洲全般に散布せらるゝ習慣なりしに、今や英國と取引すると能はずとせば、物價忽ち騰貴して、所在人々の不便を感ずるに至るのみかは、葡萄牙も其利源を失ふに至りしかば、表面には大陸組織に従ふ真似して、裏面には不相變英國と交通し居たりき。於此乎那翁は之を聞くや、左らば先づ葡萄牙を直接の管下に置かざるべからずとなし、忽ちジュノーに兵三萬を授け、直ちに葡萄牙の都リスボンを陥れ、其王の南米ブラジルの領地に逃るゝや、全く此國を奪ひ去れり、時に千八百七年の十一月也。次で西班牙は當時大馬鹿なるチャールズ四世と淫婦なる后妃ルイサを載て、邦家殆んど腐敗し去り、佞人ゴドイ宰相となりて其勢力を振ひ居りしかば、那翁は此ゴドイに利を陷はせ、之を通じて西班牙に葡萄牙を攻むるの援助を爲さしめ、左る代りに葡萄牙の半地を割き與ふべしと約せしが、其葡萄牙を取るに及ぶや、其約を踐まず、却て將軍ムラーをして西班牙の首府マドリットを領せしめ、前きに伊太利のネーポルスに王たらしめたるジョセフ、ポナバルトを呼び寄

せて、之を西班牙の王と爲す旨宣言せり。左れば之を聞ける西班牙國民は大に憤り、所在人民會を設け、シヴイルに本陣を置き、直に大軍を起し、其將カヌタニオースをして二萬人を率ひ來れる佛將フーポントを敗て之を降し、其後佛軍がサラゴサの堡壘を圍みしも、亦た能く撃て之を退け、勢ひ猛烈を極めしかば、之を聞きたる葡萄牙人は、又大に之れに激せられ、所在起つて佛軍に抗するに至り、今や佛軍の威力は、此方面より崩れかゝるよと見へたりき。

那翁再び露帝と會す

那翁は西葡の形勢を聞き、最早や躊躇すべきにあらず、「されば自ら出陣して目に物を見せてくれん」と意氣捲きしが、恰も此時に當りて、更に埃の頭を擡げ、もしも那翁にして西葡の方面に向ふあらば、直ちに其後を襲はんと擬せしかば、こゝに露帝と再會して、從來の盟を確むるの必要を生せり、於此乎エルフルツに於ける兩帝の會見となれり。此時や兩帝共に部下の英雄豪傑を引き伴れて相會し、凡そ三週間ばかりも、同處に留りて豪遊を試みしことゝて、實に今古の偉觀を極めしと云ふ。斯くて那翁は此際露

帝に向ひ、總て多瑙河畔の埃領は、皆之を卿に與ふべきが故に、もしも埃にし我後を襲ふあらば、必ず之を牽制せよと申出でしに、露帝は之を引受け、幸に憂慮する勿れ、予は十五萬の大兵を繰り出すべしと述べしを以て、那翁は安んじて西葡に向ふことと相成りたり。

那翁西班牙に向ふ

然るに此時に當りて、英國は西葡を援けんが爲めに、先づアーサー・ウエスレー即ち後のウエルリントン卿を遣はし、今や葡萄牙を領し居るジュノーを破らしめ、盡く佛軍を逐ひ掃はさしめたり、是れ英國史中に見るところ、時に千八百八年の八月也。因て那翁も最早や。いよ／＼躊躇する能はず、直ちに兵五萬に將として、西班牙に入り込み來りしに、那翁の前には、如何なる西班牙の將軍も立つこと能はず、人民は大驚慌に打たれ、マドリットは再び陥落せられたり、時に千八百八年の十二月なり。尤も那翁は當時久しく西班牙に留ること能はざりき、こは果して豫期の如く、埃國が忽ち那翁の後を襲ひたるを以てなり。因て那翁は將軍ソルトに其後を委せ置き、之を

して今や西班牙を援はんとて向ひ來れる英將ジョン・モールを撃たしめ英國史を見よ、己れは直ちにバリーを差して引き返せり。

那翁更に埃軍を破る

此時埃は本國より三十萬と、匈牙利より二十萬の大兵を擧げたるなり、而して那翁は全軍を擧ぐるも、二十五萬の上に出でざりしなり。斯くて此際伊太利の方面に於ても更らに埃佛軍間の戦争を惹起し、互に勝敗しつゝありしが、大陸の方面に就て云ふときには、最初エックムルに於て那翁と埃の總督太公チャールレスとの間に戦闘ありしが、チャールレスは一撃の下に敗走して、ボヘミアにまで逃げ行けり、而して那翁をして又もやウツケンナに乗り込ましめたり、時に千八百九年の五月なり。然れども同月の二十日に至りて、更に多瑙河畔なるアスベルンの戦となるや、此時チャールレス大に勇を鼓して能く戦ひ、己れは二萬人を失ひしも、那翁をして三萬人を失はしめ、且つ彼れより退却せしめたりき、而して是れ實に大功なりき。然るにチャールレスや此時初めて那翁を破り得たることとて、其心大に驕り、彼れまた興みし易しと爲

す間に、那翁が更に援兵を得て攻め來るに會ひ、今回はワグラムに於て大敗し、埃軍をして復た起つ能はざらしめ、終にシヨンブルンの平和條約となり、かのフランスブルグの條約よりも猶ほ其上の讓與を餘儀なくせらるゝに至りぬ、即ち此時カルニオラ、フリユリー、クロリア及びグルマシアを割き、露にも多瑙河畔の或地を取らるゝに至りぬ、蓋し露は此時大兵を繰り出さざりしも、猶ほ那翁を助くるの態度に出でたるを以てなり。

那翁と法王との衝突

中世紀より近世史を通じて、屢々見るものを、帝王と法王との衝突とす。那翁は可成宗教を尊び、法王を敬する方法を取りぬ、然れども當時其兄ジョセフ・ボナパルトが伊國のチーブルスに王たりしより以來、法王パプス七世と衝突を生じ、バイアス七世が教權を以て王權に干渉するを喜ばず、其將をして法王を執へしめ、其領地を削ぎ、年金を與へて之を押籠めしめたり、因て法王は怒つて那翁及び其他の者を破門せしも、最早や今日に於ては、其破門も昔日の如き効驗なく、人をして時勢の變轉に驚かしめぬ。

那翁の離婚

那翁は第二伊太利の遠征に上る前、ジョセフィンと云へる貴族の寡婦と結婚し、之れが爲めに、益々上流社會と交はるの便宜を得たりき、而して其愛情も濃厚なりし。然るに帝位に登りしより、ジョセフィンに子なく、子なきときは、己のが後を繼がすものなきとの理由を以て、離婚をジョセフィンに申込み、更に露帝の妹にて當時十三歳になるものか、若くは奥帝の女にて當時十九歳になるものかの孰かを貰はんと試みたり。ジョセフインは泣けり、而かも終に納得せしめられぬ。露帝は之を知つて暗に断はれり、因て止むなく奥帝の女マリアルイサを娶りぬ。蓋し此際嗣子を求めたるには猶ほ一理由ありき、而かも十九若くは十三の小女を求めたるには理由なく、爲めに俄かに人心を失ふの種とはなりぬ。

大陸組織の破綻

大陸組織には英國も閉口せり、然れども從來英國よりの輸入品を以て生活したる大陸の人民に於ては、其物價の騰貴せしが爲めに、更に英國よりも閉口せり。於此乎前條に見たる如く、第一葡萄牙西班牙に於て

破綻を生じ始めたりしが、更に今回は和蘭に於て破綻を生じ始めぬ、是れ同じく貿易國たりしを以てなり。左れば那翁は同國の王位に即かしたる己のが弟ル井ポナバルトに、之れが厲行を命せしに、ル井ポナバルトは、彼のジョセフインが先夫に由て擧げたる女を妻と爲すものなりしを以て、目下那翁の離婚を喜ばず居りしかば、其不可能なるゆえんを説きしに、那翁は怒りて之を廢し、和蘭を直轄領となせしに、ル井は奥國に亡げ行けり。次ぎに日耳曼の北濱に在る諸州にも大陸組織の厲行を命じ、多くは之を直轄となし、終にオルデンボルグ公を廢せしに、オルデンボルグ公は露帝との縁家なれば、怨を露帝に訴へしに、此際露帝は妹を那翁に與へざりし事件より、已に那翁との間に隙を生じ居たる折柄なれば、いよく、那翁に抗すべく決心し、遂に天下に向ふて、最早や大陸組織は守るに及ばずと宣言せり。加るに當時瑞典を征服して其王を廢し、代ゆるに瑞典の血族に當るものにて、己のが將たりしバルナドット侯を以てし、之にも大陸組織の厲行を命せしに、バルナドットも亦た其人民の難澁を見て、

之に従はざりしかば、那翁は此のバルナドットを廢せんとし、畢にバルナドットをして、露帝と結ばしむるに至らしめぬ。

三百十八

モスコー遠征の大敗

露帝已に那翁に敵するに決しぬ。於此乎那翁も今回はいよく露國を滅亡せしむべしとて、大兵六十萬を率ひて、露都モスコーを指して乗り出したる。時に千八百十二年六月なりしが、此時埃王も其皇后も宰相メタルニヒも、普王も其宰相ハルデンベルヒも、那翁の新婦たるルサも當時已れど那翁の間に擧げ居たる一男兒即ちナポレオン二世を携へつゝ、那翁の遠征をドレスデンにまで見送りたり。斯くて最初スモレスコに於て小戦あり、次でポロヂノに於て大戦あり、双方に於て數萬人の死傷を出せしが、其れより露軍は次第に北方に退き、終にモスコーをも燒きて、猶ほも北方に退きしに、佛軍はモスコーに至りしも、住むべき家なく、食すべき食物なく、兎角する中最早や九月の中旬にて、已に寒氣の身に泌み始むるありて、前途覺束なく見へしかば、六十萬の大軍も今は如何ともする能はず、兵士の餓死する

もの日に幾千人に上り、馬の斃るゝもの日々幾萬頭に及びしかば、流石の那翁も、止むなく退陣と決せしに、途中の混雜云ふべからず、殊に間もなく露軍の逆撃に會ひしかば、大敗の結果六十萬人中満足に還り得しものは、僅に十二萬、佛境に入り得たりしものは、僅かに八萬に過ぎざりしと云ふ、而して那翁の運命も之れより落日の有様となりぬ。

パリーの陥落

那翁の大敗と聞くや、パリー市民は動搖めけり、而して當時共和政治を唱へて獄中の身となり居たるマレー將軍は脱獄し來り、「那翁は最早や死したれば、此際元の自由政體に復さじむべし」と説き廻り、殆んど新政府を打建てんとせり。然るところ那翁は、當時大敗したりとは云へ、間もなく無事に歸り來るのみかは、更に三十萬の大兵を召集し始めたれば、人々更に舌を捲て驚きたりと云ふ。尤もモスコーの大敗を聞くや、歐洲の各國は、皆一齊に起つて那翁に抗し始め、普王も今は那翁を追撃し來れる露帝と握手し、いよく兵を合せて佛境に向ひ、(露普國史中に詳かなり英國も亦た英國史中に

見たる如く、此際ウエルリントンをして已に西葡兩國を領せしめ、將にパリ
を望んで進みしかば、那翁の運命も、最早や終焉に近けりと見へぬ。

斯くて最初の戦は、日耳曼のポルトセンに於て戦はれしが、此時普露の聯合軍
は三十萬、那翁の軍は二十萬なりし、而かも聯合軍は又た復た那翁の敵にはあ
らず、那翁が陣頭に臨んで、號令するを聞くや、忽ち怯氣を生じ、須臾にして
那翁が旋風電撃の舉に出づるや、みる／＼眼目を舞はせて潰れせりと云ふ。尤
も那翁も此役に於て二人の名將を戦死せしめ、之を惜んで涙を流し、其後兎角
に鬱々たりしかば、之を眺めたる諸將は、「那翁も亦た老いけり」と嘆く中、那
翁は此際聯合軍より、七週間の休戦を乞はれて、例になく、容易く之を諾しぬ、
或は那翁より休戦を申込みと傳ふる史家もあり時に千八百十三年六月也。

然るに此の休戦の承諾は、那翁にとりて失敗なりき、何んとなれば、聯合軍は
此間に姿勢を整へ、埃も此聯合軍に加ふるに至ればなり。當時埃の宰相メタル
ニヒは一代の辯物なりしが、一日來りて那翁に謁せんことを乞ふ、那翁因て之

を延見するに、意氣地なき官人の如くなりし、於此乎直ちに問ふて曰く、「卿は
如何なる使命を埃帝より齎したるか、予が埃に望むところは他にあらず、援兵
にあらず、助力にあらず、只だ夫れ中立を守らんのみ、見よ八日の後には、再
び聯合軍の潰敗と降参とを見せしめん」と。然るにメタルニヒは自若として答
へて曰く、「思ふに君は最早や其意を得給はざるべし、普露兩民の敵愾心は、已
に非常なる程度に上れり、特に佛國の人氣も、亦た平和を希望して、君を仰ぐ
こと舊の如くならず、左れば今や君の爲めに計るに、宜しく從來の侵奪地を還
附し、單に佛國の境土のみを以て、満足するに如かざらんか」と云ひ、更に其語
を續がんとせしに、那翁は最早や忍ぶ能はず、「メタルニヒよ汝は幾何の金を英
國より得たるか」と意氣挫き、忽ちメタルニヒを逐ひ返したり、於此乎埃國も
此時より聯合軍に投するに至れり。

斯くて其後はドレスデンの戦となれり、然るに此ドレスデンの戦に關して語る
べき一豪傑あり、之をモローとす。モローは前條に述べしが如く、曾て那翁に

殺らざれんとし、其後脱れて米國に居り、今回露帝の招くところとなり、其參謀官中に加はりしが、此際作戰計畫に就て説て曰く、「那翁は猪突武者のみ、因て正面より向はず、周圍より驅り立て、始終彼れをして虚を衝かしめ、以て奔命に疲れしむるに如かず」と。因て衆皆之を賛し、即ちドレスデンの戦に、其計畫を實行せしに、那翁は果して之れに窮し、此のドレスデンの戦には、大勝を奏したるにも關はらず、未だ聯合軍の疲れざる間に、己れ先づ疲るゝに至り、大打撃を敵に加ふること能はざりき。然るにかれモローは此戦中砲彈の爲めに、其兩脚を腕れしが、其露帝の前に運び來らるゝや莞爾として告げて曰く、「君よ我が役目は已に盡きたり、而かも猶ほも我建策の如くして行け、那翁は必ず囊中の鼠の如くならん」と、而して尙ほも其口に烟草を喫しながら、泰然として死したりと云ふ、其那翁が嘗て彼れを目して、眼上の瘤と思ひしもゆえなしとせず。

ドレスデンの後にラヂブチヒの戦ひありき、而して是れ實に關ヶ原の戦なりし

也、當時聯合軍は二十三萬、那翁は十四萬の兵を出せり(戦史により兵數に差あり)。然るに従前ならば、直ちに一聲の下に破るべきに、聯合軍が矢張りモローの戦畧に従ひし爲め、那翁は兎角に抄々しき衝突を見る能はず、聊か氣拔けしたる態なりしが、當時聯合軍は遠巻きながらも、益々兵を加ふる有様ゆえ、之を如何にせんと考慮する中、今まで我軍に合し居たるサキソニーとウルタンベルヒの兵一萬二千が、俄に裏切して聯合軍に投せしかば、那翁も今は落膽して休戦を申込み、其應せられざるを見るや、止むなくエルフルトに退却せり。

那翁已に衰運に向へり、左らば管にサキソニーウルタンベルヒのみと云はんや、今日まで那翁に征服せられ居たる歐洲の諸國は、風を聞て謀反し始め、嘗て組織したる來因同盟も破れ、ハノヴェルも英に復歸し、ウエルリントンも今は西班牙よりジョセフ・ボナパルトを追撃しつゝ、現はれ出で、チープルスに王として伊太利を治め居たる那翁の將ムラッドも、款を奥國に通するに至れり。於此乎那翁はエルフルトに在りて之を聞き、憂憤禁する能はず、先づ其兵を關みせし

に、已に入萬に滅じ居たれば、此れにては何事も爲す能はずとなし、更にパリに歸來して大兵を募らんとせしに、最早や之に應ずるもの多からず、僅に十一萬より多くを集むる能はず、因て止むなく之を以て聯合軍に當りしに、聯合軍は此際一計を案じ、露將ツインチングローデをして那翁を遊撃せしめ、聯合軍皆此に在るかのように見せかけ、而して眞正の聯合軍は、露帝を元帥として總勢二十三萬人ばかり、間道よりパリを望んで攻め入りたり。パリには當時那翁の新婦ルイサ男子を擧げて喜ぶ間もなく、此の狀態に變せしかば、逸疾く其子を抱て逃亡し、二萬有餘の守備兵も此大軍に向ふては、如何ともする能はず、モーションエル及びマルモントの二將軍に率ひられて降参し、聯合軍はパリ市城の主人となれり。那翁は最初之を知らざりき、而して已にツインチングローデに當らんとせし途端に於て之を聞かざり、直に兵を返して歸來せしが、事の已に後れたるを見、「左らば最早や此れ迄なり、我戦死の時來れり、凡そ予れと共に死なんものは皆來れ」と意氣卷きしも、漸く諸將の制するところとな

り、兎も角も一旦平和條約を結び、更に謀るところあるべしと爲し、使を露帝に送ること爲せしが、露帝は此時已にパリ議會と元老院とに約し、那翁とは直接談判せざることに決し、且つ已に「自今那翁は帝にあらず、又た其子孫も帝たる能はず」と布告したる後なりければ、直に其使者を逐ひ返したり。那翁はいよく憤れり、而して最早や忍ぶ能はずとなし、將に獅子奮迅の戦闘に出でんとせり、而かも其將チーを始めオーデノー、レフエーヅル等は之を肯かず、目的なき戦闘には随ふ能はずと言ひ張りければ、那翁も今は此れ迄なり、左らば予れ今より位を遜るべきにより、左る代りに、責めては予が子をして予が後を嗣がしめよと、更にチーを遣はして露帝に嘆願せしめしも、又た聽かれず、いよく降参と定り、其結果地中海の一孤島なるエルバに流竄せらるゝこととなり了りぬ、時に千八百十四年の四月也。英雄の末路も亦た憐れなりと謂はざるべからず。

那翁流竄後の形勢

人心の反動も亦た奇なる哉、已に那翁の命運を盡

きたりと視るや、パリ市民は忽ち「ボルボン」家萬歳、王黨萬歳と叫び始め、又た那翁を云ふものあらず。已にして那翁が流竄せらるゝや、元老院并に議會等は、今日まで有名無實に存在せしも、今や假りに政治を執り、かゝる上は、更に「ボルボン」家の王統を迎ふべしと爲し、當時英國に遁れ居たるル非十六世の弟を呼び戻し、之をル非十八世と稱して王位に即けぬ。蓋しル非十六世の勿ねらるゝや、王黨は其子を以て一時ル非十七世と稱せしことあるを以て、今や之を十八世と爲したるなり。

ル非十八世は久しく非運に日を送り、已に五十九歳の老耄にてありき。然れども之れに侍したる王黨の首領達は、之を擁して直ちに一の宣言を出したり、今其路に曰く、自今佛國をして立憲政體國と爲すべし、曰く元老院と衆議院の兩院を設くべし、曰く宗教と言論とを自由にすべし、曰く人民は生命と財産との權利を有すべし、曰く政治上如何なる議論を爲すとも、又た撰舉上如何なる人に投票するとも、逮捕若くは監禁せらるゝことなかるべし、曰く政府は努めて

人民の自由を保護すべし云々。人民は之を見て歡喜せり、然るにいよゝ國會の召集日に當りて、更に別種の勅令出でたり、而して今其畧に曰く、今回の憲法なるものは、王の權利と自由の意志とに依りて出でたるもの也、曰く代議士たる者は滿四十歳以上のものと直接國稅一千フランを納むる者に限る、曰く三十歳未満のものは撰舉權を有せず、曰く總ての法律は王より出づるものたるべし、曰く國會は法律を建議若くは請願することを得るも、王の之を否定するときは、其會期中再び之を出すを得ずと。於此乎人民は稍々其眞意を疑ひ、人心更に恟々たるに至れり。

又た當時埃都ウヰンナに於ては、己に一代の怪物を押し籠めたることゝて、各國互に代表者を出し、善後の策を立んとて、メラルニヒを議長として、英よりはウヰルリントン行き、普よりはブルーヘル行き、佛よりは王黨の辨物タネーランも行きしが、先づ祝會を開くべしとありて、晝は宴會、夜は舞踏會と、狂喜歡樂の最中なりき。然るに急使あり。那翁はエルバより脱走し、將にパリ

を指して進軍しつゝありと。於此乎之を開きたる諸代表者は、肝を冷せり、而かも已に躊躇すべきにあらざれば、直ちに三軍團を組織せり、即ち一は英と白耳義とハノヅエルとの兵を合して、ウエルリントン之れに將とし、副ゆるに普軍を率ゆるブルーヘルを以てし、二は埃軍、三は露軍にして露帝之を率ゆることなりぬ。

那翁の掉尾と終焉

之れより先き那翁はエルバに在りて再舉を企て、

窃かに人を伊太利に使はし、兵千人ばかりを得てければ、直ちに二隻の船を繕し、佛のカーン附近に上陸し、パリを望んで進みたり。佛國政府は兵を出し、邀て之を撃たしめぬ。然れども目下餘り面白からざる勅令を出したることゝて、人心は更に那翁に傾き始め、此兵士等は畢に那翁に附隨し去れり。那翁の右手たりし將軍チーは、那翁の去りし後、往日の非を悔て平和論者となり、目下パリーの守衛を爲し居りしが、之を聞て、「ア、那翁も最早や人殺を止むべきなり、出で予れ行て之を諫め、肯かすんば擒にせんのみ」とて出で來りしが、其リオン

に於て那翁に會ひ、那翁が「オーチーなるか、猶ほ無事なりしか」と云ひつゝ之に抱き附くや、勿ち心を變じて、「我帝よ我帝よ」と答へながら、更に那翁に従ひたり。左れば那翁は何んの妨害をも受けずして、パリに入り來りしかば、ルネ十八世はグントと云へる一小村に落ち、王黨は散亂したり、時に千八百十五年の三月なり。

那翁はパリに入り來るや、當時に於ける國民の意嚮を察して、爾來立憲政體を守るべきこと、ルネ十八世の約せしよりも猶ほも幾倍の自由を人民に約せしかば、國會は那翁を歓迎したり。然れども那翁は其後政治よりも、寧ろ軍隊の準備に其心を用ひ、瞬く間に二十二萬の出陣兵を募りしかば、人民は更に欺かれたるかと思ふ間もなく、こゝに聯合軍との大戦争となれり。即ち本年の六月に至るや、那翁は十二萬の兵を率ひ、白耳義に於てブルーヘルを撃ち、チーをして四萬五千に將としてウエルリントンを撃たしめたり。然るに那翁はブルーヘルを撃て之を破りしも、チーはウエルリントンに向ふて其志を得ず、因て

暫く那翁を待ち合する中、こゝにウオータローの大戦となりしなり。ウオータローの大戦に就ては、已に之を英國史に陳べたり、故に今之を復説せざるべし、而かも其遺漏を云ふときには、此時那翁は已にチーと合して前面を見れば、ウエルリントンにはウオータローの野に守勢を取て搦へたり、仍て幾回か騎兵を放て之れを襲はしめ、已に英軍を蹂躙せしめたりと想ひしも、英軍の何處までも潰亂せざるを見るや、大に立腹し、「かれ英奴は敗を知らず」と叫びたりと云ふ。斯くて又た普軍の現はれ來りて英軍と合し、其攻勢に轉じたるを見るや、「ア、我事も暫時終る」と言ひ放ちつゝ、其儘其軍を収容することを爲さず、獨り馬に鞭ちつゝ、パリを望んで亡げ去れり、蓋し怖れて亡げ去りしにはあらず、更に大軍を用意せんが爲めなりし也。然れども最早や佛の元老院も議會も之を肯くべくもあらず、人民も亦た之れに應ずべくもあらず、依て世を退て帝位を其子に譲らんと請ひしも容れられず、再び王黨の爲めに廢位の宣告を天下に布告せらるゝに至りしかば、今は此れまでなりとて、竊かに米國に逃んとせ

しも、英國艦隊の封鎖に會ふて之れ亦た能はず、止むなく英艦隊の一なる「ヘンルフォン」に其身を投じ、終に英國政府の命令によりて南大西洋の一孤島セントヘレナに流さるゝに至りぬ、時に千八百十五年の十月なり。斯くて其後の消息については、是れ那翁一個の傳記にして佛國史に關係少きを以てこゝには云はず、而して那翁は其後六年を経て、千八百廿一年の五月、殆んど宇内より忘れられつゝ死し去れり。ア、國家の隆替と、人生の榮枯とは、吾人をして感慨の裡に彷徨せしむ。

佛國革命論

顧みればル井十四世は其死するとき、ル井十五世を戒めて曰く、「汝位に登らば、須らく隣邦と平和を保ち、驕奢を慎しみ、最も國利民福を旨とし、之れに全力

を注ぐべし。ル井十五世は當時未だ五歳の兒童のみ、其の何んの意たるを解する能はざりしなるべし、然れども長するに及べば、之を記して以て大政の方針を定むべきに、愚にして之を守らず、且つ賢者を擧ぐることを爲さず、ル井十四世の失敗を恢復すること能はざりき。次で十六世に至るや、彼れは善人なりしも明君にはあらず、意志薄弱なれば、事に當りて狼狽し、適々臣下に其人を得たるも信じて之を用ゆる能はず、積年の弊政をして急轉直下の底に沈ましめぬ。吾人史を把て之を観るに、如何に其父若くは其祖父に豪君明主を觀くも、其二代若くは其三代にして愚蒙ならんか、其終を善くせざるとは各國各史を通じて同揆とす、而して佛も亦た其禍を免ると能はざりし也。況んや此時に當りては、英がクローンウエルの大革命を遂げし以來、歐洲各國には自由の思想發々として入り來り、特に佛國に於ても、ル井十四世が「朕は國家なり」と傲語したる反動を受けて、ルソー起り、ヴォルテール立ち、革命の火は已に社會の全面に燃え揚らんとする途端、恰も米國に獨立の大戦争が起りたれば、其自由の思

想なるものが、大風に吹かるゝ猛火となりて、現出せんとは、蓋し敵の免がれざりしところなりき。

且つ吾人が興亡史より近世史を通じて見たる如く、佛人は英雄崇拜の人種なり、故に其英雄が全盛を振ふ時に於ては、己のが自由を犠牲に供するとも亦た顧みるものにあらず、然れども彼等が其國勢を落す時に際すれば、非常なる反對の態度に出で、其反對の激烈なるや、幾千萬の虐殺も亦た辭するものにあらざることは、已に往時に見るところなり。然則其慘狀が前述の如きに至りしことは、是れ亦た怪しむに足らざるなり。然るに爰に最も着目すべきは、此革命の結果、即ち自由を叫びたる結果、其纏りの着き難くして、遂に專横主義の那翁を戴き、果てはル井十八世を呼び出したること是れなりとす。

爾ふ吾人が近世史に於てクローンウエル時代を論じたるの條項に見よ、何んぞ其情勢を同ふすることの酷甚しきや。クローンウエルはチャールズ一世を殺したり、而かも亦た己れ自らチャールズ一世の如き專横家となり、而して己れの後には

更にチャールズ二世を出すの奇劇を見せしめたり(歴史は繰り返すとは實に此等を云ふなるべし)。然りと雖も彼れクロンツェルの後には、英國に専制君主を榮へさせたる跡あるを見ざる如く、此の佛國に於ても、革命後及び那翁の後は、又たルネ十四世の如きものを出す能はず、偶々第三那翁の如き怪物を出せしも、是れ霎時の變象なりし。然則彼れ英の革命も、此れ佛の革命も、其自由の目的を達したるに於ては一なりとす。凡眼を以て讀過すれば、折角の自由運動も多量の血を流したる革命の跡も、元の木阿彌に歸したるが如しと雖も、而かも遠眼を以て之を觀れば、いづれも人類が自由の道に一段落を着けたるものと謂はざるべからず、即ち爾來十九世紀に於ける自由と人道との發展は、皆此激動より横溢し來れるものと爲さざるべからず、之を是れ忘るべからず。

那翁論

吾人は比較的長く那翁傳を陳べたり、是れ猶ほ近世史に於て、比較的長くルネ十四世、ピータル大帝、及びフレデリック大王を陳べたるが如し。ルネ十四世に就ては、王家の専横的隆盛が國民の發達を妨ぐることも助けざりしゆえんを説明せんが爲め、ピータル大帝に就ては、開國進取の策を取り、萬乘の尊に居りながら、其身は平民的に行動し、帝王と國家との一致を圖り、遂に半開の國を掲げて、歐洲列國と其肩を比べしむるに至りたる大成功を叙せんが爲め、フレデリック大王に就ては其地方の侯族より身を起しながら、英邁果斷、終に天下を相手とするも猶ほ屈せず、「朕は國民の奴隸なり」とて、善く當時の趨勢を看破し、宜い加減に戦争を停め、後日の子孫をして、歐洲の中原に霸たらしむべき基礎を置きたる模範的君主の勳止を示さんが爲めなり。

然則那翁に就ては如何、曰く那翁は實に一代の傑物なり。然れども前述にかゝ

るものを以て、決して那翁一個の傳記と見るべからず、此間世間の文明と其の發達とに關する無限の意味の存することあるを知らざるべからず。那翁が一個の功名心に驅られたることに疑ひなし、然れども那翁の心には、猶ほ佛國革命の目的たる一大理想を畫き居たるに相違なきなり。彼れは所謂「ナポレオン法律」を作り、之れを歐洲諸國の間に行はしめんと欲したるなり、而して此の法律たるや、決して暴君專制的のものにはあらざりき。彼れは己のが兄弟若くは己のが將軍を以て、征服國に王たらしめ、其權威を擴張せんことに汲々たりき、而かも之をして暴君たらしめんとは企圖し居らざりし。其一身の行動を見るときは、屢々クーデターを行ひ、議會を解散し、元老院を無視し、殆んど暴君に類するものなきにあらず。然れども此は只だ一時己のが大目的を達するまでの手段にして、物其物を喜んで爲したるにはあらざりき。彼れは法王を押し籠めたり、然れども是れ法王が我が帝國主義に抗したるによる、宗教を蔑如したるが爲めにあらず。彼れは武を以て天下を靡けんとせり、然れども其時の文學

者ゴエテ若くはウィーラントを召待し、頗る之を敬したる跡より見るも、又その埃及の役に、數多の博物學者若くは地理學者等を伴ひ行きたるところより見るも、終には文を以て天下を治めんと企圖したりしや知るべき也。之を要するに彼れは一時專横を以て事を爲し、事定りて後に、平常の權利を國民に與へんと欲したるが如し。武を以て天下を一統し置き、文を以て之を治めんとを期したるもの、如し、然而して其の之を爲すに及ばずして斃れ、手段のみにて其目的を達すること能はざりしも、其跡に就て觀るときには、凡そ那翁の蹂躪したる國土には、最早や決して封建時代より殘存し來れる、貴族若くは王者の政體を容るさず、爾來其民をして自由の動作を取るに尠からざる便宜を與へしめたり、是れ豈佛國革命の目的たる理想の幾分かを成就せしめたるにあらずとせんや。即ち那翁は儘に人民進歩の發展に、一大便宜を與へたるものと謂はざるべからず。

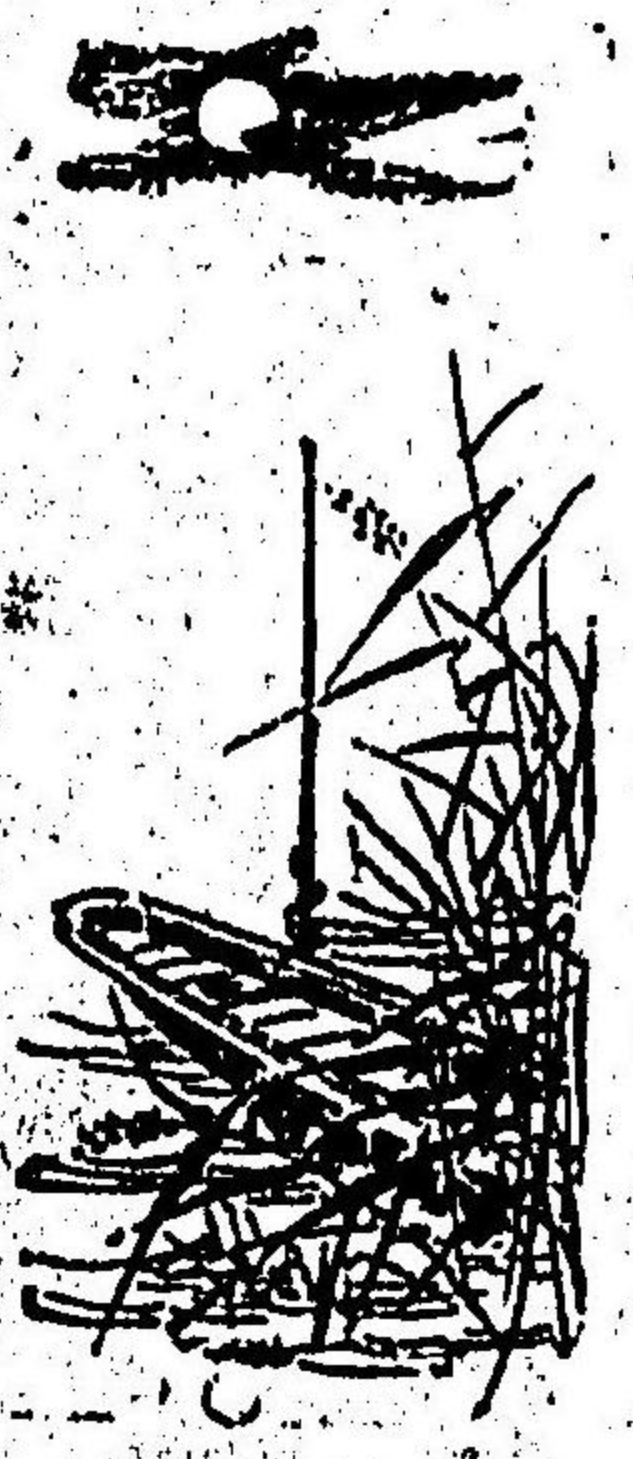
其れ然り然れども其一身上の汚點と失策とを稽るときには、陋と云ひ又た無智

と稱せんことの當れるを見る。其のソロセフヒンを娶りしとき、己れより年長者たるの故を以て、其生時を詐はれる如き、其四十歳を超へながら、十三歳の少女を所望したる如き、卑劣の手段を以て其敵手を陥れたる如き、何んたる陋ぞ。又た眞に其理想的の政治を天下に施さんと欲せば、暫く隣邦と平和を結び、何んぞ先づ之を其國に行はざりしや。人あり曰く、那翁は唯り之を佛國にのみ望まず、天下を従へて後に、普く之を萬民に施さんと欲せしなりと。曰く然則ち那翁は時の大勢を知らざる蒙者たらざるを得ず、那翁はシーザルを夢みたり、チャーレマンを夢みたり、而かも時勢は己に昔日と其趣を異にす、夫れシーザル若くはチャーレマン時代には宇内に數多の國家ありしも、民族ありしも、今日之の如く愛國心に滿てる又た自由の精神に滿てる國家的民族にてはあらざりき。然るに那翁の時には、英の屈せざるあり、露の猶ほ強を持して動かざるあり、而して昔は當時墮落せしも、フレデリック大王以來に涵養せられたる士氣の依然として存するありき。こゝを以て、一時之を擊破し得るども、到底無事に之

を治むること能はざるや知るべきなり。然るを往き往て止まるを知らず、畢に大敗するところとなることは、理の最も見易きもの、之を無智と謂はずして何ぞ。想ふに那翁の母公は那翁よりも賢者たりしならん、一日那翁を戒しめて曰く、汝が何點までも天下を敵手として進むの勇氣や稱すべし、而かも是れ善終の道におらざるべし、請ふ願ふよと、然るに那翁は之を意に介せず、益々猪突猛進するのみかは、已に天下を并呑し去りたる心地して、爰に之を躡るべき嗣子を設けんが爲め、更に十九歳の花嫁を迎へしかば、此時母公は更に當時集り居たる其子等即ち那翁の弟妹等に告げて曰く、ア、汝の兄も最早や終焉となれり、今にして早く後日の計を爲し、何時如何なる運命に出會ふとも、乞食に成り下らざる用意を爲せよと、而して果して其言の如くなりし。即ち那翁の人望も勢力も、此花嫁を迎へし時より落ち始めたるなり。驕るものは久しからず、只だ春の夜の夢の如しとは、今も昔も變らざりけり。左れば那翁に於ても、其セントヘレナに流されて後、徐ろに一生を顧みて懺悔して曰く、ア、人の意外に早く

成功するは幸願にあらず、天下に不可能事なしと誤信するに至るを以てなりと、一括能く其弱點を言ひ盡くしたりと謂ふべきなり。然則吾人今更何をか謂はんや、其失敗の原因に至りては、那翁の母公前に之を看破し、那翁自ら後に之れを自白せり。ア、ビートルの後に、露國天下を呑み、フレデリックの後に、其子孫皇帝となりしも、那翁の後や終に雲散霧消せり、然而して其の出現の宇内に大影響を及ぼしたること、其末路の衰れさを思ふときは、吾人は之を英のクロンツェルに似たりとや謂はん。

三百四十一



第五章

日耳曼史

普魯西の勃興は、奥國をして最早や帝權を振はしむる能はずなりぬ。然れども名義は依然として存するに由り、吾人はこゝに先づ奥國を叙せざるべからず。

奥國

- 奥家の相續問題
- 七年戦争時代
- 波蘭分轄問題
- 奥家の相續戦争
- ヨゼフ二世時代
- ヨゼフ二世の政治

第五章 日耳曼史 奥國

歐洲近世史に於ては、千七百四十年チャールス六世死し、其女マリア、テリサ其後を嗣きたるまでに及べり。然るに同書なる普國史中に見る如く、女性の帝位に即くは遠慮なりとして、故障を入るゝもの日耳曼の諸侯より起り、バヴアリアの撰舉侯チャールス、アルベルト、サクソニーの撰舉侯にて當時波蘭の王たるオーガスタス三世、并に西班牙の王までが、種々の縁故を以て、日耳曼の帝位と埃國の王位とに即くべき權利ありと主張するに至り、普のフレデリック大王は、帝位を要求すべき口實なきも、埃領シレシアを我れに割かしむべき權利ありとなし、伊のサルデニア王は同じくミランを割かしむべき理由ありと爲して出で來れり。されば埃は此際右の諸侯并に諸王と戦はざるを得ざる境遇に陥りたり。

埃家の相續戰爭

此戰爭に就ては近世史なる普國史中に詳記したるを以て、こゝには略記し、唯だ遺漏のみを掲げて其繁を省くべし。即ち普王フレデリックがシレシヤを襲ふや、バヴアリアのチャールス、アルベルトは佛の援助

を得て、直ちにボヘミヤに侵入せり。然るにマリア、テリサは時に年二十三にして、已にローレインのフレデリック二世に嫁して一子を擧げ居りしが、直ちにフランスボルグに議會を召集し、其子を其腕に抱きながら、女性と侮りて普若くはバヴアリアが、無法にも我國を滅さんとする、涙と共に訴へければ、埃國民は固より匈牙利人までも、之れが爲めに感激せられ、『さらば我王マリア、テリサの爲めに死せしめよ』とて大に戦ひ、チャールス、アルベルトをして意を得せしめざりき。尤もアルベルトは其後フランスのフォルトに於て、『我こそは日耳曼帝たれ』と宣言し、自ら稱してチャールス七世となれり。又た普に對しては、勝敗互に當りしが、結局フレデリックにシリシヤを讓ることとなりて、フランスの平和條約となり、更にマリア、テリサが佛とバヴアリアとを破るに及んで、又た之と兵を交へ、遣回はいよく大戦となり、此際英と蘭とサクソニーとは、種々の關係より埃に與し、佛と西と普とバヴアリアとを敵手として混戦したり。斯くて其後ドレスデンの平和條約となり、同時にチャールス、アルベルトも死し

たれば、日耳曼の諸侯并に普王も之れに加はり、マリア、テリサの夫たるローレンのフレデリックを帝位に即け、之をフランシス一世と稱するに至れり。而かも権力は依然としてマリア、テリサに歸し、奥家の相續戦争は一先づこゝに局を結べり、時に千七百四十五年。

七年戦争時代

實にマリア、テリサなるものは、當代に於ける女傑なりき。左れば平和の時代となるや、内政は時の賢者コーニツ公を用ひて、善く臣下を服さしめ、軍事はグウン伯を用ひて、十分に整頓せしめ、外交には身親ら之れに當りて、巧みに天下の帝王を操り、運回は英、露、佛、サキソニーをも、己れに附せしめ、更に普を挫がんと企てたり。尤も英は其後離れて普に與みしたれども、左る代りに瑞典の來りて、我れに投ずることなりたれば、即ち七年戦争なるものは、殆んど普を孤立せしめての大戦となりたるなり。其手腕亦た驚くべきにあらずや。吾人はこゝに七年戦争を描かざるべし、是れ普國史に詳記したるものなればなり。

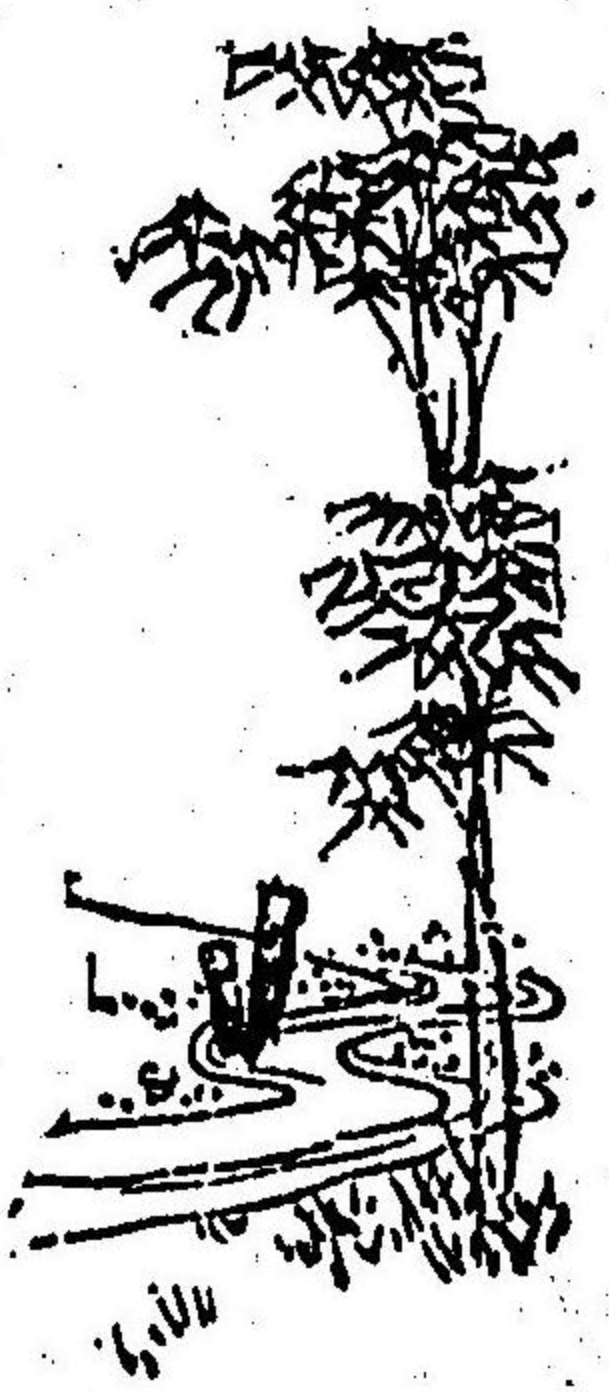
ヨセフ二世の時代

七年戦争は千七百六十三年に其局を結びしが、其後二年にしてフランシス一世死したれば、其子ヨセフ二世其後を嗣ぎたり。然れども其母マリア、テリサは當時猶ほ存在してければ、勿論政治は依然として此女丈夫の掌中に存せり。然るに此時に當りて、普も七年戦争の波弊を受けて、最早や以前の如き猛氣を振ふ能はざるに至りしのみか、此際ヨセフはかねてフレデリック大王の人格に感服し居りしを以て、可成普と和するの態度に出でしが、マリア、テリサも亦た敢て之を争はず、遂に有名なる波蘭分割の問題となれり。此問題は最初露の女帝カタリン二世の呈出したるものにて、普の大王之れに和し、終にテリサに交渉することゝなりたるものなり。而して其の結果として、波蘭は其地の三分一と人口の半とを此三國間に分割せらるゝに至りし也近世史なる普國史并に波蘭史参照之をヨセフが即位後第一の大出来たりとす、時に千七百七十二年。次に起りたるバグアリア相續問題なり。當時バグアリアの血統絶へ、バラチナットのチャーレス、テオドル之れが相續者たるべきを、

ヨセフは此國を我領地に合せんと欲し、已に兵力に訴へんとせしに、普王の拒むところとなるのみか、露佛も之れに反對せしかば、止むなく一小部分を削きしのみにて満足せり、時に千七百七十七年。次にはマ・リ・ヤ・テ・リ・ツの死したることす。顧みれば、此女や實に一代に傑出したる女性なりき。管に武勇に於てのみならず、又た善く文治に努め、先づ教育の普及に志し、次で殖産を勵まし、虚學を制し、勤儉を勧め、己れ宗教の熱信者なりしも、當時僧侶の餘りに權威を濫用するものあるを壓へ、財政を整理し、軍隊を改革し、已に滅びんと爲したる埃家の權勢を恢復せしめたりき。左れば人呼んで之を普の大王と并稱するに至れり、時に千七百八十年、テリツの齡は六十三歳なりき。次には更にバツアリアのチャールズ、テオドールと約し、其地を埃に合せしめ、其の代りに埃領チザランドをテオドールに與んと爲せしも、更に普王の反對に會ふて能はず、由て土耳其を撃つべき援助を露に與へんことを約して之れと結び、遂に普王を孤立せしむるに成功し、遂に時の來るを待ちしことなりき。又た此ヨセフたる

や、同じく其母の氣象と志望とを受け継ぎ、此際文治に於て盡力し、先づ極めて平民的に行動し、何人も皆彼れと心安く言ふことを得せしめ、憐憫を民に施し、拷問の刑を廢し、一時は死刑をも止め、奴隸を禁じ、宗教は古來より天主教を以て國教と爲せしも、勉めて寛容の態度に出で、新教にて用ゆる日耳曼譯の聖書を國中に行はれしめたり。尤も断然たる改革を爲したる爲めに、頗る反對を招きたることも尠からざりきとは云へ。又た彼れは此際國語を一定せんと欲し、匈牙利及びボヘミアに對して、其土語を廢すべきことを布告したる爲めに、終に此等の地に謀叛の旗を翻へさしめ、餘り急激に寺院制度を改革し、其領地を沒收することなどありしかば、所在反對の威嚇に會ひぬ。斯くて當時露のいよく土耳其を撃つに至りしかば、之を援けんが爲めに、自ら兵を引て出陣せしが、途中に於て疾病にかゝり、間もなく戦地より歸り來るや、内外共に其志を得ざりしを遺憾となし、病苦と憂慮との爲めに終に死せり、而して其死せんとするや、宮殿に於て聖餐を領け、「假令ひ我改革案が失敗に歸するとも、

我志や善たりし也、神は我罪過を赦し給ふべし」と自白せり、時に千七百八十
年也。



普 國

- ウイリアム二世時代
- 魂を弱めんを謀る
- 普國の叛敗
- 和蘭との開戦
- 更に波蘭の分割
- 學界の隆盛

近世史に於てはフレデリック大王までに及べり。左れば其後如何と尋ねるに、
大王の後は其甥たるフレデリック・ウイリアム二世之を嗣ぎたりしが、凡骨にし
て、兎ても大王の偉業を維持し能ふべくもあらず、漸く時の英物ヘルツベルグ
を宰相に得て、暫く勢價を落さざるを得たるのみ。斯くて即位後第一の出来事
を和蘭との開戦とす。當時和蘭に在る共和黨は、時の執權者オレンジのウイリ
アムを放逐せんと企てしかば、ウイリアムは此普王の姉妹を娶り居る縁故を以

て、助勢を普に求め來れり、因て直に兵を送りて和蘭の共和黨を征し、ウィリアムの地位をして強固のものとならしめたり、時に千七百八十七年。第二には更に埃を弱めんと圖りたること是れなり。當時埃のヨセフ二世大改革を施して、内國に騒動を起し、更に露と結んで土國に當り、百事多端の折柄なりければ、此際露と埃との強大を喜ばざる英、蘭、瑞典并に波蘭、土耳其までをも我同盟に入れしめ、以て密かにゲンチック及びトルン等の地を合せんと企てたり。然れども此企畫たるや、間もなく英蘭の爲めに看破せられ、彼等が現状維持を主張したるが爲めに敗れ、此の挫折の爲めに、普は益々其勢價を落すに至り、次でヘルツベルグも其位を去れり、時に千七百九十年、即ち吾人が前條にて埃國の歴史を結びたる同時代なり。

更に波蘭の分割

波蘭は往時に分割せられたり。然れども猶ほも其土地の三分の二を有し、人口の半を保ち居りしに、千七百八十九年に至りて、立憲黨の勢力を得るや、大に自由の制度に改め、以て國民的一致を圖らんとせり。

然るに之れに反對する露國黨なるものあり、ポトキを首領として之を覆さんと欲し、援を露國に求めしに、露國は忽ち十萬の兵を差し向けたり。立憲黨の首領コシユスコ及び其黨員等は毅然として起てり、而かも最早や十萬の敵にはあらず。普王フレデリック、ウイリアムは最初立憲黨を援助すべく約せり、而かも露の猛威に恐れて其約を守らざりしのみか、却て露と結びて、更に二國の間に此波蘭を割くこととなりぬ。斯くて此際露は八千八百方里の地と三百萬餘の人口とを得、普は二萬二千方里の地と百十萬餘の人口とを得たり、之を第二回の分割とす、時に千七百九十三年。然るに猶ほも残れる波蘭人民は、如何にも残念に堪へずやありけん、更にコシユスコを戴て謀反せしに、之を見たる普王は、直ちに兵を送りて之を壓し、間もなく露も之に加はり、いよいよ最後の打撃を與へて、今回は普露埃の三國間に其殘部を分割することとなり、此際普は波蘭の首府ワルソーを合せて、總計二萬一千方里の地と、人口百萬とを得、埃は一兵をも動かさざりしも、前役にも加はりしこととて、西ガリシアを合せ

て、總計普と同量の地と人口とを得、露は残りの全部即ち四萬三千方里の地と百二十萬の人口とを得たり、時に千七百九十五年なり。

普國の頹敗

フレデリック、ウイリアムは文治に於て努めざりしにあらす、人民の負擔を減じ教育を盛んにし、文學を奨励したりき。左れば此方面に於ては随分有名なる人物を出せしも、往時にフレデリック大王が佛のゲオルナール等を嘆賞したりしより、懷疑の説全國に滿ち渡り、宗教界に於ては、表面上所謂正統派の説教を爲せしも、其裏面に入れば、説教者其人も、其實は之を借せず、従つて偽善横行し、風俗頹敗し、道德疑はれ、愛國心衰へ、大王時代の士氣は、殆んど根據を失ふに至れり。

學界の隆盛

然るに此際日耳曼全體を見渡すときには、實に學界に於ける全盛時代なりき。レッシング及びカント等に由て呼び起されたる學究は、益々其歩を進め、フヒヒテ、セリング、ヘーゲル等は之れに次ぎ、文學に於ては巨人ゴエテを出し、ウイーラント、シルレル等之れに次ぎ、百般の學界に渡

りて有名なるヘルデル等は、此時に出でしなり、而かもこは更に後書に題を設けて説くべきを以て此には略す。



佛國革命時代

- 塊のリオポルド二世
- 普塊相合し佛に當らんとする
- 塊普對佛戰争
- 塊佛の對戰
- 塊露對佛戰争

- 普のフレデリック・ウイリアム二世
- 塊のフランシス二世
- 普佛に屈して和を結ぶ
- 塊佛と和す
- 塊遂に屈す

吾人は之れより塊普を個々に脱くの策を省き、佛國革命時代の下に并記すべし。蓋し此時に當りて佛國に起りたる大革命は、最早や塊普をして互に争ふの餘暇あらしめず、寧ろ相一致して佛に當るべく餘義なくせしめられたればなり。前條に陳ぶるが如く、千七百九十年に於て、塊のヨセフ二世は、急激の改革を

爲したる爲め反對を招き、次で露を援けて、土に當り、何れも失敗に歸して死し去りしが、其後弟リオポルド二世帝位に即きたり。然るに此時に當りて、佛國は所謂る革命の大動亂を極め、佛國より日耳曼に逃げ入る王黨其數を知らず、最初日耳曼の帝王并に諸侯等は、普て佛と隙あるより、此際隣國の禍害を心地好に眺め居たりき。然るに佛國民主黨の議論の漸く日耳曼に傳はるや、從來日耳曼帝王若くは諸侯より壓抑せられ居る平民等は、大に之れに同情を表し、諸方に自由、平等、兄弟の三大主義を傳唱するものを出すのみならず、果ては謀反の旗を翻さんとするものあるに至りければ、日耳曼の諸侯特に塊普の兩主は、是れ由々敷大事なりとて、此際佛の王黨を援けて、其民主黨に當らんと用意せり。乃ち千七百九十一年の夏に於て、リオポルド二世とフレデリック・ウイリアム二世とサキソニー侯とビルニクに相會し、當時佛より亡命し來れる佛王ルイ十六世の兄弟アルトア伯及び其他の貴族をもこゝに集めて相談を遂げたり。然るに未だ運動を始めざるに先ち、其翌年リオポルド死し、其子フランシス二

世帝位を嗣ぎしが、その之を嗣ぐや、直ちに佛に通牒して、速かに王家の權力を元に復し、日耳曼に逃れ居る王黨の貴族等と呼び還すべしと迫りしを相圖として、こゝに「佛對日耳曼」の戦争となりたり。

埃と普とは直ちに同盟して、各々兵を繰り出したたり、吾人は其大略を佛國史に見たり、而して今や此等の取況を詳説するの時を有せず、然れども順序の爲めに之を摘記すれば左の如し。

千七百九十二年の四月に至るや、埃はクレールフェイトを大將として一萬五千人、普はブランヌウィック公を大將として五萬人を繰り出し、相合じて佛境に入り、一時無敵の勢なりしも、終に佛將デヌムリエーの爲めに大敗し、次で普は輻重の積かざる爲め來因に退き去り、埃は白耳義に於て更にデヌムリエーの爲めに挫折せられ、ブラッセルは敵に傾せられ、何れも失敗に終りたり。尤も其翌年の初に於ては埃普更に相合してデヌムリエーを白耳義に撃て大に之を破り、デヌムリエーをして我れに投下せしむるに至りたり。然れども大體に於て

は、佛の猛力非常にして此際ルーチヒ、エークス、ミンツ、果てはフランクフオルトも一時佛の爲めに占領せられたり。

左れば埃普の已に佛に反して起ちたりと聞くや、此際英も露も蘭も西班牙も伊のサルデニアも、皆一齊に起つて佛國若くは佛領を侵し始めたり。斯くて日耳曼のみの方面を云ふときには、其翌年即ち千七百九十四年の初めに於て、英蘭埃及びハノヅエルまでも力を合せて、佛をチザランドに撃ち、一時大勝を得しも、其後佛の驍將ジュールダンとビシーグリュエーの爲めに敗られ、和蘭は終に陥られたり。又た之と同時に普軍の方面に於ては、ブルーヘルを戴て大に佛をワイセンホルク地方に破りしも、更にブランヌウィック公が此方面に於て敗られ、來因の左岸を敵に委して退きしより、普軍の勢威の衰ふると同時に、此際普王フレデリック、ツイリアムは、寧ろ苟かに佛と和するを智ありとなし、來因の左岸を佛に與へ、左る代りに他日佛が埃を挫きし節は、來因の右岸を普に與ふべしと約するに至れり。之をハーズルの條約とす、時に千七百九十五年四月也。

左れば埃國は普に出し抜かれて馬鹿を見たり、然れども猶ほも力を落さずして戦を持し、千七百九十五年の九月と十月との交に於ては、クレールフェイトとウルムゼルとをして來因附近に佛のヂエルゲンとビシーグリュエとを撃て之を破らしめしに、佛は之を聞て大に激し、左ればいよく埃を粉碎すべしと爲し、こゝに三大軍を組織し、千七百九十六年、一はジュールゲンを大將として下來因に、一はモローを大將として上來因に、一はナポレオンを大將として埃領なる伊太利に差し向けたり、而して來因の方面に於ては、當時埃軍にフランシス二世の弟なる太公チャールレスを出せし爲め、佛軍其意を得る能はずして退き、伊太利の方面に於ては、當時二十七歳の英雄那翁に敵するものはあることなかりき、即ち埃は來因河畔の戦の終りし後、彼れ太公チャールレスをして、此那翁に當らしめしも、大軍にして且つ勝ち誇りたる那翁の前には抗すべくもあらず、其漸々に退却するや、埃都ウヰンナも已に那翁の手の到着するところに来て置かるゝに至れり。因てフランシスは惶惶辭を卑ふして那翁に交渉し、此にカン

ポ、フォルミオの條約となりしなり。而して此條約に依れば埃領伊太利とネツランドとは全く佛に譲り、更にサルツボルの監督領とバヅアリアとを得る條件の下に、來因の左岸を佛に渡すべく約束し、普をして何んの得るころもなきに至らしめたり、時に千七百九十七年十月也。

斯くてカンポ、フォルミオの條約の後二ヶ月を経て、こゝにいよく條件確定の目的を以て佛獨兩國の委員は、バスタットに集められたり。然れども佛の要求するところは、いよく出でていよく暴なるを以て、事容易に纏まらず。兎角する中、英は益々佛に抗するの氣勢を示し、露も亦た之に合したれば、埃も終に其同盟軍に入りて、こゝに再び開戦となりぬ、時に千七百九十九年の一月なり。

此時那翁は埃及遠征の途に在りし。因て太公チャールレスは十分に其手腕を振ひ、忽ち來因河畔より佛軍を逐ふと同時に、露の猛將スワロフは大軍を率て來り會し、更に瑞西より伊太利に入り、折角那翁が建設したる伊太利なる連合共和國

も、殆んど破碎せられたり。尤も間もなくして埃露の間に衝突を起し、スワロ、フは伊太利を引きて去りしも、佛國の運命は此時大打撃を蒙れり。然るに一び那翁が之を聞て憤慨埃及より歸り來るや、直ちに伊太利を恢復するのみならず、大陸なるホーヘンリンデンに於ては、佛將モローが大勇を鼓し、八萬を以て埃の十萬を撃破し、進んでウヰンナを陥れんとするに至りしかば、埃は更にルネグイルに於て平和條約を結ぶに至れり、時に千八百一年二月なり。而して此條約によりて日耳曼は二萬四千方里の地と三百五十萬の人口とを佛に割かれ、猶ほ南日耳曼に於ては、佛に隸屬する三個の獨立國家を生せしむるに至れり。



那翁時代

- 露帝アレキサンドル一世
- 那翁ウヰンナに入る
- 普國の挫折
- 當時の情勢風俗
- 那翁伯林城下に入る
- 普國の再勃興
- スマインの施設
- 其手腕
- 學界にフヒヒテ出づ
- 埃の宰相スマアオン
- 更に埃佛の閉眼
- 埃普以外の日耳曼諸邦
- ハッセの英雄ドレンベルヒ
- ゾリンヌウイック公の奮闘

第五章 日耳曼史 那翁時代

- 英露埃對那翁戰爭
- オーストリアの大戦
- 普王フレデリックウヰリアム三世
- 普と那翁との大戦争
- 普いよく那翁に屈す
- 宰相スマイン起つ
- 陸軍にシアルンホルス現はる
- 普王并に其后妃の大奮發
- 埃國の消息
- 其政治
- 又々埃の挫折
- チロル敢然佛に抗す
- セルの英氣
- 那翁が露國遠征の當時

○運合軍の消息

○那翁對運合軍の戦争

○ウヰンナ大會の決議

○普國國民最後の大奮發

○那翁の流寇

千八百二年に於て、那翁はいよゝ終身の執政者となり、其翌年に至りて、更に英との開戦となり、直ちにハノヅエルを襲ふて之を領せしめたり。普王は今日に至るまで勉めて那翁の機嫌を取り、只だ北逆鱗に觸れざらんことを恐れしが、已にハノヅエルの亡ぶるに至らば、己のが運命も亦た且夕に迫ると爲し、將に英と交渉して佛に當らんとせり。因て那翁は此際決して普を脅かさざるべしと約して、之れに安心を興へ専ら英に當りたり。然れども此時に當りて、日耳曼は最早や獨立國として見るべからず、埃と云ひ、普と云ひ、孰れも那翁の鼻息を窺ふのみ。即ち千八百四年に於て、いよゝ那翁が帝位に即くや、日耳曼帝は實に那翁たりし也。

左れば日耳曼に帝名を擁する埃は、久しく之に堪ふべくも見へざりしに、千八百一年に薩帝ポロー一世死して、其子アレキサンドル一世位に即くや、壯年の銳氣を以て、何日までも、那翁が傍若無人の振舞を許す能はずとなし、忽ち英と同盟して、更に佛に當らんとせしかば、埃は再び其群に投ずるに至れり、時に千八百五年也。

那翁は埃の度々翻へり去るを憎み、さらばいよゝ埃都を陥れよと意氣捲きて、三十萬の大軍を起し來れり。埃は當時那翁が英を征せんと企畫せるを聞き、少しく油断の姿なりしに、那翁の舉動電雷の如く、みるゝ中に攻め來り、埃將のマックスを其兵二萬五千と共にウルムに降し、直ちにウヰンナに入り込みたり。露帝アレキサンドル一世は埃に合するの計算なりし、而かも及ばず、依て普に到りてフレデリック、ウイリアムに脱き、共に俱にせんことを勧め、豫め承諾を得て、いよゝ埃境に繰り出したり。埃王フランスは其都を領せられて入る能はず、太公チャールスの伊太利に在るもの呼び寄せ、更に一大戦争を試みん心算なりき。因て那翁は之を聞くや、其の彼等が大軍を擁せざるに先ち

て、之を撃つを上策となし、こゝにオーストリックの大戦となりし也。此役や露塊の兩帝相合して那翁に當りしとは云へ、實に十分に軍備を爲さざる中に攻撃されしことなれば、所謂不意打を喰ひし也、而して露帝は出奔し、塊帝はフランスホルグに於て和を請ひ、いよく那翁の膝下に叩頭するに至りし也、時に千八百五年佛國史中に詳記したるを以てこゝに畧す。

普國の挫折

千七百九十五年、パースルの條約によりて佛と和してより、

塊は幾度か起つて佛と戦ひしも、普は雌伏して起たず。然るに千七百九十七年に於て、フレデリック、ウイリアム二世死し、其子フレデリック、ウイリアム三世立しが、此王は温厚なる君子にして、當時風俗の頹廢したる中にも、能く品行を保ち、其の後妃マクレンボルグ、ストリッツのルネサも才美を兼ね備へたる女性なりしかば、頗る國民の賞嘆を受けぬ、而かも孰れも軍國を率ひ得るの人格にはあざりき。兎角する中、ゴエテ的の文學の盛んなれば、盛んなるほど、國民一般に遊惰に流れ、常備軍は大王以來の制度に従ひ、二十萬の多きを有せ

しも、士官等は皆貴族の子弟より成り、兵士また實戦に習はず、隣國等は憤然起つて那翁と争ふも、普國のみは終始那翁の機嫌を取り居たるを以て、元氣はいよく銷沈し去れり。然るに露帝アレキサンドル一世は、此際是非とも普國を同盟軍に導んと欲し、態々來りて説く處ありしかば、終に之れに屬まされて、將に大兵を出さんとする途端、例のオーストリックの敗報に接したる也。

那翁は之を知り居たり、而して徐ろに之れに備へつゝありしが、普の内閣にメタインなるものあり、大に開戦を主張し、后妃も亦た之れに和したれば、今は全國皆之れに靡き、いよく驟然として起つに至れり。

當時普軍を率ひしは、例のブランズウィック公なりしが、此公時に歳七十二、固より血氣盛りの那翁に當るべくもあらず、殊に那翁は二十萬の兵を擁し、我れは十五萬に足らざりしかば、其勝敗や豫め知り難きにあざりき。而して此際塊は已に那翁と和して中立を保ち、露は未だ兵を繰り出すに及ばざりしに、早くも此に開戦となりし也。此役やブランズウィックは中堅を引て、ワイマル

に陣し、ル非、フェルデナンド親王はサールフエルトに屯し、ホーエンローエ親王はエナに控へしなり。然るに那翁は例の電光的運行を以て、直ちにフェルデナンドを襲ふて之を殺し、三日の後にエナに來り、更にホーエンローエを破りて之を潰走せしめしかば、フランスウィックは急に之を救はんと馳せ行く中、オーエルスタットに於て佛將ダゾーの軍に會ひ、忽ちこゝに衝突せしが、此際普は兵數に於て多かりしも、又た例のブルーヘルを騎兵の指揮官に殿き居りしも、フランスウィックが死すべき重傷を負ふに至るや、また敵軍を支へ得べくもあらず。斯くて大軍已に大敗するに至れば、其れより那翁が伯林に進む間に於ては、能く之に抗する者あるなく、沿道の諸堡臺は盡く陥り、那翁は遂に千八百六年の十月、伯林の城下に入り來れり。ホーエンローエは猶ほも殘兵一萬を擁してフレンツローに立て籠り居たりき。ブルーヘルと他の一猛將ヨークとは、猶ほもルーベックに於て拒ぎたりき。然れども皆孰れも降るべく餘義なくせられ、普王フレデリックウイリアム三世は、后妃と共に都城を落ち延び、諸

方の市府并に堡臺等は其後皆續々那翁の將軍の爲めに陥られ、普國は全く征服せられたりぬ。於此乎那翁は此際實に大得意となり、其伯林に入り來るや、直ちにフレデリック大王の墓に行き、之れに納めある寶物を奪ひ去り、墓前に立て、「大王如何」と一喝を喰はせしかば、普民の憤慨其極點に達したりと云ふ。此の如くして、普都は陥りたり、普王は亡げたり、諸將は降りたり、而して前途更に恢復の望なかりき。然るに此時に當りて、露帝アレキサンドルは如何にも残念とや思ひけん、エイローに來りて那翁と一大決戦を爲し、終に那翁を退却せしめしかば佛國史と露國史に在り、普は聊か之れが爲めに其心を強ふると同時に、此際露帝が態々普王をバルチンスタインに訪ひ、決して那翁に降るまじく相談するに至れるを以て、更に大希望を抱くに至りしに、其後露帝が更にフリートラントに於て那翁に破らるゝや、間もなく普國に反いて之と同盟を結ぶに至りしかば、普王をしていよく大失望に陥らしめ、チルジットの平和條約によりて、其土地と人口との半とを佛に譲らしむるに至りたり、時に千八

百七年の七月なり。

三百六十八

普國の再勃興

今や歐洲大陸は全く那翁の爲に征服せられたぬ、而して其中最も憫れなるは普國なりし。然るに此際普國に一大政治家現はれたり、之を男爵スタインとす。スタインは從來大藏大臣として内閣に列し、恰も英のピトの如く、どこ迄も那翁に反對するを以て目的となせしが、前述の如き大打撃に遇ひ、今や國を擧げて殆んど那翁に臣仕せざるを得ざる悲境に立ち至りければ、いよ／＼憤怒の情に禁へず、幸にも此際普王より首相の權力を與へられれば、如何にもして爰に挽回の大策を立てんと工夫せり。而して彼れは謂へらく、凡そ今日の如く普國の墮落し來れる原由は、人民が冷理の哲學を喜び、軟弱の文學を迎へ、個人的の華美を樂しみ、而して國家的雄大の氣象を失ひたるに坐す。故に之を爰に奮起せしめんには、國民をして國政に參與せしめ、國家の盛衰興亡に就ては、直接國民に關係するところあるを知らしめざるべからず。於此乎彼れは此際國政に大改革を加へ、先づ第一古代より因襲し來れる、

地主屬の農夫を解き、之をして自主自由の公民たらしめ、従つて普國の休戚に任ずる一の國民とならしめたり。次には從來より商業組合の羈絆に繋かれ、公役の制度に束縛せられ居たる市民をして、總て自由自活の方針に向はしめたり。而して國民全體に關しては、此際地方に代議的州會を開かしめ、首府には全國議會を召集し、總て國民と共に天下を治むるの道に出で、普魯西をして純然たる立憲政體の國とならしめたり。左れば從來の貴族若くは官吏等は不平を漏せり、而して王家に屬するものは、是れ自ら卑むものなり、平民をして徒らに傲らしむる危険を生ずるのみとて、痛く此政策を攻撃せり。然ども普王フレデリック・ウィリアム三世が之を允るして、其良結果を得んことを疑はざりしかば、敢て之れに反抗するとなかりしに、果して人民より大歡迎を受け、普國の人氣は忽ち之れが爲めに大活動を起さんとするに至れり。尤もスタインは之れが爲めに、那翁より其大謀反心を懐きつゝあるものなりと詰られ、畢に其職をハルデンベルヒに譲り暫く埃國に去るに至れり、時に千八百九年也。

然るに更らに又た爰に陸軍に於ける一大人物現はれたり、之れをシアルンホル
 スとす。彼れはハノヅエルの産なりしが、來りて伯林の陸軍大學に教鞭を取り
 居り、次でフレデリック、ウイリアム三世に用ひられ、今や陸軍大臣の職に在り
 き。彼れは此際陸軍に大改革を加へんと企て、先づ第一傭兵を用ゆることを禁
 じ、血統によらず力量によりて人を登庸するの方針に出で、訓練は儀式よりも
 寧ろ實戦に適するものに變更し、當時那翁の爲めに、普國の常備軍は四萬と千
 人を越ゆべからずと制限せられたれば、巧みに工夫を廻らし、此常備兵の滯營
 を極めて短期のものと爲し、人民をして間斷なく兵役に屬かしめ、因て以て何
 時^つにても戦ひ得る兵士を制限外に四倍も五倍も備へ得たるのみならず、之れが
 爲めに獎武の氣象を鼓舞して、惰弱の弊風を一洗せしめられたれば、彼れスタイン
 の政治改革と相待て、多大の元氣を國民に與へたりき。

又た普王フレデリック、ウイリアム三世并に其后妃ルイサ等は、暫時王都なる伯
 林を退てコニグスベルグに託居せしが、此間質素勤勉の生活を學び、從來の如

き華奢虚榮の惡習を全廢し、加ふるに王族貴族の間に「道德同盟」なるものを
 組織し、互に勵み勵まれて、身を修め國を愛するの大精神を奮起するに至りけ
 れば、上の好むところ下之れより太甚しき譬の如く、舉國の民も亦た之れに勵
 されて、普國は恰も甦生したる如く變化し來れり。

斯くて又た學界に於て之を見るときには、此際愛國の哲學者フキヒラ出でた
 るなり。彼れはツキソニーの産なるも、同じくフレデリック、ウイリアムに招か
 れて伯林に來り、其學生に向ふて、有名なる「日耳曼國民に告ぐ」と云へる大
 演説を爲し、「日耳曼人民こそ眞に利私的ならざる、而して自由なる智識の燃料
 たるを得るものなれば、此國民にして亡びんか、天下また高貴なる人生の觀念
 を世に興るものなかるべし」と喝破し、當時古代の日耳曼を紹介して、盛んに
 人心を鼓舞しつゝありし彼れ「ローマンチック詩人」仲間のシュレゲル等と相
 和して、精神界の方面に働けり。

家貧ふして孝子起り、國危ふして忠臣顯はるとは、正に斯る時をや謂ふなるべ